ギルド受付嬢の冒険

東風になりきれない春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ギルド受付嬢の冒険

【Ｎコード】
Ｎ３０９２Ｙ

【作者名】
東風になりきれない春

【あらすじ】
クレセント王国とグランティオス帝国の戦争から５００年後。
『青の森の魔女』が活躍した時代から５００年以上すぎた今。
ひとりの少女が冒険者ギルドで受付嬢をしていました。
目的？　学費のためですがなにか？
そんな彼女がとある冒険者と出会ったことで、次々と変化していく話。

第一章　主な登場人物

～登場人物紹介～

・クリス＝ルクス　１６歳　女
男爵令嬢。でも土地があるだけ。お金はない！学費はギルド受付のバイトで稼いでます。
水の大精霊ウンディーネとの契約者。

・ヴァーヴァティ　１９歳　男
樹海で冒険者に拾われ、育てられた捨て子。
冒険者ギルドで唯一のＡランク。本名は長いので「ヴァン」と略している。

・ウンディーネ　年齢不詳　女
水系統の精霊の中で一番力を持つ精霊。
生まれたばかりのクリスの魂が水色だったので、水を司る存在として好感を持つ。
そのままそばで成長を見守るために無断で一方的に契約。

・名無し　年齢不詳　男
最近各地で起こる魔物や精霊の暴走事件にかかわっている青年。
とても強い魔法使い。

・エレオノーラ　年齢（三十路＋５００年程度）　女
かつてのクレセント王国の公爵夫人。

蒼の森の魔女と呼ばれ、絵本などにも登場する有名人。

・マリー　三十路～四十路前半　女
冒険者ギルドで昼番をしている女性。
クリスと同じ年頃の娘がいる。

クレナダの死霊　？

「――そして魔女はつよ～い錬金術で悪者をやっつけました。王国は平和になり、めでたしめでたし」

絵本を閉じて、こちらに微笑みかける母親の膝にすがった。

幼いクリスは青の目を細めて頬を染めて喜ぶ。

「すごいねえ、すごいねえ！いいなあ・・・このあと、おひめさまになるんでしょう？」

「そうよ、クリス。彼女の子どもたちがクレセント王国の王族と結婚することが多かったのですって」

「けっこん？」

「クリスが大きくなったらわかるわ。ずっと好きな人と一緒にいられるように、誰でも使える魔法よ」

クリスは「けっこん」と呟きながら、絵本の表紙をなでた。

『蒼の森の魔女（あおのもりのまじょ）　3巻　ダニージョ著』

むずかしい文字が多くてクリスにはすべて読み取ることはできなかったけれど、きらきらした絵本の世界は知っていた。

「わたし・・・大きくなったられんきんじゅつしになるわ！」

薄紫の髪の毛の頭をあげて、無邪気にクリスは笑った。

「クリス＝ルクス！立ちなさい！」

クリスはびくりと身を震わせて目を開けた。

どうやら授業中に眠ってしまっていたらしい。

教卓の前の歴史の講師は、彼の背後の黒板をたたきながら言った。
「立って、ここから１００年前後の歴史を説明すること」
「はい、先生」

失敗した・・・と思いながら、クリスは立ち上がって黒板に書かれた文字を読んだ。
「グランティオス帝国からの宣戦布告により、クレセント王国と帝国は戦争がはじまりました。戦争は7～8年ほど続いたと言われています」
「はい、よろしい。ではその後は？」
「はい、先生。その後は蒼の森の魔女の活躍により、クレセント王国が勝利します。そして帝国と合併して現在のモナド皇国になりました。現在の皇帝陛下は彼女の子孫で、５３代目。モナドは約５００年ほどの歴史を持つ国家です」

クリスの回答に講師は満足げに笑った。
「よろしい。付け加えるなら、蒼の森の魔女が嫁いだ先の公爵家が保有する騎士団のことも説明できれば満点ですよ。充分及第点ですが、授業は真面目に聞くように」
「はい、先生」

クリスはこれ以上失態を重ねないように従順にうなずいた。

授業が終わると、クリスは下校していくクラスの友人たちの波に逆らって別の校舎へ歩き出した。
後ろから友人が声をかけてくる。
「クリス？また錬金術学科に行くの？」
「そう。じゃあ用がないなら、私は行くから」

きっぱりと言い捨てて、クリスは颯爽と歩き去った。
クラスメイト達は顔を見合わせて、
「さすが鉄面皮。冷たい女だよなあ」
「あら、優しいわよ。このあいだ授業で当てられたときに、こっそり答えを教えてくれたもの」
「そうね。でも言い方がちょっときつくない？」
と、口々に不満を口にした。

クリス＝ルクスは成績優秀な特待生としてモナド国立魔術学校に在籍している。
実家が男爵家だが貴族の一端とは思えない貧しい暮らしなので、学費はアルバイトで支払っていると噂されていた。
クラスメイト達はそれが噂ではなく事実だと知っていたし、そのアルバイトが夜遅くまであるために寝不足になっている彼女を心配してもいた。

しかしクリスはそれらの気遣いを受け取らず、浅い交友関係を続ける少女だった。

クリスが錬金術師学科の学舎にたどりついたとき、ちょうど補習時間を知らせる鐘が鳴った。補習のない生徒にとっては下校の合図でもある。
クリスはそっと裏口から入って、近くの教室に入り込んだ。幸いまだこの補習の講師は来ていないらしい。

クリスは魔法学科の生徒である。
しかし好きな教科は錬金術だ。

それなら錬金術学科に入学すればいいと思われがちだが、実家の財政と学費のことを考えて授業料が半額に免除される特待生度をとると決めた。
特待生になるためには入試で1位から3位までのあいだに入らなければならない。
好きな錬金術よりも、魔法の素質の方が高かったクリスは泣く泣く魔法学科の門をたたいたのだ。
ただ諦めきれなくて、魔法学科の授業が終わった後に錬金術学科の補習にもぐりこむのが日常化していた。

クリスは目立たない端の席に座りながら、そっと右太ももに水色で刻印された紋をなぞった。
それもこれもすべて、この紋に宿る精霊のせいとも言える。
「やりたいことと、できることが違うって切ないわ」

クリスは１６歳にしては大人びたため息をついた。

錬金術学科の補習が終了し、クリスが学校の門をくぐるころには空は茜色から藍色へと変化する間際だった。
クリスは空に浮かぶ2つの太陽の位置を確認しながら、足早に学校からの狭い通学路を抜け、皇都の大通りへと出た。

空が藍色に染め上る少し前に、クリスは役所のような白い建物の前にたどりついた。
―――冒険者ギルド。
５００年前の戦乱時に職を失った傭兵を集めて、街の復興をはじめたのがきっかけで創立された組合である。
１０歳から登録可能な職業案内所のような場所だ。

しかしなかには相当難易度の高い魔物を狩るような依頼もある。
それらを目当てにする冒険者が多いことから、ただの組合ではなく冒険者ギルドと呼ばれるようになった。

クリスが中に入ると、受付にいた女性が立ち上がった。
「ああ、今日も間に合ってよかったわね」
「はい。マリーさん」

マリーはギルドの午前から夕方までの受付を担当している。
入れ替わりに夕方から扉を閉める夜中までがクリスの受け持ちだ。
夜の方がアルバイト代が高くなるのでクリスは万々歳なのだが、同じような年頃の娘を持つマリーはいつも心配そうにクリスを見る。
夜に来る利用者は魔物狩りで生計を立てているような乱暴者が多いせいだ。

ただ彼らに何を言われても、クリスは平然としている。
職務に忠実で真面目に、今日もお金を稼ぐだけだ。

2つの月が真上に差し掛かったころ、そろそろ業務を終了するかと職員と話していた時に彼はやってきた。
「おい・・・Aランクのヴァンだぞ」

背後で職員の男がぼそりと呟いた。
ギルドが依頼する案件はランク分けされている。
ランクE・・・子供のお使いレベル
ランクD・・・薬草や鉱物の採取
ランクC・・・害獣や低レベルの魔物の退治
ランクB・・・遺跡の調査隊の護衛や、高レベルの魔物退治

ランクA・・・災害規模の魔物退治
ランクS・・・前人未到
という具合だ。

魔物は瘴気というよくわからないが、よくないものに侵された動物のなれの果てらしい。
クリスは実際に見たことはなかったが、ギルドに来る冒険者たちの話からかなり危険な生き物だと認識していた。

その危険な生き物のなかでも、かなり強いものを倒したのがこのヴァンという男らしい。
クリスが受付のアルバイトを始めたときには、すでに彼はAランクに君臨していた。
Bランクに到達する冒険者はいても、Aランクは彼一人だ。
どれだけの難関かわかろうというものだ。

しかしその武功に反して、彼は茶髪に青の瞳。整っているが、やや軽薄そうな顔。
そしてやたら背が高いだけの普通の青年に見えた。
手に持っている魔法陣を刻んだ特殊そうな幅広の剣が不似合いだ。

だが、相手がだれであれ、仕事は仕事。
クリスは受付の席から彼に声をかけた。
「もうすぐ終了です。依頼完了の報告ならこちらへどうぞ」
「・・・ああ、悪い悪い」

青年は受付の台の上で、依頼完了の契約用紙を取り出してサインした。
名前は先ほど職員が言っていたように、ヴァンで間違いないようだ。
クリスはほかに記入漏れがないか確認したあと、保管していた用紙

を取り出す。
こちらはヴァンが仕事をこなした依頼を申請した契約用紙である。
申請の用紙と、完了の用紙を見比べて間違いないか見直す。
内容はBランクの魔物が徘徊する遺跡の調査員の護衛。
何も問題がないとわかると、さっさとクリスはギルドの了承印を押した。
「お疲れ様でした。依頼金はこの用紙を持って向こうの机でお受け取りください」
「わかった」

ヴァンはそう言ってさっさと去って行った。
それを見送ったクリスはほうっと体の力を抜いた。
「仕事の内容はすごいけど、Aランクでも普通の人じゃない・・・緊張して損した気分」

ギルドを後にしたヴァンは、依頼金を懐におさめながら思い返した。
Aランクということでやっかみ半分にからまれたり、職員の対応が妙に丁寧になったことはあったが、今回はたんたんと事務作業が進んだだけだった。
言葉のやり取りも必要最低限のみ。
「珍しいこともあるもんだな。ま、俺にはそっちのが楽だけど」
そう言ってヴァンは皇都の宿通りへ消えていった。

クレナダの死霊　？

その日もクリスはギルドの受付の夜番を務めていた。
ギルドの依頼掲示板の前に立って、依頼内容を訂正した新しい紙を張り付ける。
この依頼はもう1か月ほど掲示板に掲載され続けていた。内容は少しずつ更新されているものの、誰も達成できていない。

最初の依頼内容はモナド皇国北部にあるクレナダという村から、魔物が現れたかもしれないので調査してほしいというものだった。
魔物退治ではなく調査が目的だったので、Cランクに割り振って掲示板に掲載。
しかし依頼を受けた冒険者たちは帰ってこなかった。

そこで魔物の調査および村民と冒険者の安否確認のために、Bランクに内容を引き上げて掲載したが結果は芳しくなかった。
Bランク冒険者のなかでも古株で有名だったパーティだが、生きて皇都の地を踏めた者はひとりだけ。その彼もギルドにたどり着く前に街道で死亡しているのを、交易に訪れた商人が発見した有様だ。
そのことは商人が事件と見て皇国の騎士団に報告したため、なんとかギルドも把握することができた。

ここまで来ると魔物が存在している可能性はかなり高い。
それもBランクの冒険者が数人がかりで太刀打ちできない化け物級のものが。

そして先ほどのギルド内の会議で、依頼ランクはAに定まった。

「Aランクの依頼・・・あの人は受けるのかしら」
クリスは1か月ほど前に対応したことのある、世界で唯一のAランク冒険者の顔を思い浮かべた。
あの茶髪の青年はあちらこちらのギルド支部の依頼を転々としながら受けているらしく、あまり皇都のギルド本部に立ち寄らない。
けれど今回の依頼は他の冒険者では対応できないだろうから、一刻も早く彼に本部の掲示板を見てもらって引き受けてもらう必要がある。

そのとき入口付近で冒険者からの苦情に応対していたマリーがクリスを呼び寄せた。
「クリスちゃーん。雨が降ってきたから外の立て看板の回収お願い！私は手を離せないから」
「わかりました、マリーさん」

クリスはさっとスカートをひるがえしてギルド本部の建物を出た。
外に出て空を見上げると、曇天が重く立ち込めている。
心なしか空気中の水気が多いような気もした。
クリスは右太ももに描かれた水色の紋をなぞり、そっと名前をつむいだ。
「ウンディーネ、雨が降るまでにどれくらい余裕ある？」

クリスの呼びかけとともに、紋が光り輝いて空中に妙齢の女性が現れる。
彼女はクリスの契約している水の精霊ウンディーネだ。
といっても、クリスには契約を交わした覚えはない。両親の話では彼女が生まれて間もないころ、突然この契約の紋が浮かび上がったという。

精霊は気まぐれなので、ときどき人間の意志と関係なく契約を結ぶことがあるらしい。
ウンディーネはそれ以来ずっとクリスの側にいた。
クリスはその気安さゆえに「押しかけ精霊」と呼ぶこともある。
だが幼いころは姉のように慕って遊んでもらったので、ウンディーネのことは嫌いではない。水系統の魔法を使うときに制御しやすく、強力になるという利点もある。
しかも水の精霊の中でも上位に位置するらしいウンディーネは、魔術学科の生徒のあこがれの的だった。
ただ錬金術師になりたいクリスとしては、子どもっぽくも少々複雑な思いを感じているだけである。

ウンディーネは濃い青色のマーメイドラインのドレスの裾をなびかせて、空を見上げた。
魚のエラのような耳がひくひくと動いている。
彼女の体はほとんどが水分で出来ているのか、常に流形に震えていた。
「そうね～、この水の気配からすると～、たぶん1時間くらいで降ってくるんじゃないかしら～？」
作り物じみて表情のうごかない能面のような顔に似合わず、ウンディーネの口調は間延びして緊張感がない。
クリスはいつものことなので気にしないが、初めて精霊に会う人にとってはめったに会えないとされている上位精霊のイメージが崩れるだろうなと気の毒には思っていた。
ギルド内部の案内図を描いた立て看板を両手で抱えて、引きずるように中へ持っていく。

丈夫な木で出来た看板はなかなか重い。
誰かに手伝ってもらえばいいのだろうが、側にいるウンディーネに物理干渉の力はない。
かといって、通りすがりの人や冒険者に話しかけるのも面倒だ。
できるならアルバイトのとき以外で知らない人と話したくないとさえ思った。

なんとか中に運び入れると、夜明け前の空のような薄紫の髪のあいだから汗がしたたり落ちた。ウンディーネを紋の中に呼び戻してから、軽く手で汗をぬぐって受付の台に戻る。
少し離れていただけなのに、すでに数人の冒険者が並んでいた。
その中に例の茶髪の冒険者を見つけて、湖面のような瞳をまたたかせた。

入り口付近にいたはずなのに、彼が通り過ぎたのを見かけていない。
しかしヴァンは複数の嫉妬や羨望の混じった視線をあびながら、たしかにそこにいる。
クリスは気配なく建物内に入っていたヴァンに、初めてAランクの実力を感じた。

「はい、次の方どうぞ」
「この依頼を受けたいんだけど」
数分後、ヴァンの順番が回ってきた。
彼は手に先ほどクリスが掲示板に張りなおしたクレナダ村の依頼の紙を差し出した。
クリスは彼に引き受けてほしいとは思っていたが、こうも都合よく進むことに驚く。
「失礼ですが、この依頼は先ほどAランクに更新されたばかり。ど

うしてわかったんですか？」

いつもなら業務以外の言葉を発しないクリスが思わず尋ねてしまうと、ヴァンは顎に手を当てて首をかしげた。

「おかしいかな？あちこち回ってるから情報も入るのが早くてね。かなりひどいことになってるらしいし、どうせそのうち俺にまわってくるだろうと思って寄ってみただけ。更新されたばかりに来たのは偶然だね」

「情報・・・ですか」

「そうそう。行商人の噂とかすごいよ。まあ、それは置いておいて・・・これ俺が受けていいんだよね？」

ひらひらと依頼用紙を手に持って振りながらヴァンは言った。

クリスは「もちろんです」と答えてから冷静に気持ちを切り替えると、無駄口をたたいてしまったことを反省しながら依頼内容を説明した。

ヴァンが皇都のギルドで依頼を受けて数日後。

彼はクレナダ村に到着していた。しかし村に入らずに、周囲にある柵の前で立ち止まって近くの茂みに身を隠す。

村からは昼間だというのに物音一つしない。

男たちの作業する声も、女たちのかしましい話声も、子どもたちの遊びまわる歓声もない村は不気味に沈黙していた。

ヴァンは気配を消しつつ、柵の隙間から村の様子がよく見える場所へゆっくりと移動した。

途中で魔物に襲われ絶命した様子の男の死体を見つけた。

死体はすでに腐敗が始まっていて、致命傷がなにかまでは特定でき

ない。
ヴァンは男の検分を諦めて、村の中をうかがった。
遠目に広場らしき場所で動く人影がいくつか確認できる。
しかし動き方が人形遣いに操られた出来の悪い木偶のようで不自然だ。
首がかくりかくりと左右にぶれ、足はもつれさせながらさまよっている。
「これは死霊だ・・・村の中だけを死霊化させる呪いの魔法かな」
死霊は無念の思いを抱いて死亡した人の魂が瘴気にあたって魔物化したものだと言われている。
詳しいことは解明されていないが、戦場に多く出没することから推測的に間違っていないだろう。だからこそ、戦場でもない場所で死霊を見かけたら別の原因があると考える。
たちの悪いことに魔物から瘴気を取り出して、それを別の生き物に感染させる呪いの魔法があるらしい。
ヴァンは今回の事件はそれだろうと目星をつけた。なぜこのクレナダ村が呪われたのかまではわからないが、死霊の対策自体は難しくない。
死霊は生前の肉体の一部を核として残しているので、そこを破壊すれば倒せるのだ。
ただ、その肉体が内臓の一部であったり肉片だったりするので、なかなか発見できずに手こずる相手である。
一番効果的なのは魔物化させる原因の瘴気を、呪いごと浄化することだ。
ヴァンはちらりと背後の死体を振り返って、腐臭に顔をしかめた。
「俺の得意分野じゃないなあ。浄化のできる魔法使いの助っ人か、

錬金術の支援品が必要っぽい」

ひとり呟いて、さっさと撤退することに決めた。
ヴァンは力押しの物理攻撃を主とした戦闘スタイルをとっている。
魔法や錬成の技術は初級並で、使えないよりマシ程度だ。
もっぱら野宿の時に火をおこすために、炎の魔法を唱えるくらいだ。
それでも伊達にAランク冒険者をしていないと自負しているので、
無理やり村の中へ突入することは可能だろう。
だが瘴気を取り除けない限り、この村は瘴気に侵され続ける。
村人が生きているとは思えないが、生存者がいればそれも絶望的となるのだ。
しかもこの村を通りかかった別の生き物が、また死霊となるかもしれない可能性まで含んでいた。

ヴァンは村の外に放置されたまま朽ちていく男の死体を振り返り、
そっと死後の安寧を願う祈りの句を唱える。
「悪いな。早く皇都まで行ってまた戻ってこなきゃならないんだ。
悪く思うなよ」

なにかの拍子に村の外にまで呪いが及んだとき、この死体まで死霊化しないようにヴァンは男の周囲に枯枝を置いたあと、短い呪文を唱えて剣先に小さな炎をともして燃やした。
もともと魔力量が少ないヴァンは、初級魔法でもこうして剣に刻まれた増幅作用のある魔法の軌跡を必要とする。
枯れ木に燃え移った炎は風にあおられて、男の体を包み込んだ。
死体の欠片も残さず燃え尽きれば、死霊となるときに必要な核もないために瘴気にあたっても魔物化しない。

人間の焼ける嫌な匂いもやがて風にまぎれて消えていった。
ヴァンは完全に灰になったのを見届けると、皇都へ足早に戻った。

クレナダの死霊　？

「え、私がですか？」
クリスはヴァンの申し出に小首をかしげた。
クレナダ村の現状はたった今ヴァンから報告を受けた。
背後にある会議スペースで上司たちが今後の対応を話し合っている最中に、受付の台越しに向かい合ったクリスは、ヴァンから「助っ人として同行してくれないかな」と頼まれたのだ。
「私は冒険者ではありません」

クリスはきっぱりと断った。
たかが１６歳の学生が、死霊はびこる村まで魔物退治に行けるはずがない。
しかもパーティを組むのはギルド最高峰Ａランクのヴァンである。
足手まといにしかならないだろう。
しかしヴァンは緩く首を振って苦笑した。そして自身の後ろで相変わらず嫉妬と羨望の混じったうっとうしい視線の先の数人を指さす。
「俺が声をかければあいつらのうちの何人かはついてきてくれるだろうな。けど、俺が欲しいのは浄化のできる魔法使いか、その手段を知ってる錬金術師だ。実力を監視したり、物見遊山でついて行きたいやつらは御免だな」
「でしたら、腕の立つ魔法使いをお探しになったらいかがですか？ヴァンさんがギルドに登録されてから１０年以上たっていますし、心当たりの方もいらっしゃるのでは」
「いないこともないが時間がない。それに浄化の魔法はあんた得意だろ？」

その指摘にクリスは押し黙った。
浄化の魔法は一般的に水系統の魔法を使う。

青の森の魔女エレオノーラが伝えた魔法の中には、さらに上位の光系統の魔法で浄化する技もあるという。

エレオノーラは５００年前の戦争後、魔法を理論的に体系化し、錬金術の基礎を築いた。
火の魔法、土の魔法、風の魔法、水の魔法。そして５００年以前には発見されていなかった光と闇の魔法。
この最後の２つは、前の４つの魔法よりも魔力を消費するが、効果も大きいとされている。
モナド国立魔術学校の魔法学科では、それらの系統化された魔法をもとに講義が行われており、最終的には卒業する時にわずかでもいいから光か闇の魔法を使えるようになることが目標とされていた。

クリスはまだ修行中で光系統の魔法は使えなかったが、水系統の魔法ならウンディーネの力を借りて人の数倍の威力で発言させることができる。

よく思い返せば、あの雨の日。
クリスが立て看板を仕舞うところにウンディーネは立ち会っていた。
気づかなかったとはいえ、おそらく横を通り過ぎただろうヴァンには水の精霊の契約者であることがバレている可能性が高い。
そのことに思い当たったクリスはため息をついた。
錬金術師になりたいのに、どんどんその道から遠ざかっているのは気のせいだろうか。

関わりたくない、とクリスは眉を寄せた。
人と関わってわずらわしい思いをしたくない。
人間関係で悩みたくない。
そしてなにより傷つけられたくない。

幼いころからともにいるウンディーネくらいしか気づいていないが、いつも周りに冷たい対応のクリスの裏側はとても人見知りで怯える子どものままの部分があった。
色よい返事がもらえそうにないことが伝わったのか、目の前のヴァンは困ったように眉を下げた。
そうしているとやっぱり凄腕の冒険者には見えない。
街の土木業にたずさわる男たちの方がまだ筋肉もついてたくましい印象を受ける。

そうしているうちにギルドでの結論が出たのか、上司のひとりが近づいてきた。
クリスは椅子から立ち上がって、その場を初老の上司に譲った。
上司の男は疲れたように椅子に座ると、クリスに目礼したあとヴァンに話しかける。
「待たせたね、ヴァン君。こちらの結論としては魔法使いか錬金術師の支援を追加することに異論はない。その分の追加料金は本来依頼人が負担するものだが、依頼人の安否がわからないので、一時的にギルド負担に決まったよ」

ヴァンは無言でうなずいた。
むしろ依頼人が生きているとは思っていない様子だ。
「それで助っ人の件はどうなるんだ？俺としてはこの子に頼みたいんだけど」

ヴァンがクリスを指し示すと、上司は驚いた表情をした。
「この子はまだ学生だよ？・・・もしや契約精霊が顕現しているところを？」
「ああ、見たよ」

やはり見られていたらしい。
クリスは上司のわきに控えながら、そっと落ち込んだ。
湖面のように青く透き通った瞳が、彼女の内心を表して曇った。
もっと慎重に行動すべきだったかと思ったが、誰がこのようなことを想定できるだろうか。
そもそも皇都で暮らす人間で、一定以上魔法に関わる者ならクリスとウンディーネのことを知っていてもおかしくない。
現にギルドの採用試験に現れたクリスを見た試験官は、すぐに彼女が水の大精霊の契約者クリス＝ルクスだと気づいていた。
皇都に根をおろしていないヴァンでも、遠からずクリスの存在を知ったことだろう。

上司はしめつらしい表情で悩んでいたが、クリスに問いかけた。
「水の魔法を使うだけなら、君ほどの適任者はいないだろうね。ギルドとして答えるなら是非受けてほしい。だけど一人の上司として、大人としては安全なところで守られるべきの、まだ学生の君に危険なことはしてほしくない」
「・・・はい」
「ご家族とよく相談してみてくれ。・・・ただ、ことはひとつの村が魔物に蹂躙された極めて危険な状態だ。国に判断をあおぐことになるだろう。もし国もギルドと同様に君に応援を求めたときは・・・」

そのあとの言葉は口にしなかったが、クリスはこの初老の男が言いたいことを正確に理解した。
国家の命令となれば、ほとんど平民と変わらない生活をする末端とはいえ、貴族のクリスに否は唱えられない。
国家につらなるものは民を守る義務と、国を栄えさせる役目を背負う。

クレセント王国がモナド皇国になった当時から「高貴なるものの責務」として、貴族の家に生まれたものは、その責任の重さを教え諭されてきた。
二度とこの国に戦乱を起こさせないために、民を守る国家と貴族の模範は守られねばならない。

クリスは内心の苦い感情を押し殺してお辞儀した。
「心得ております。明日の朝までに家族の説得は済ませましょう。おそらく国の判断はギルドと大差ないでしょうから」
「すまない」
「お気になさらず。当然の義務です」

ヴァンはクリスと上司のやり取りを見ながら、驚きに目を見開いていた。
「あんたさっきと全然言うこと違うな。てっきり断られるかと思ってたよ」
「断ることができない状況になったのです。私は貴族の娘ですから」

クリスが能面のように感情の見えない顔で淡々と言うと、ヴァンは納得したようにうなうずいた。
「ああ、「高貴なるものの使命」とか「責務」とか言われてるやつか。あんたが貴族とは思わなかったよ・・・いや、いい意味でだ。俺が知ってる貴族はもっと近寄りがたい雰囲気とかあって苦手なんだよ」
「私の家は貴族と言っても、ギルドの受付をするほど資金繰りに困るような財政状態ですからね。普段の生活は一般の民と変わりません」
「・・・そ、そうなんだ」

答えに詰まった様子のヴァンに、クリスは内心苦笑した。
Aランクの実力を持つヴァンを雇うような金銭的余力のある裕福な貴族を、普通の貴族だと思っていたのだろうことが透けて見える。
実家の家計が火の車です、と堂々と言うような貴族には会ったことがないのだろう。
ばつが悪そうに頬をかく彼は年齢よりも幼く見えた。

夜のうちに王宮から使者が送られてきた。
ご丁寧にも口頭でなく、クレナダ村へAランク冒険者ヴァンとともに向かい事件を解決に導くように通達書を持参して。

翌朝、クリスは父親と母親に見送られてギルドへの道を歩いていた。
彼女のほかに兄妹はなく、一人娘が危険な場所へ赴くことを止められないことに両親はひどく罪悪感を持ったらしい。
見送る表情は苦悶に満ちていた。
彼らに精一杯の笑顔で手を振ることだけが、クリスに出来たことだった。

クリスは旅のあいだ動きやすいように薄紫の髪を耳の両サイドで結い、白の丈夫な革のブーツを履いている。
服は藍色を基本に、淡い水色で彩った丈の短いワンピースだ。
戦いには向かない衣装だが、右ふとももに刻印されているウンディーネの契約の紋を出せるようにしておかないと、いざというときすぐに彼女を呼び出せないかもしれなかった。
服で紋が覆われていても召喚可能だが、直接触れて実行したほうがこめる魔力も少なく、かかる時間も短いので便利なのだ。
手には母が用意したお弁当と、水。それから少しのお金が入った袋。

遠出の旅行くらいしか経験したことのないクリスは、なにが必要なのか判断がつかなかったので、ほかに必要なものがあれば道中買い揃えようと考えた。

ギルド本部の入口をくぐると、すでにヴァンが待っていた。
「おはようございます、ヴァンさん」
「おはようさん」

挨拶を交わしたヴァンはクリスを上から下まで眺めてきた。
クリスはやはりこの服は場違いなのだと、居心地の悪い思いで視線を受け止める。
「すみません。旅の服は手持ちになかったのです」
「そっか・・・そうだよね。冒険者じゃあるまいし。ま、あんたは後ろで援護してくれれば充分だから」
「はい。仕事は果たします」

気楽に言うヴァンに対して、クリスは生真面目な返答を返した。
そこに朝の受付の業務についていたマリーと、上司たちがふたりに気づいて近づいてきた。
マリーは心配げな表情でクリスの手を両手で包み込んだ。
「無理はしないようにね。ヴァンさんの言うことを聞いて、無事に帰ってきてね」
「ありがとうございます、マリーさん」

初老の上司も心配そうに顔をしかめている。
「おはよう、ふたりとも。気をつけて行っておいで。クリスの学校にはギルドから連絡をまわしておくから、そちらは任せなさい」

クリスはうなずいて礼を返した。ヴァンは背に負った自身の荷物を背負い直すと、クリスのほうを向いて笑った。

「じゃ、行くか！」

クレナダの死霊　？

皇都を出て街道を歩いているとき、ふとヴァンが口を開いた。
「そういえば俺たちお互いにまだ自己紹介もしてないんじゃない？」
「・・・そういえばそうですね」

クリスはヴァンの名前をギルドの受付として知っていたが、ヴァンはクリスのことを知らないだろう。
これから一時的とはいえパーティを組むというのに、初歩的なことを抜かしていたクリスは急いで名乗った。
「申し訳ありません。私はルクス男爵家の娘、クリス＝ルクスです。すでにご覧になったようですが、水の精霊ウンディーネの契約者を務めています」
「俺は知ってのとおりヴァンだ。樹海出身のＡランク冒険者してる」
「樹海！？」

クリスは驚愕のあまり口を開けたまま固まった。
樹海はモナド帝国やほかの国が根ざす、この大陸の北部に広がる森のことである。
魔物の巣窟として有名で、あまりの瘴気の濃さに近くに人間の村は存在しない。
「ああ。子どものころに、魔物退治に樹海に来た冒険者に拾われたんだよ」

言外に捨て子だったのだと言われて、クリスは追及の言葉を飲みこんだ。
魔物の跋扈する樹海に子どもを捨てるということは、実質死んでくれと願われているに等しい。
ヴァンは気にしたふうもなく、からからと笑って続きを口にした。

「じゃあ臨時パーティよろしく。敬語とかなしで頼むよ。かたくるしいのは背がかゆくなりそうだ。ついでに俺の不作法も許してくれるとうれしい」

ヴァンが笑っているので、クリスもこれ以上この話題は引きずるまいと決めた。

「わかったわ、ヴァン。これでいい？」

「ああ。クレナダ村まではこの調子で歩いて・・・そうだな。1日半くらいか」

「もっと早く歩けるわ」

「いや、普段の歩く速さをたもってほしい。体力勝負だからね。向かいながらどんな魔法を使えるかも聞いておきたいし」

クリスはヴァンの言葉に魔術学校で習った魔法を思い出して、ひとつひとつ説明していった。もちろん水系統の魔法を中心に話す。そうしているうちに日が暮れ、その日は開けた平原で野宿することになった。

昼はクリスの持参したお弁当で腹をふくらませたが、夜の分はヴァンが保存食を調理したものを食べた。

乾燥した肉を戻したスープは臭みもなくさっぱりとしていて、硬めのパンは塩味がきいて美味しい。保存食の質がいいのかヴァンの料理の腕がいいのかわからなかったが、野宿と聞いて質素で大味な食事を想像していたクリスは意外な心持ちで夕食を済ませた。

食べ終わった後、クリスはすっかり暗くなった周囲を見回した。遮るものが低木くらいしか見当たらない平原は、満天の夜空の素晴らしさを差し引いても恐ろしかった。

「ヴァン、どこか隠れられるようなものがあるところに移動しなくていいの？」

ヴァンはたき火の炎を枝でかきまわして調節しながら、
「ん？ああ、そっちのが急に襲われたとき対応しにくいんだよね。俺たちが隠れられるってことは、敵も隠れられるってこと。それなら見える範囲を広く持ったほうがいい」
と言った。クリスは納得したものの、少しだけ火の側に近づく。明るい場所の方がなんだか安心できる気がしたのだ。

ヴァンの茶色の髪が炎に照らされて金に光って見えた。
それ以外は闇に沈むように彼の印象を薄くしている。衣装が全体的に茶色で、使われている装飾具も黒なので余計に目立たない。なるほど、これが冒険者の服装なのかとクリスは感心した。
皮のジャケットも丈夫そうだし、ズボンの縫製もきちんとしていて長持ちしそうだ。
腰にベルトで固定した小さな黒いカバンには、ほころびひとつ見当たらない。

まじまじと見つめる視線に気づいたのか、ヴァンがその濃い青の瞳でクリスをいぶかしげに見てきた。
クリスはなんでもないと示すために首を振った。

次の日の昼過ぎ。
太陽が真上から少し傾いたあたりで、ようやくクレナダ村が見えてきた。
ヴァンがクリスの前に出て、指示を出す。
「俺が死霊を足止めしておくから、あんたは浄化に専念して。あと絶対に前には出ないこと。させない気持ちでいるけど、もし敵に近寄られたら結界で防御に専念してね」

「ええ、分はわきまえてるわ。・・・ウンディーネ、来て」

静かに答えて、クリスはウンディーネを召喚した。
右太ももの紋に手を置いて呼びかけると、すぐに呼応して輝き、水の精霊が顕現する。
ヴァンは一度見たとはいえ、上位精霊が珍しいのかウンディーネの姿をじっと見ている。

ウンディーネは泳ぐように空中で一回転すると、クリスの前に浮かんだ。
「ときどき見てたから～、事情は知ってるわ～。とにかく浄化すればいいのね～？」

優美な水の権化の外見と、おっとりとした口調の落差にヴァンがのけぞった。
「俺、しゃべるくらい力の強い精霊は初めて見たけど・・・」
「言わないで。ウンディーネが例外なのよ、きっと」
「・・・そっか」

ほかの上位精霊に会ったことはないクリスだが、夢を見るくらいは自由だろうとまだ戸惑っているヴァンを黙殺した。

クリスの緊張を適度にほぐすためか、ヴァンはときおり軽口をたたきながら村の入り口まですすんだ。
おかげでクリスは妙に気負うことなく毅然と立っていられる。
感謝しつつ、こちらを見るヴァンにうなずき返した。

そしてヴァンは村に一歩入った瞬間、爆発的な速さで駆け出した。
走りながら剣を振りぬき、手前にいた半透明の死霊を数体まとめて切り伏せる。

これだけでは核を失っていない死霊はいずれまた復活してしまうので、クリスはすぐに浄化の魔法を発動した。
手のひらを死霊たちに向けて、強く水の流れをイメージする。
伝説の青の森の魔女はそれだけで魔法を使いこなしたらしいが、クリスはイメージを言葉にしてより強く念じなければ魔法を発現させることは難しい。
魔法使いとしても錬金術師としても尊敬する彼女のような力があれば、と悔しく思いながら口を開いた。
「清らかな恵み。母なる海。慈しみの雨。・・・お願い鎮まって」

クリスの手のひらの前に水色の魔法陣が展開された。
ウンディーネがその魔法陣を指でちょんとつつくと、陣がゆっくりと回転しながら複数に分裂した。
ひとつひとつが分かれ、それぞれ死霊の真上に飛んでいく。
倒れたままの死霊は、上から降りてくる浄化の魔法を避けることはできない。
陣に包まれた死霊は光の粒子となって消滅した。

クリスとウンディーネの浄化作業を見て取ると、ヴァンがクリスを呼び寄せた。
「お見事！」
「ううん。まだ全部終わってないわ」

クリスは首を振って村の奥を見た。
ゆらゆらと体を左右に揺らしながら、死霊たちが集まってきている。
そのうちの一体でも襲われたらクリスは死ぬだろう。ヴァンは万が一のときは結界を張れと言っていたが、クリスは自分がとっさに魔法を発動させられるとは考えていなかった。
学校で模擬戦をしたことはあっても、実践は先ほどのが初めてだ。
ぞっとしながら両腕で自分自身を抱きしめる。

さっきは浄化に集中していたから気づかなかったが、死霊の死んだ瞬間を模した姿かたちもおぞましい。
半透明でもはっきり見える傷口から目をそらしたくなった。
不意に日がかげったので見上げると、ヴァンが背を向けて前に立っていた。
「さっきみたいに一体一体やってくれたらいいから」
ヴァンの影にかくまわれたクリスはほっと息をついた。
「ありがとう。少しずつ進みましょう」
「そうだな」
ふたりはゆっくりと慎重に村の中心部へ進んでいった。

空にある2つの太陽が傾き、夕焼けにそまった村で動く者はいない。
これまでのあいだにクリスとヴァンは、村にいたほとんどの死霊を浄化し終わっていた。
あとはクレナダ村が瘴気に侵された原因を探るだけである。
魔力を消費して少し息をはずませているクリスに対して、ヴァンは平然と立っていた。
クリスは呼吸をととのえながらヴァンに近寄った。
「このあとはどうするの？ひとつひとつの家を調べるのかしら」
「それだと時間かかりすぎるよ。この村で夜を明かす気にはなれないし・・・まだ気になることがある」
「気になること？」
空中を遊泳していたウンディーネも側に呼び寄せながら、クリスは首をかしげた。

ヴァンは考え込むようにあごに手を当ててうつむく。
「退治した死霊は村人のような普通の人たちばっかりだった・・・。じゃ、先にここに派遣されたはずの冒険者はどこいったんだろうね」
「・・・あ」

浄化で手いっぱいだったクリスと違って、ヴァンは死霊の様子も観察していたらしい。
それなのに怪我らしい怪我もせず、体力面でも余裕そうだ。
ヴァンに頼もしさを感じつつ、クリスは派遣された冒険者の数と人相を思い浮かべた。
「たしか最初に派遣されたのはCランクの冒険者が1名。次にBランクの冒険者が4名よ。Bランクの冒険者のうち1名は遺体で戻ったから、合計4名の行方不明者ね」
「いいや、先に様子見にきたときに村の外で冒険者風の死体を見かけたよ」
「じゃあ3名の行方不明者・・・たぶん死霊がまだいる？」
「・・・かもしれない。俺が見つけたみたいに、村の外でころがってる可能性もあるけど、最大3人の死霊がまだ潜伏してると考えたほうがいいね」

死霊は知能が低く、人間の気配がないときは襲うそぶりもない。たださまよって瘴気をまき散らしながら仲間を増やしていく。
潜伏するとか不意打ちをつくというような思考はできないとされていた。
そのはずなのに見渡す限り、3人の死霊が動いている影もなければ音もしない。

ヴァンが剣の柄を握りなおした。
「考えられるのは、出られない状況にいる可能性。その空間でうろうろしてるなら、ここにはいないことも説明がつくし」

「どこかの家にいるってこと？」
「それは考えにくい。家の中からなら窓からでも出られるからね。・・・だけど地下があるなら別かな」

クリスははっとして広場の少し奥にある建物を見た。
村の中心部から少し外れたところに建つその建物は、元は村長の家だったのか他の家々よりも少し大きい。
地下室を作れるくらいには資金があり、敷地も広そうだ。
ヴァンも同じ結論に達したのか、そちらを見た。
「じゃ、最後の退治に行こうか」

クレナダの死霊　？

ヴァンは建物の入り口の扉を堂々と開けた。
この物音で残っている死霊が出てくればよし。探す手間がはぶけるというものだ。
しかし玄関ホールにしんと静まり返って、何かが出てくる気配もない。
「ヴァン・・・はずれかしら？」
「ちょっと待って」

ヴァンは床にかがむと、丹念に床板を調べ始めた。
クリスは何をしているかわからなかったが、冒険者としてのヴァンの強さを見て実感しているので黙って見守ることにする。
やがてヴァンは立ち上がって、建物の奥を指さした。
「床につもったほこりの上に、何人かの足あとが残っているよ。上の階には続いてないみたいだから、奥へ進んでみようか」

クリスはウンディーネと浄化の魔法陣を作り出して、目の前に展開させる。
いつでも反応できるように気を引き締めながらうなずいた。

しばらく廊下を進むと厨房と思われる場所に出た。
鍋や包丁などが使い手のないまま放置されている。
物悲しい気分になりながらクリスは厨房内を見渡した。視界の端でウンディーネは退屈そうに水の玉を出して遊んでいるのを見つける。
「ウンディーネ、遊ばないで」
「だって～、やることないんだもの～」

「浄化の仕事があるでしょ」
「もう魔法陣の強化ならしたわ～」
「そうじゃなくて緊張感を持ってって・・・」

「クリス」
ウンディーネと言い合っていたクリスは、急にヴァンに呼ばれてびくりと身を震わせた。
注意力が散漫になっていたことに気づいて頭を振って気持ちを切り替える。
この精霊が自分のペースでしか動かないことは、今更どうしようもない。
「ごめんなさい。なにか見つけた？」
「うん。地下貯蔵庫だと思うけど、あそこの床に取っ手がついてる」
ヴァンの見る方向に顔を向けると、石床の一部が四角く切り取られ、木製の板がはめこまれている。取っ手を引っ張って上に引き上げることで地下へ進めるようだ。
「小さいわね。ひとり降りるだけの幅しかなさそう」
「念のため浄化の魔法陣を板の上に敷いてほしい。開けた瞬間に襲われたくないからね」
「わかった」

クリスは魔法陣を2つに分割して、一方を木の板の上ぎりぎりに浮かせた。
抜き身の剣を携えたヴァンが慎重に取っ手を持ち上げる。
板が完全に持ち上げられた瞬間、下から真っ黒ななにかが連続して飛び上がって来た。
「・・・っ！？」
クリスは驚いて後ずさった。

その拍子に床の凹凸につまずいて尻餅をつく。
ヴァンも剣を構えて飛び下がっていた。
しかし飛び出してきたものたちは浄化の魔法陣に触れた瞬間、粒子となって霧散していく。
「当たりみたいだね」

ヴァンは片手で油断なく剣を構えながら、もう一方の手をクリスに差し出した。
「あ、ありがとう・・・。死霊だったの？」

ヴァンの手を借りて立ち上がったクリスは恐る恐る彼の背から顔だけ出して、地下へと開いた穴を見る。
「そうだね。よく見えなかったならよかった。けっこうエグい死に方したみたいで、そのまま夢に出てきそうだよ」
「・・・そう」

見なくてよかったと、クリスは心から思った。
ヴァンは穴を覗き込みながら、ほかに飛び出してくるものがないのを確認すると言った。
「地下を調べてくるから、ここで待ってて」
「ひとりで行くの？」
「もう魔物の気配はないけど、罠の可能性があるから。ここに最後の冒険者たちが閉じ込められていたのも、その罠のせいかもしれない」

そのときウンディーネが水球で遊ぶのをやめて口を開いた。
「人間の罠はわからないけど～、そこから嫌な気配がするわ～。魔法の力もほんの少し～。あとはよくわからないわ～」
「呪いの魔法かな？」
「人間の使う魔法の種類なんて～、どんどん新しくなるんだもの～。

知らないわ～。でも～、とにかく嫌なの～」

クリスは眉をしかめた。
瘴気をまいて人を死霊にする呪いの魔法が使われている可能性が高いということは、村の報告がヴァンからギルドへもたらされたときに知っていた。
その可能性がさらに高まったなら、ヴァンを単独で地下に行かせるのは危険すぎる。
「呪いの魔法があるかもしれないなら、私が行って浄化したほうがいいわ」
「罠はどうする気？」
「それは・・・」

手詰まりになったふたりは黙り込んで顔を見合わせた。
時間だけがすぎていく。
窓から差し込んでいた夕日は落ち切って、すでに宵闇が支配する時間帯に入っている。
一度引き上げたほうが・・・とクリスが提案しかけたとき、建物の入り口から石床をかろやかに歩く足音が聞こえてきた。
「クリス、後ろに」

ヴァンが厨房の入り口に向って剣を構えた。
音をたてないようにしながら、クリスはヴァンの背後にまわって壁を背に身を小さくした。ウンディーネは天井付近の空中にとどまって、下を見下ろしている。

そして厨房の唯一の入り口に、ひょっこりとフードを目深にかぶった男が姿を現した。
ヴァンは無言で男に剣を突き突けた。
しかし男は全く動じることなく首をかたむける。

「アレ？先客が来てたのカナ？」

ヴァンは剣先を男ののど元まで持っていった。低い声で誰何する。

「誰だ？」

「ナマエ？ナマエ？名無しダヨ」

「馬鹿にしてるの？」

「名無しダヨ」

フードの男はからかうように同じ言葉を繰り返した。

男の発音が妙に耳触りで気分が悪くなってきたクリスは、そっと胸元を抑えた。

何ひとつ前触れはなかった。

気づけばクリスは痛みを訴える体を床に横たえていた。

何が起こったのかと目を開くと、すぐそばで壁に背を預けて座り込んでいるヴァンがうめき声をあげている。

「ヴァン！」

跳ね起きようとしたが、からだに激痛が走って再び床に沈んだ。

側にいたらしいウンディーネがそっとクリスの頭を撫でた。

「クリスちゃ～ん、治癒の魔法を使って～。増幅させて動けるように治すから～」

クリスはすぐにうなずいて脳裏に水のイメージを思い浮かべる。

声を出すだけで痛むので、とぎれながちな呪文をなんとか言葉にした。

「清らかな・・・恵み。母・・・なる海。慈しみの雨・・・。癒し・・・の・・・力」

ウンディーネの増幅を受けた治癒の魔法は、クリスとヴァンの体の表面をおおって淡く輝いた。
輝きが鎮まると、立ち上がるクリスより先にヴァンが身を起こした。その勢いのままクリスを強引に引き寄せて、自身の背後にかばう位置に持っていく。
「わっ！・・・きゃっ！？」

ただ立ち上がろうとした瞬間だったので、クリスはヴァンの背を見ながらもう一度尻餅をつく羽目になった。
「なにが起こったんだ・・・」
「わ、わからないわ」
「あいつもいない」

そう言って、ヴァンは床に落ちていた自分の剣を慎重に取り寄せると、片膝をついた状態で周囲を警戒する。
クリスも辺りを見回しながらウンディーネに問いかけた。
「ねえ、ウンディーネ。何があったの？あの男の人は？」
「え～と～。すごく強い風の魔法が～、ど～んってクリスちゃんたちにぶつかったの～。あの人間は～、嫌な気配のするものを持って～、出ていったわ～。直撃しなかった私にも～、衝撃が来るくらい～、すごかったの～」
「え・・・」

ヴァンはウンディーネの言葉にぐっと目元に力を入れて、顔をゆがめた。
「くそっ。手がかりを逃がすなんて、なんてざまだよ！」

クリスもここまで来て犯人らしき男を逃したことに衝撃を受けたが、それよりも別のことに驚愕していた。

冒険者最高峰の実力を持つヴァンを、ただの魔法の一撃が気絶させたことだ。

空気の塊を圧縮して放つ風系統の攻撃魔法を、無詠唱で。
なんの気配も感じさせずに強力に練り上げ。
完全に不意をつく形でＡランクの冒険者を吹き飛ばす。
どれほどの実力者なのかと、生きているのが不思議に思えるくらいだ。

身の内から震えが走って立ち上がる気力もないまま、クリスは冷たい床に座り込んでいた。

クレナダの死霊　？

あのあと、クリスとヴァンはクレナダ村の周囲の平原を拠点にして、泊まり込みで様子を見た。
逃げた男が戻ってくる可能性は低かったが、念には念を入れることにしたのである。
村の中で様子を見る案も出たが、新たな死霊が生み出されるかもしれない場所にはとどまれなかった。

フードの男が何者なのか。
ウンディーネの言う嫌な気配のするものが死霊を生み出していたのか。

結局新しく死霊が出てくることはなく。
なにひとつ判明しないまま2日がすぎて、忸怩（じくじ）たる思いを抱えたふたりは皇都に帰還した。

皇都のギルド本部に戻ると、マリーが駆け寄ってきてクリスを抱きしめた。
「ああ、よかったクリスちゃん！無事でよかった！」
「はい・・・マリーさん」
「先に報告にいってるよ」

ぎゅうぎゅう抱きしめられているクリスを横目に、ヴァンはギルドの奥へ進んでいった。
その表情は暗い。
クリスも帰ってきた喜びはあっても、釈然としない気持ちを抱えて

いた。

そして今。

クリスとヴァンの報告を受けたギルド職員たちは、それぞれに動揺の表情を浮かべている。

口々に思いつくままの推論を交わす。

「Aランク冒険者が・・・」

「まさかSランクがあらわれたのか？」

「いや、その前にそいつの目的はなんだ」

「国に報告しなければ」

「待て。情報を整理してからだ」

「そんな時間があるのか？犯人はまだ捕まっていないんだぞ」

まとまらない話にヴァンが口をはさんだ。

「ひとまずはっきりしているのは、クレナダ村の依頼は達成ってこと。もちろん犯人はつかまっていないから、言いたいことはあるだろうけどね。依頼内容は、魔物の調査および村民と冒険者の安否確認だったんだから」

魔物はいた。そしてその死霊は退治された。

村民と冒険者は全滅。

たしかに依頼は達成されているが、犯人らしき男を取り逃した問題は大きい。

白髪で豊かな髭にうもれるような小柄な老人が確認するように言った。

「たしかにのう。このとおり依頼は達成されておるし、依頼金は払わねばのう。だが、坊主よ。おそらく犯人の追跡と、捕獲の依頼が国から出されるじゃろうのう」

「だろうね。俺が受けるよ」

「うむ」

クリスはそのやり取りをただ黙って見守っていた。
ぎゅっとスカートのすそを握って、うつむくことだけは耐えている。
クリスの役割はただの助っ人だから、ギルドの方針にもヴァンの今後にも関われない。

関われない？

クリスは頭で考えたことに自分自身で驚いた。
私は人間関係は面倒だと感じていて人と距離を置いていたはずなのに、すすんで関わりたいと感じるなんて、と。

ひとり悩むクリスを置いて、会議は終了した。
「おつかれさん」と声をかけてくるヴァンに生返事を返しながら、クリスはぼんやりと彼の顔を見つめた。

世界中に点在するギルド支部と、皇都のギルド本部を運営しているのはモナド皇国である。
その中でも直接関わっているのは運営資金を出す財務大臣と、宰相。そして皇帝だ。
彼らは城の一室に集まって、膝を突き合わせていた。
「ゆゆしき事態だな」
「冒険者ギルドの信頼が揺らぎかねません。Ａランク冒険者の存在は大きいのですよ」
「犯人を捜すのは当然としても、手段が限られますね。実質Ａランクのヴァンしか追跡できません。ほかの冒険者では情報も得られず死ぬでしょう」

宰相の発言に皇帝はぽんと膝を打った。
「それだ」
「陛下？」
「余は誰の血をひいておる？」
「それはクレセント公爵家と青の森の・・・あ」

宰相と財務大臣も気づいたのか、ぱっと表情を明るくした。
「あの方なら！」
「さっそく伝書鳥を飛ばしましょう」
「一番早いやつで頼む」

返答は半日とかからず届いた。
伝書鳥ではなく、魔女の魔法によって手紙だけが皇帝の前に正確に転移してきたのだ。
すでに魔女が表舞台から引いて５００年。
子孫である皇帝でさえ直接青の森の魔女とあったことはないが、生まれたときに言祝ぎの花を贈られたことを思い出した。
子が産まれて数時間後の早業に、いったいどんな方法で子孫の誕生を知ったのかと、物心ついたあとで戦々恐々とした覚えがある。
「相変わらず正確無比で、規格外な魔法だな」

皇帝は苦笑しながら手紙の封を切った。
封蝋はクレセント公爵のもので、現在この大陸で使うことが許されているのはクレセント公爵本人と妻の魔女だけだ。
「陛下、あの方はなんと？」
「まあ待て。・・・読むぞ」

――――拝啓。めんどくさいから全部略。
うちの子が助けを求めてくるなんて何十年ぶりかしら？月日がたつのは早いわねぇ。

クレナダのことは残念だけど、廃村にしたほうがいいわ。原因がはっきりしてないのに、人を住まわせちゃダメよぉ。
あと私を頼ってくれるのは嬉しいけど、モナド皇帝の地位とかメンツとか、ほらいろいろあるじゃない。
あんまりアテにしないでねぇ。でもちょっとだけなら力を貸すわ。
国境沿いに硬い結界を張るわねぇ。人をぜーったい通さないＡＴフィールド！
犯人を絶対にモナドから逃がさないわ。
うちの国で好き勝手するなんて、ちゃーんとお仕置きしておいてね。
ってことだから、交易も一時停止することになることだけ注意して。
がんば！

――――エレオノーラより

「・・・・・・」
「陛下、えいてぃふぃーるどとは何でしょうか」
「知らん」
「陛下、我が国の外交は止まりますな」
「そうだな」
「陛下、諸外国に何と説明しましょうか」
「・・・うむ」
「陛下・・・」

皇帝は手紙を持ったまま椅子に沈没する。
青の森の魔女エレオノーラ。
さまざまな伝説を残した彼女の破天荒さは、絵本作家の脚色でも歴史家の過大評価でもなかったのだと、しみじみ実感することになった。

数日後、皇都のギルド本部から各地のギルドに向けて通達がなされた。
フードをかぶった風を操る魔法使いの目撃情報の収集。
国境の封鎖。
そして彼の追跡はＡランク冒険者ヴァンに一任することを。

クリスはマリーと交代した受付に座って次々と業務を片付けながら、その中身は別のことを考えていた。
家に戻ってからも、学校で授業を受けながらも、ずっと頭の中は同じ思考を繰り返す。
このまま何もなかったことにして、日常に戻っていいのだろうか。
初めて人と関わりたいと思ったのを無駄にしていいのか。
「私は・・・このままでいいのかしら」

無意識に口からこぼれ落ちた言葉を拾った目の前の冒険者が怪訝そうな顔をした。
「嬢ちゃん、どうしたよ。書類に不備でもあったかい？」
「あ、いいえ、失礼しました。確認とれましたので、どうぞあちらで依頼金をお受け取りください」
「まいどあり！」

冒険者の男は機嫌よさそうに去って行った。
そこで一通り並んでいた冒険者をさばけたので、クリスは立ち上がって伸びをする。
そのとき建物の入り口をくぐった茶髪の青年が目に入る。
ヴァンはまっすぐにクリスに向って歩いてきた。
「やあ、クリス」
「ヴァン？どうしたの」

ちょうど彼に関することで悩んでいたので、クリスは少し鼓動が早くなった胸を抑えた。
「休憩はいつ？」
「いつとは決まってないけど、今ちょうど手があいたところよ」
「だったら、少し時間を取ってほしい」

クリスは何の用事かと不思議に思いながら、ヴァンに近づいた。
ヴァンは声を潜めて、
「身の回りに注意してくれ」

と言った。突然の不穏な言葉にクリスは驚いて、彼の顔を見つめた。
「どういうこと？」
「あの犯人らしいフードの男。あいつに顔を見られたのは俺だけじゃないってことだよ。国とギルドから正式に指名手配されたんだ。逃げるために目撃者を消そうと考えるかもしれない」

そのことに初めて思い至ったクリスは口元を手で覆った。
もしあの男が攻撃してきたら、クリスなど一瞬で死んでしまう。
どうしよう、とクリスが考えていると、ヴァンが懐から手のひらに収まるほど小さな銅製の彫像を取り出した。
「前に錬金術師の依頼を受けたときにもらったものなんだ。一度だけ攻撃されたとき、自動的に結界を張ってくれるらしい」
そのまんま身代わりの彫像とか言ってたな、と話しながら、彼はクリスに手渡した。

「いいの？」
「構わないよ。今まで持ち歩きもしなかった品だ」
一時的にパーティを組んだだけの女など見捨ててもいいはずなのに。
ヴァンの気遣いにクリスは、このままでいいはずはないと思いを固めた。

第二章　主な登場人物（前書き）

※二章ネタバレあり

第二章　主な登場人物

～登場人物紹介～

・クリス＝ルクス　１６歳　女
男爵令嬢。でも土地があるだけ。お金はない！学費はギルド受付のバイトで稼いでます。
水の大精霊ウンディーネとの契約者。

・ヴァーヴァティ　１９歳　男
樹海で冒険者に拾われ、育てられた捨て子。
冒険者ギルドで唯一のＡランク。本名は長いので「ヴァン」と略している。
現在、モナド国家とギルドの依頼でクレナダ村を廃村に追い込んだフードの男を追跡している。

・ウンディーネ　年齢不詳　女
水系統の精霊の中で一番力を持つ精霊。
生まれたばかりのクリスの魂が水色だったので、水を司る存在として好感を持つ。
そのままそばで成長を見守るために無断で一方的に契約。

・名無し　年齢不詳　男
最近各地で起こる魔物や精霊の暴走事件にかかわっている青年。
とても強い魔法使い。
話し方が独特。

・エレオノーラ　年齢（三十路＋５００年程度）　女

かつてのクレセント王国の公爵夫人。
蒼の森の魔女と呼ばれ、絵本などにも登場する有名人。

・マリー　三十路～四十路前半　女
冒険者ギルドで昼番をしている女性。
クリスと同じ年頃の娘がいる。

・すらいむじゅうさんごう　年齢不詳　性別不明
ぷにっとした丸っこい球体の持ち主。モナド国立魔術学校の妖精。
複数集まると合体してきんぐすらいむになれるという噂。

・ふぇんりる　年齢不詳　性別不明
モナド国立魔術学校の妖精その2。巨大な狼のような体をしている。
瘴気に侵されて魔物化したらしい。

・皇帝、宰相、財務大臣
皇国の頭脳3人トリオ。
皇帝の一族は代々、祖先のエレオノーラの黒髪とキールの緑の目を
持って生まれてくる。
宰相と財務大臣は皇帝の乳兄弟で幼馴染。

魔術学校の妖精　？

クレナダ村の事件から数週間後。
モナド皇国内は特に混乱もなく、人々は落ち着いていた。

当初はさすがに国中で混乱が巻き起こった。
特に諸外国と取引をしている商人たちを中心に役所に陳情書が次々と届けられたが、一定の救済策を国が施行したことで鎮まったのだ。
商人たちには国境に敷かれた結界の影響で交易が断絶された分、申請すれば生じた儲けへの被害救済金が交付された。
クレナダ村を廃村に追い込んだ犯人に怯える人々には、今まで以上に騎士団が街や村を見回って治安維持に努めるとともに、犯罪をおかした人間には現行よりも厳しい罰則を与えるようにした。

ほかにもギルドが引退した冒険者たちに掛け合って有志の自警団を作り、騎士団の目の届かないスラムや郊外に居を構える人々の救済を始めた。
それらの積み重ねによって、モナドの人々はようやく落ち着きを取り戻したのだ。

クリスはモナド国立魔術学校の魔法学科の授業を終えると、錬金術学科の補習にいつものように潜り込んでいた。
横に置いているカバンの中には、いつ襲われても対処できるようにヴァンから貰った身代わりの彫像が入っている。
日常と非日常。
少しの緊張を保ったまま、クリスは日々を過ごしていた。

クリスは備品の錬成釜に黒板に書かれたレシピを何度も確認しながら材料を投入した。
基本的に自由出席の補習なので、こうしてクリスが紛れ込んでいても講師が気づくことはないし、備品が足りなくなることもない。
こうして授業を増やす分には制限がかかることはない魔術学校だが、逆に欠席には厳しかった。
自由出席ではない授業では必ず点呼を取り、無断で欠席した生徒は各分野の試験から一定の点数を引かれる。もちろん及第点以下なら追試だ。
追試も重なりすぎると落第になりかねない。
だからクリスは錬金術学科の授業だけを受けたくても、入ったのが魔法学科である以上、その授業をさぼれなかった。

錬成釜から取り出したものを布で包んで加工していく。
今回の補習内容は小規模爆弾“フラム”の錬成である。
あの青の森の魔女が伝えた技のひとつとされていて、護身用に持ち歩く生徒もいた。
魔法だと初級の火の魔法程度の攻撃力しかない。

クリスは包み終えた“フラム”をそっと机の上に置いた。
講師が教室内を回ってひとつひとつ回収していく。
そして順番に出来の評価をされていった。
「右から順番に発表します。ひとつ目、A＋。よくできました。ふたつ目、C－。もう少し錬成時間をのばすとよいでしょう」

クリスは魔法の素質はあっても、あまり錬金術の素質はない。
理論上は完璧なレシピを参考に錬成しても、最後に流し込む魔力の量を調整するのが下手なのだ。
そしてついにクリスの“フラム”の評価が下された。
「三十五個目・・・E－。これでは爆発しません」

爆発しない爆弾など意味がない。
クリスはぺったりと机につっぷした。

補習後、ギルドの受付のアルバイトまでに少し時間があったクリスは図書館を訪れていた。
魔術学校の図書館は皇都で一番の蔵書量を誇る。
錬金術について書かれた書棚から、初級錬金術について書かれた本を抜き取る。
“フラム”の項目を開いて、先ほどの授業を思い出した。
「レシピはやっぱり間違いないわ。でもまた失敗してしまった」

クリスがため息をついていると、右太ももの紋が淡く光る。
空気がゆらめき、空中に水の貴婦人を生み出した。
この紋はウンディーネからの一方的な契約なので、契約者のクリスが呼ばずともウンディーネはいつでもクリスのもとに現れることができる。
急に現れるのもいつものことだった。
「どうしたの？」
「クリスちゃ～ん、ひまだわ～。ちょっとだけ遊んでくるわね～」
「え？」

クリスはぽかんと見つめている先で、ウンディーネは上空に舞い上がって溶け消えた。
自由気ままな精霊なので仕方ない、とクリスは頭を切り替えて手元の本に集中する。

日が傾き、窓から差し込む光が橙色に染まってきた。

クリスは文字の読みすぎで乾燥している目をまたたかせながら、ウンディーネを呼ぶ。
「ウンディーネ、そろそろギルドに行く時間よ」
呼ばなくても現れるウンディーネだが、こちらの呼びかけを拒否したことはない。
しかしどれだけ待ってみても、水の精霊は現れなかった。
「ウンディーネ・・・？」
いつも側にいた存在がいない不安定さに、クリスは悪寒を感じた。
じっと待っていられずにギルドに向って走り出す。
「そうよ。先にギルドに行って待ってるだけかもしれないじゃない」
かすかな希望をこめた祈りは届かなかった。
ギルドにウンディーネはおらず、翌朝になっても戻らなかったのだ。
契約精霊が不在でも紋はそのまま残っている。
消えていないということはウンディーネとのつながりも途絶えていないということだ。
翌日、ギルドの受付をこなしながらクリスはそのことに少し安心しながら、ひとりの青年を待っていた。
夜も更けてきたころ、ヴァンがギルドにやってきた。
彼はフードの男に関する目撃情報に新しいものがないか確認するため、毎日ギルドを訪れていた。
クリスは書類をまとめていた手を止めて、掲示板の前にいるヴァンに駆け寄る。
「ヴァン、ちょっといい？」

「クリス？」

クレナダ村の事件以降、クリスは人と距離を置いてしまう自分を変えようと決意したのはいいものの、まだ頼れるほど弱さを晒せる相手は限られていた。
ヴァンはあの同行していた間ずっとクリスを守ってくれたし、今も気にかけてくれているので他の人よりも話しやすい。
そう考えて、クリスはヴァンにウンディーネが行方不明になっていることを告げた。
「まだウンディーネは戻らないわ。ヴァンはいろいろなところを旅しているでしょう？精霊がこんなふうに契約者の呼び出しに応じない話とか、それを解決する方法を聞いたことはない？噂でもいいの」
ヴァンは腕を組んでしばらく唸っていたが、やがて首を振った。
「ごめん、心当たりはないよ」
「・・・そう」

魔法使いでも、精霊との契約者でもないヴァンだからダメで元々くらいの気持ちでいたクリスだが、やはり否の返事を聞くと気が沈んだ。
大きくため息をついて気持ちを切り替える。
ヴァンにはまだ訊かなければならないことがあった。
「ごめんなさい、もう少し自分で探してみるわ。・・・それで、あのフードの男は見つかったの？」

クリスにとってウンディーネの行方も心配だが、自身の命を狙っているかもしれない人物が国内にいることも心配だ。
ギルドに寄せられる情報はクリスも目を通しているが、フードのせいで人相がよくわからない人間を特定するのは困難だった。
目撃証言も錯綜している。

ヴァンはそれらの真偽を経験則からか、ある程度選別しながら追跡しているようだったので何か新しい情報をつかんでいるかもしれないと思った。
「あの馬鹿でかい結界のおかげか、まだ国内にはいるみたい。一度は潜伏先を突き止めたんだけど、すでにもぬけの殻だったね。今度はもっと見つかりにくいところに隠れていると思う」
「目星はついているの？」
「その目星をつけられるかと思って、今日の情報を聞きにきたとこ」
そう言ってヴァンは指名手配しているフードの男の情報だけを掲載した、別枠の掲示板をのぞきこむ。
何枚か掲示されている紙を手に取ったが、目を通したあと再び元に戻した。
「ああ、やっぱりなかったな。情報屋連中が血眼で探してるくらいだから、ギルドに寄せられる程度の目撃証言はあてにしてなかったけどさ」
「そうなの？」
「まあね。でもギルドに来た甲斐はあったよ。ひとついい情報を手に入れたかな」
いつそんな情報を聞いたのだろうか。
彼が本部の建物に入ってすぐに接触したクリスは首をかしげた。
「クリス、君が狙われているかもしれないって話はしたよね」
「覚えてるわ。身代わりの彫像もずっと持っているもの」
「そしてウンディーネは君の契約精霊だ。あの男が現れた現場にも具現化して、お互いに存在を知っている。俺は直接君に危害を加えてくるんじゃないかと予想してたんだけど、もしかしたらウンディーネのほうに何かしたのかもしれない」
クリスは天井を見上げて考えた。

言われてみれば、たしかにその可能性もあるかもしれない。しかしウンディーネに限っては考えにくかった。
精霊の生態は解明されていないが、知能を持ち話すことのできる存在は力も強いと伝えられている。
ウンディーネは自由気ままで緊張感のない性格だが、きちんと自我を持って発言するし、行動も自己決定する。
そのことからもかなり上位の精霊であることは間違いない。
クリスは視線をヴァンに戻した。
「可能性は低いと思うわ。精霊のウンディーネは水の化身。物理的な攻撃は効かないし、罠も関係ない。あのときみたいに魔法で攻撃されても避けられるくらい力も強いわ」

だからこそ呼び出しに応じない今の状況は異常だ。
あらためてクリスはそのことに戦慄した。
ヴァンは肩をすくめて掲示板にもたれかかった。
「まあ、それでもここにある情報よりは調べる価値があるね。一度いなくなった場所に行ってみるよ」
「図書館に？私も行くわ」

クリスはとっさにそう返していた。
「危険なのはわかってるんだよね？」
「そうね。でもウンディーネの契約者は私よ。私がいることでわかることもあるかもしれない。・・・それに、家族みたいなものなのよ。生まれたときからずっといっしょにいたんだから」

ヴァンはしばらく迷っていたようだが、やがて厳しい表情で言った。
「わかったよ。契約者が同行する利益は大きい。来てくれるなら助かるけど、俺の指示には従ってほしい」
「もちろんよ」

いなくなった水の精霊の顔を思い浮かべながら、クリスは大きくうなずいた。

魔術学校の妖精　？

モナド皇国の冒険者ギルド本部には、基本的に2人の受付が交代で勤務している。
正式に職員として雇われているマリーは、太陽が顔を出す時間から沈むまで。
まだ学生の身でアルバイトのクリスは、マリーと入れ替わりに月が空の真上に来るまでが業務時間となる。

クリスは仕事が終わって一度自宅に戻った後、そっと窓から裏道に脱出した。
貧乏ゆえにアルバイトで学費を稼ぐクリスだが、一応貴族の娘なので帰宅した後の外出を両親に認められていなかった。
そうでなくても年頃の娘が真夜中に帰ってくるので、そのあとに出かけるなど言語道断なのはわかる。
しかし今夜はそうも言っていられなかったクリスは、自宅なのに玄関ではなく窓から出ていく羽目になったのだった。

「おまたせ」
「時間的には大丈夫。いやでも提案しておいてなんだけど、よく抜け出せたね」
クリスはモナド国立魔術学校へ続く道の先にある広場でヴァンと合流した。
「私も昼間は授業を抜けられないから、仕方ないわ」
優秀な成績をおさめつづけなければ特待制度は受けられなくなってしまう。

学費の半額免除がかなりおいしい条件なので、クリスは授業を欠席して試験の点数を引かれることは避けたかった。
そしてヴァンはヴァンで、時間がたてばたつほどフードの男の行動を許すことになるため、情報をつかんだら真夜中でも動かざるを得なかった。

魔術学校の裏口まで歩いてきたふたりは、左右を見回して誰もいないことを確認した。
「それじゃ開けるわね」

クリスが懐から生徒手帳を取り出して裏口の門にかざすと、手帳に刻まれた生徒情報を記した魔法を読み取った鉄製の扉が開いた。
すばやく入りこんだヴァンを追って、クリスも中に入る。

地方や諸外国からの留学生が主に利用している寮は、それぞれの文化の違いから生活リズムが少しずつ違う生徒が暮らしている。
ほとんど不夜城のように一日中だれかが起きて活動していた。
そのため寮へ続く裏口だけは、いつでも手帳があれば出入り可能になっている。
ただし防犯のために門にかざした人物と、生徒手帳に刻まれた情報が食い違っていたら決して開かない仕組みになっていた。

勝手知ったる施設内を図書館に向って案内しながら、クリスは隣を歩くヴァンを見上げた。
ヴァンは今、月光をはじいて人目をひく明るい茶髪を隠すために外套を羽織っている。
フードの男と似通ってしまうので、本人は嫌そうにしていた。
だが誰かに見とがめられればクリスは特待生の待遇を取り消される

かもしれないし、ヴァンは不法侵入の追及を受けるだろう。
結局、隠れていくしかないのだ。
人通りの少ない廊下や、使われていない校舎のあいだを縫うようにして図書館に近づいていく。
歩きながらヴァンがぽつりとこぼした。
「この学校の仕組みって、わりと悪用されそうだね」
「裏口のこと？」
「それと、このやたら広い敷地に対して街灯の少なさ。人が隠れるにはもってこいだ」
「ううん、そうでもないわ。たしかに悪い人が隠れていてもわからない。でもその人たちがことを起こそうとしても、どの建物にも侵入できないから」

不思議そうな顔をするヴァンにクリスは学校の警備について語り始めた。
「その日の授業が終わると、使われない学舎や建物はすべて学校に勤めている警備担当の魔法使いと錬金術師たちによって戸締りが行われるの。入口だけでなく、窓や換気口にもすべて結界や錬成術で作られた罠つき。学校全体を結界で覆えれば一番早いでしょうけど、あいにくそれだけの力を持つ人は在籍していないわ」

そういえば国中をかこっている結界はだれが張ったのかしら、とクリスの思考は少し脱線した。
あれだけ強力で広い範囲を何日も何日も保たせることができるなんて、まるで伝説の青の森の魔女のようだ。クリスは幼いころの絵本の影響で、魔法使いとしても錬金術師としても彼女を尊敬していた。
大昔には「魔女」と言えば差別用語だったらしいが、今では尊称に使われるほどの意識改革を起こした女性。
不老不死でいまだにモナドのどこかで生きていると言われているが、クリスはさすがにそれは作り話だろうと思っていた。

思考から戻ってきたクリスは続けて、
「そして一日中活動している寮には、中にいる寮生を守るために彼らの一部が常に見回りをしているし。それらを何事もなくかいくぐるのは相当難しいはずよ」
と締めくくった。
ヴァンが驚きの声をあげた。
「え？それじゃ、図書館も入れないんじゃ？」
「そうなのよね・・・。でもヴァンはＡランクの冒険者だし、なんとかできないかな・・・とか・・・」
語尾を弱くさせながらクリスが言うと、ヴァンは困った表情で笑った。
「残念ながら、俺の魔法は初級がせいぜいだよ。力まかせに叩き壊せっていうならできないこともないだろうけどね」
「そうなの？浄化の魔法が苦手なだけだと思っていたわ。だからクレナダに私を同行させたのかしら、って」
「俺は万能じゃないし、世界一強い人間でもない。そりゃ冒険者の中じゃ腕は立つほうだ。でも、できないことはできない」
クリスは目をしばたたいた。
「私、あなたにできないことはないって思ってたわ」
「そりゃ買ってくれて光栄だね。だけど俺はあの男に負けたんだ・・・手も足もでないまま吹っ飛ばされた」
ヴァンは悔しさのにじむ口調で言った。
クリスもあのときのことを思い出してうつむく。あとから治癒を手伝ってくれたウンディーネに聞いたところによると、壁や床にたたきつけられた衝撃でふたりとも体中の骨が折れていたらしい。

激痛だったがすぐに治ったので、それほど重体とは思わなかったから驚いた記憶がある。
黙り込んでいるうちに図書館の前までたどりついた。

「入れないんじゃ仕方ない。ひとまずもう一度ウンディーネに呼びかけてみてほしい」
「わかったわ」

クリスはもう何度も試したことをもう一度繰り返した。
今度こそあの水の精霊が現れることを願って口を開く。
「ウンディーネ。来て！応えて！」

しかしあたりには静寂が漂った。
水の精霊のあの独特な間延びした声も聞こえない。
「だめか・・・じゃ次」
「次？」

落ち込みかけたクリスはヴァンの言葉にきょとんとした。
「建物の周囲を見て回ろうか。外からでも何か手がかりくらいは掴みたいね」
「そうね・・・窓や扉にさえ触らなければ大丈夫だと思う」

まだ諦めるのは早いと思い直したクリスはヴァンの提案にうなずき、ふたりで図書館のまわりを慎重に見て回る。
この建物は学校ができた当時から補修と補強を重ねつつ、現在まで利用されている５００年ものの歴史的遺物だ。
遠目には白亜の立派な建物だが、近くでよく見ると壁を塗りなおし

た跡がわかる。
特に何かを発見することなく、元の場所に戻ってきた。
クリスは見落としたものはなかっただろうかと思い返すが、やはり普段見慣れた光景しか浮かばない。
だがヴァンは少し思案気な表情をしたあと、ひとりでもう一度まわってくると言った。
「どうしたの？」
「違和感があるんだよね。どこって指摘できないから・・・こう・・・気持ち悪い。ちょっと行ってくるよ。ここを動かないように」
ヴァンはクリスの返答を待たずに、足早に行ってしまった。
月明かりに照らされて見つからないように、クリスはしゃがんで待つことにする。
しばらくするとヴァンが戻ってきた。
と思ったら、クリスにそのまま座っているように身振りで示してから、もう一周しに建物に沿って歩いていく。
「え・・・なんなの」
クリスは待っていることしかできないので、そわそわして落ち着かない気分に陥った。
ヴァンは最終的に5周も図書館の外側を見て回ると、ようやくクリスのもとに戻ってくる。
「やっと違和感のもとがわかったよ」
なにかを発見したらしいヴァンは、違和感が解消されてすっきりした表情をしている。
クリスは立ち上がりながら、ヴァンに続きを促した。
「建物じゃなくて、地面に原因があったんだよ。この場所から歩いて一周すると、ちょうど右斜めの方向が一番沈んでる」

「沈んでいる？」
「そうそう。地盤沈下してるんじゃないかな。遺跡の調査に行ったときにたまにあるんだよね、こういうことが」
地盤沈下は地面の下にある水脈などが枯渇したときに起こることが多い。
図書館が建ってから５００年の間に、そういうことがあってもおかしくはなかった。
普通に通り過ぎるだけでは気づかないほど、わずかな凹みなのだろう。
「でも水脈が枯れてしまったのは昨日今日の話ではないと思うわ。ウンディーネがいなくなった時期とあわない」
ヴァンは首を振ってクリスの言葉を否定した。
「地盤沈下の原因は水脈がなくなること以外にもあるんだよ。特に遺跡みたいなところはね。――地下通路だよ。長い間放置されていた地下通路の一部が崩れると、上の地面も崩落するんだ。この図書館はずいぶん古そうだし、遺跡みたいにそういうものがあるかもしれない」
「地下通路って・・・図書館で地下に降りる階段を見たことはないわよ。職員用のどこかからつながっているとしても、聞いたこともないわ」
長年冒険者をしているヴァンの言葉を疑ったわけではないが、クリスは驚いて絶句した。
「放置されすぎて、誰も気づいてないんじゃない？存在そのものが忘れ去られてるとか」
「・・・わからない。でも手がかりらしいものが他にないなら、調べてみたい」
「そう言うと思った。身代わりの彫像は持ってる？」

クリスは考えを見通されたことに赤面しながら、スカートのポケットを軽く叩いた。
「ここに入ってるわ」
「なら行こうか。俺が前。あんたは後ろ。いいね？」
「わかった」

先導するヴァンについて行きながら、クリスは今度こそウンディーネの行方がわかりますように、と心の中で何度目かの祈りを捧げた。

地盤沈下しているという場所に立ってみたが、クリスには地面が陥没しているようには見えなかった。
夜目が効かないだけでなく、その上を慎重に歩いてみても何も感じないのだ。
この微妙な凹みを違和感として認識したヴァンの能力の高さは、さすがＡランクの冒険者だと思わせた。
「クリス、“サーチ”の魔法は使える？」

―――“サーチ”。探索や物品の鑑定に使用される中級に分類されている魔法はすでに授業で習っている。
しかしあくまで学生が発動できる程度の小規模なものだ。
水系統の魔法ならウンディーネの加護のおかげで上級であっても使いこなす自信はあるが、他の分野は精霊の加護外である。
クリスはせっかく頼ってくれたのに・・・と申し訳なく思った。
「できるけど・・・ごめんなさい。範囲は１メートルほど先までしかわからないし、ぼんやりとしか解読できないの。もっと詳しいことを知りたいなら、直接触る必要があるわ」
「地下通路はだいたい３メートルから５メートル以上下にある。それ以上上に作ったら、ただ人が歩くだけで陥没するかもしれないからね。まあ、念のために一応“サーチ”してみてくれる？」
「そうね。やってみるだけやってみましょう」

ヴァンにもっとも沈んでいる場所を聞いて、その上に立ったクリスは深呼吸して気を落ち着かせる。
少しでも地下通路に近づくために、地面に手をついてから魔法を発動した。
「・・・“サーチ”」

クリスの脳裏に次々と情報が流れ込んでくる。
黒い。
暗い。
冷たい。
硬い。
小さな生き物の鼓動。

地下通路らしきものは読み取れない。
やはりもっと先にあるのだろうと、“サーチ”の範囲を意識を集中して広げる。
しかし1メートルと少し進んだあたりで、ぷつりと流れ込んでくる情報が途絶えた。
クリスの展開する“サーチ”の限界がきたのだ。
ふっと息をついて魔法を解いた。
「ダメね。分かったのはミミズとか虫の気配くらいで、あとは普通の地面よ」
「そっか。・・・どうするかな。いっそ掘ってしまえたらいいのに」
「それはあとで埋め直してもバレると思うわ」
「だよね」

時間をかけられるなら地盤沈下の件を校長あたりに知らせて、建物の保護と生徒の安全のためと説得して公式に調査することもできる。
そうなればいくら掘っても咎められないだろうが、今の状況は悠長に手続きを踏んでいられるようなものではなかった。
瘴気をまいてクレナダ村の人々を殺害したらしきフードの男の行方がかかっている。
もしこの皇都でクレナダ村と同じような事件が起きたら、人口が多

い分だけ被害は前回よりも確実に広がるのだ。
すでにあの事件から数週間たっている。
一刻も早く見つけ出す必要があった。
ウンディーネを家族同然に思っているクリスは、彼女の安否のためにも下手な行動を起こして時間を取られたくなかった。
掘った跡が見つかれば、説明を求められるだろう。
その手間が惜しい。
上級魔法の転移が使えれば一気に解決するが、まだ授業で習っていない上に、たとえ知っていても“サーチ”でこの有様のクリスでは発動するかさえ怪しかった。
「入口があればいいのに・・・」

ぽつりとつぶやいたクリスの言葉に、ヴァンはぽんと手を打った。
「それ、いいね」
「え？でも地下通路のことは忘れ去られてるって言ってなかった？出入り口なんて誰も知らないんじゃないの？」
「知らないなら調べればいいんだよ」

そう言ってヴァンは凹んでいるらしい地面の上を何度か往復した。
「うん。ここからこうして・・・右へ陥没してるから・・・。ああ、ここからは途切れてるか」
「なにしてるの、ヴァン？」
「凹みをたどってるんだよ。・・・この先に続いてる。陥没してない通路から先は読めないけど、少なくともこの方向に出入り口があると思う」

クリスはヴァンが指さす先を見て、このあたりの地図を思い浮かべた。
たしかこの先には十数年前に古い校舎を壊し、新設された用具倉庫

があったはずだ。
そこまで思い出したクリスは、さっと顔色を変えた。
「どうしよう！」
「え、なにが？」
「この先に入口がありそうな場所を思いついたけど、たぶんそれ・・・新しい建物の下に埋まってるわ」
「なんだって！？」

ヴァンは頭を抱えてうずくまった。
クリスも座り込んでしまいたい気持ちになるが、一応提案してみる。
「とりあえずその建物へ行ってみない？奇跡的に入口を見つけた人がいて、もっと奇跡的にそれが建物の外なら調べられるわ」
「奇跡を連発してる時点で絶望的だね」
「ほかに方法があるの？」
「いや・・・まあ、試してみるか」

ぐんとヴァンが伸びをしながら立ち上がった。
羽織った外套についた土ぼこりを叩いてクリスに案内を頼む。
「やれることは全部やってみよう。その建物への道は？」
「こっちよ」

用具倉庫に到着すると、図書館のときと同様にふたりは周囲をまわってみた。
このあたりは地盤沈下が起こっていないのか、起こっていたとしても十数年前の工事で平らにならされたのか。
ここに先ほどの地下通路がつながっているという証拠は見つけられなかった。
入口になりそうなものも見当たらない。

むしろ手入れが行き届いた地面には草ひとつ生えていないので、調べるまでもなく地下へ続くような穴はなかった。
「ウンディーネ・・・どこなの」
こんなふうに煮詰まったとき、おっとりとした話し方で場を和ませてくれる精霊の名前をクリスは口にした。
そのときクリスのすぐ下の地面から薄く光る物体が浮き出てきた。
「なっ、なっ！？」
「下がって！」
ヴァンが驚愕で言葉にならないクリスを引っ張って背に密着させるように庇う。
その物体は球体で、くるりと半回転した。
顔がついていた。
思わず硬直したクリスは、悲鳴を上げなかった自分をほめてやりたいと思った。
妙に簡略化されたコミカルな顔だが、それがくっついているのが光る球体だと不気味でしかない。
しかもボールのように弾んでこちらに近づいてきた。
ヴァンが剣を抜き放って構える。
「きらないで、きらないで。やめて、やめて」
口のような穴から幼児のような拙い言葉が出てきた。
「きっ、きもちわるい！」
「ひどい！」
クリスが思わず叫ぶと、球体がすかさず非難してくる。
ヴァンは剣先を球体に向けて構え直した。

「お前はなんだ？」
「ぼく、ぼく。すらいむ、じゅうさんごう」
すらいむ？なんだそれは。
じゅうさんごう？１３号だろうか。
正体不明の存在すぎる。
新しい魔物と考えるには、まったく敵愾心が感じられなかった。
すらいむじゅうさんごう、と名乗った球体はさらに続けて言った。
「さっき、さっき。みずのなまえ、なまえ。いってた、いってた」
「み、水？まさかウンディーネのこと！？」
「うん、うん。ふぇんりる、ふぇんりる。いっしょ、いっしょ。きて、きて」
言い終わるとすらいむじゅうさんごうは、また上下に跳ねた。
ヴァンは剣をすらいむじゅうさんごうに向けたままだが、こちらを攻撃する意思はなさそうだと判断したらしい。
クリスのほうを振り向いた。
「クリス、どうする？こいつの言うことが信用できるかは別として、手がかりが呼んでるみたいだよ」
クリスはしばらく悩んだが、ようやく掴んだウンディーネの足取りを逃すことはできなかった。
すらいむじゅうさんごうは気持ち悪いが、文句は言えない。
「行くわ。身代わりの彫像もあるし、ヴァンもいるもの」
「できるだけ守るけど、自衛も忘れないように」
「わかってるわよ」
きっちり釘を刺してきたヴァンに言い返して、クリスはすらいむじゅうさんごうに言った。

彼の背から出て向き合うには勇気がいるので、背中越しに声をかける。
「その場所につれて行って」
「うん、うん。ぱっくんちょ、ぱっくんちょ」

すらいむじゅうさんごうの体が膨れ上がったと思ったときには防御するまもなく、ふたりは巨大化した球体に包まれていた。
さらに次の瞬間には、固い石の上に投げ出される。
周りを見ると、どこかの回廊のようだった。
「ここ、ここに。いる、いる」

ヴァンが球体に殴り掛かった。剣でないだけ手加減したのかもしれない。
「おまえ！なにしたんだよ！」
「つれてきた、つれてきた。てんい、てんい」

もうどんな怪奇現象が起きても動じないかもしれない。

クリスはいっそ悟ったような目で遠くを見た。
見たこともない魔物のような生物に飲みこまれる。それがあろうことか上位魔法の転移の魔法をやすやすと操る。
常識ってなんだろう・・・。

クリスが遠いところに意識を飛ばしている間に、ヴァンがすらいむじゅうさんごうから詳しい話を聞きだしていた。

魔術学校の妖精　？

ヴァンがすらいむじゅうさんごうの話を要約した。
「こいつの話し方イライラするよ！・・・まあ、状況はわかったかな」

この石の回廊は先ほど調べていた地下通路らしい。
すらいむじゅうさんごうは地下通路の番人と出入口を兼用する、人工的につくられた生物なのだとか。
本人は人工妖精だと言い張っていたようだが、精霊の下位に属する妖精はもっと愛らしいものだったと思う。
クリスは避暑地の森など、人里から離れた場所で何度か見たことのある妖精の姿を思い出した。彼らは小鳥のような小動物や、蝶のような昆虫を模していたはずだ。
「この謎の生物がなにかはどうでもいいわ・・・。ここにウンディーネがいるのね？」
「そうみたい。ふぇんりる、とかいう謎の生物その2と一緒にいるんだってさ」
「ぼく、ぼく。すらいむ、すらいむ」

ふたりして謎の生物扱いしていたら、すらいむじゅうさんごうが話に割り込んできた。
謎ではないと言い張りたいようだ。
クリスはすらいむじゅうさんごうを無視して、ヴァンに話しかけた。
「ひどいよぅ、ひどいよぅ」と泣く声なんて聞こえないったら聞こえない。
「ここは出入り口の突き当りみたいだから、奥へ進むしかないわね」
「それはいいけど、こいつもついて来る気みたいだよ？」
「そんな謎の生物は視界に映らないわ」

「・・・クリス。そこまで気持ち悪かったんだね」
呆れたようなヴァンの口調が痛かった。
すらいむじゅうさんごうが再び泣き出した。

すらいむじゅうさんごうが飛び跳ねながら、ヴァンとクリスの前を進む。
回廊は人がひとり進む程度の幅しかないため、一列になって歩くしかない。
クリスはヴァンの背に隠れながら、離れないように慎重に歩を進めた。

回廊はすらいむじゅうさんごうの発する光で照らされ、薄暗いながらも視界は確保されている。
だが同じ風景が広がる回廊では時間の感覚がわかりづらい。
どれほど歩いたのか。
やがてクリスたちの前に石の扉が見えてきた。
その扉をふさぐように3分の1ほど下が軽く土砂で埋まっている。
「これが地盤沈下の場所かな？」

ヴァンが土砂に近寄りながら言った。
すらいむじゅうさんごうは器用に体を跳ねさせて土砂の上に登る。
「ここ、ここ。ふぇんりる、ふぇんりる、みず、みず。いるの、いるの」
「わかった。ちょい避けてて」

ヴァンはひとつうなずくと、剣の鞘で土砂をかきだそうと身を乗り出した。

クリスはこの向こうにウンディーネがいると思うと、嬉しさに頬を緩ませる。
そっと右太ももの紋を指でなぞって、もうすぐ会える家族に思いをはせた。

しかし、すらいむじゅうさんごうは土砂から飛び降りると身を水面のように震わせて口を開いた。
「あけたら、あけたら。ふぇんりる、ふぇんりる。おこる、おこる」
「おこる・・・怒る？」
「しょうき、しょうき。いっぱい、いっぱい」
「しょうき？」
「まもの、まものに。なっちゃった、なっちゃった」
「瘴気ね・・・それを早く言ってくれないかな」

その時にはすでにヴァンの手によって土砂は取り除かれ、扉は奥へ半分開いていた。
重低音の咆哮が後方にいたクリスの肌にまで突き刺さるように響き渡る。

すぐに扉を閉めようとしたヴァンは、奥にいたものを見るとすぐに剣を鞘から抜いて後ろに跳んだ。
扉がなにかに押しつぶされて、頑丈なはずの石とは思えない脆さで崩れた。
クリスはそれを棒だと思ったが、すぐに違うと気づいた。
大きな何かの生物の前足だ。

巨大な爪を持った前足が奥の部屋からこちらの回廊へ入ろうとしているのか、ガリガリと床の石材を削り取っている。
周囲の石壁も衝撃でぱらぱらと欠片を散らせた。
「ふぇんりる、ふぇんりる。こわいよぉ、こわいよぉ」

すらいむじゅうさんごうが前足の主に向って話しかけた。
この生物がふぇんりるらしい。
クリスはいつでも結界を展開できるように、頭の中で呪文を反芻した。
「ヴァン、ここを崩される前に逃げないと」
「どこに？出口もこいつだよ」

ヴァンは足元にいる球体を嫌そうに見た。
クリスもそのことを思い出して顔をしかめる。
出入り口を守る番人だというなら、この謎の生物が死ねばここに閉じ込められるということだ。
クリスは嫌悪感を抑え込んで、すらいむじゅうさんごうを呼び寄せた。
「ちょっと、そこは危ないからこっちにいて」
「だって、だって。ふぇんりる、ふぇんりるが」

動かない球体に業を煮やしたのはヴァンだった。
無言のまま強引に足で後ろに蹴り飛ばす。
クリスはその軌道上から外れていたのに、生理的に受け付けないものが飛んできたので反射的に横に避けた。
べちゃり、と音を立ててすらいむじゅうさんごうが床の上に楕円形ののびる。
「いたい、いたいよぅ。ひどいよぅ、ひどいよぅ」

床にべとりとへばりついたまま、しくしくと泣きだした球体を無視してヴァンが剣の腹に刻まれた模様をなぞった。
刻まれた軌跡が魔法の威力を増幅させる。
「炎よ！“ファイアボール”！」

初級の火の魔法がふぇんりるの足に炸裂した。
ふぇんりるの体毛をごうっと炎の塊が焦がす。初級魔法なので軽いやけど程度の威力しかなかったが、一瞬ひるんだ隙を逃さすヴァンは前足に切りつけた。
「クリスはここにいて！」

そう叫ぶと、勢いを保ったまま部屋へ突入していった。
クリスは追いかけそうになった足を止めて、ぐっと前を見据える。
足元ですらいむじゅうさんごうがブルブル震えていた。

ヴァンは部屋に飛び込むと、そのまま前転した。
すぐ隣をふぇんりるの強靭な顎が通り過ぎる。
ヴァンを噛み千切ろうとした歯を見せつけながら、こちらを見て唸る。

ふぇんりるは白い狼のような姿をしていた。
ただ狭くはない部屋の天井につくほど巨大だった。
その瞳は真っ赤に血走り、凶悪そうな爪と牙がのぞいている。

その背の向こうに見慣れた水の精霊が倒れていた。
ぴくりとも動かない。
物理攻撃がきかないはずの精霊を何が傷つけたのかはわからないが、ヴァンはまず目の前の魔狼を対処することにした。

真上からふぇんりるの爪が振り降ろされる。
それを剣で流して、懐に飛び込んで腹に一撃。
容赦なく斬りつけて、血しぶきを吹かせた。

痛みでふぇんりるがさらに狂ったような咆哮をあげる。
空気の振動で耳の奥がきんと甲高い音を立てた。
瞬間、ヴァンは部屋の壁に向かって吹き飛ばされていた。とっさに剣の腹を盾にしなかったら、鋭い牙に貫かれていただろう。
壁を蹴りつけて床に着地する。

衝撃を殺して身を低くして走り出した。
その真上をふぇんりるの払った尻尾がごうっと音を立てて通り過ぎる。
再び牙を剥いて口を開いたふぇんりるが、目の前に待ち構えていた。
「攻撃が単調なんだよ・・・っと！」

ヴァンは助走を殺さずに飛び上がった。
牙の攻撃を避けて右目に剣を突き立てる。
えぐるようにして、そのまま薙ぎ払った。
ぱっと赤い肉片が飛び散る。

あとは右目を失ったふぇんりるの死角から攻撃し続けた。
間もなく、ふぇんりるは沈黙した。

ヴァンに呼ばれたクリスは恐る恐る部屋に入った。
返り血を浴びたヴァンが外套を乱暴に脱ぎ捨てている。
その側には血まみれの狼のような生き物が横たわっていた。
「ふぇんりるぅ、ふぇんりるぅ」

クリスの横をすり抜けたすらいむじゅうさんごうが飛び跳ねながら近寄ったが、瘴気に侵されたという生き物が息を吹き返すことはない。

クレナダ村に同行したときはヴァンが生き物を殺す場面に遭遇しなかった。
死霊は生前の肉体の一部を核として持っていたが、それは死者のものなので新たな血は流れない。
フードの男と対峙したといっても、あっという間に気絶させられたので戦ったという実感はなかった。

けれど目の前にいるヴァンは血をまとって平然としている。
こんなことが日常茶飯事になるのが冒険者なのか。
クリスが呆然としていると、
「クリス、あそこにいる」

と、ヴァンが腕で顔についた血をぬぐいながら言った。
ゆるゆると視線の先を追うと、ウンディーネが倒れている。
そこではっとクリスは当初の目的を思い出した。
慌てて水の精霊のもとに駆け寄る。
「ウンディーネ、ウンディーネ！」

何度か呼びかけながらウンディーネの体に直接治癒の魔法をかけると、ぼんやりと彼女の青い目が開いた。
ふよふよと流水の髪をなびかせて、ゆっくりと身を起こす。
「ク・・・リスちゃん～？」
「ウンディーネ・・・よかった・・・」
「おはよ～ございます～」

あまりにも呑気な再会のあいさつに、クリスは脱力した。
「おはようじゃないわ。ここでなにがったの？」
「え～と～。これ見つけちゃった～」

そっと手のひらに握りこんでいたものを、ウンディーネはクリスに差し出した。
そこには紫色の石がある。
表面には幾何学的な模様が描かれ、芸術的だ。
クリスは紫水晶かと思ったが、それにしては反射する光が鈍い気がした。
もっとよく見ようと目をこらしたクリスに、ウンディーネは告げた。
「これ～瘴気の塊みたいな～、すっごく嫌なかんじなの～」
ヴァンがクリスの後ろから手を伸ばして、ウンディーネから石を取り上げた。
すらいむじゅうさんごうの淡い光のほうを向いて、石を眺める。
「ただの宝石に見えるけどな・・・」
「でも～、あの村で感じたものと同じよ～？」
ウンディーネの言葉にひゅっとヴァンは息を飲んだ。
クレナダ村を廃村に追い込んだ元凶が手元にあるかもしれないのだ。
クリスは目を見開いてそれを見た。
ヴァンはぐっと石を握り締めると、クリスに向き直った。
「浄化の魔法をかけてほしい」
クリスは無言でうなずいた。
こんなものがここにあってはいけない。この石のせいでクレナダ村は惨事に見舞われ、ふぇんりるという生物が魔物化したというなら拒否する理由などなかった。
クリスはウンディーネに力を借りながら、最大の魔力を込めて浄化の魔法を発動させた。
しかし浄化の光は石の表面の模様に吸い込まれるようにして消えた。
「え・・・」

「あら～？」

石を持ったヴァンと、魔法を無効化されたクリスとウンディーネの沈黙が横たわった。

魔術学校の妖精　？

クリスはお茶を一口飲むことさえ緊張を強いられていた。
目の前にはモナド皇国の最高権力者、皇帝陛下が真向かいに座っている。
皇帝の後ろには宰相閣下と財務大臣。

国の中枢にたずさわる人物にかこまれたクリスは、隣に座るヴァンが平然と茶菓子を食べていることに目まいを覚えた。

なぜこんなことに・・・。
思い返せば2日前に記憶が飛んだ。

あのあと何度か改めて浄化の魔法をかけ直したが、ひとつも効力を発揮できなかった。
ウンディーネも疲れたと言って、クリスの紋の中にするりと入って行った。
契約者の紋の中には亜空間のようなものがあるらしく、なかなか快適だと本人に聞いたことがある。

とにかくこれは自分たちの手に余る、クリスもヴァンも判断した。
さっさとギルドに持ち帰ることにする。
クリスは石を慎重にハンカチで巻いた。ヴァンが足りないと言いたげに、さらに上から外套で乱雑にくるむ。
あとは一刻も早くこの場を離れるだけだ。
クレナダのときのようにフードの男が、いつこの石を回収しに来るかわからないのだから。

もし鉢合わせて戦いになったら、この狭い部屋でクリスを守りながらの苦戦になるは目に見えている。

ヴァンはフードの男の捕獲命令を受けていたが、あくまで彼我の実力差を自覚していた。
万全の状態で、かつわなを仕掛け、不意打ちをつくべき相手だ。
それは今ではないし、戦利品の石もある。
今回はこれで退いておいたほうがいい。
慎重になりすぎることはないのだ。

すらいむじゅうさんごうは、ふぇんりるの死骸に寄り添っていたが、クリスたちが帰還の旨を伝えるとすぐに了承した。
「かなしい、かなしい。でも、でも。まものままま、まものままま。それより、それより、きっと、きっと。うれしい、うれしい」

ヴァンはふぇんりるを殺すことは必要だったと後悔していなかったが、少しだけこの球体の生き物に悪いことをした気になった。
すらいむじゅうさんごうの転移によって外に出ると、すでに夜明けの藍色の空が広がっていた。
日の出も近い。

すらいむじゅうさんごうは出てきたときと同じように、くるりと回転すると地面に吸い込まれるようにして地下の回廊に戻って行った。
「さて、あとはこれをギルドに持っていくだけだから、ついでに家まで送るよ」
「え？私もギルドに行かなくていいの？」
「家を抜け出したことがバレたらどうするんだよ、お嬢様。もう朝まで時間がないよ」

からかうように諭されたが、両親に夜中の不在を知られるのはまず

いとクリスもうなずいた。それにこのままでは朝早く動き出す寮生に見つかる可能性もある。
「そうね、さっさと学校も出て帰りましょう」
ふたりは小走りで夜明けの街を駆け抜けた。

そしてその日の夕方。
寝不足を抱えながら、クリスはようやく夜番の仕事を終わらせた。
それを施設の隅に座って待っていたヴァンが近づいてくる。
クリスも上司をひとり呼んで、情報交換を始めることにした。
「ヴァン君が今朝持ってきてくれた例の石は、もう国の連中に渡したよ。今ごろ宮廷魔法使いや錬金術師たちが研究を始めてるはずだ。遠からずどのような仕組か解明されて、無力化や浄化も可能になるだろう」
「そうですか。あの・・・石を手にした経緯とかは」

クリスは学校に不法侵入したことや、地下回廊の人工妖精――――妖精とは認めたくないが、定義上そう呼ぶことにした――――のことを、どう説明したものかと口ごもった。
「俺もまだそのあたりは詳しく説明してないよ。クリスと同じときに言ったほうが、お互いの視点からの話もできるしね」
「そうね、じゃあ・・・」
「いや、待ってくれ」

考えながら説明を始めたクリスを遮ったのは、難しい表情をした上司だった。
「昼過ぎに国から君たちへの召喚の言伝を承っている。直接話をお聞きになりたいそうだ」

「お聞きにって、どなたが？研究してる方たちでしょうか？」
クリスが首をかしげながら問うと、上司は疲れたように首を振った。
「いいや、陛下が」
「え、」
思いも寄らない人物の名前にクリスは硬直した。
貴族の末端として皇帝陛下が主催する夜会に出席したことはあるが、そのときだって遠目で「あら、陛下は金髪なのね」と離れた場所で見ていた。
落ちぶれた貴族が顔をあわせる機会など皆無だ。
動揺して目線があちこちに飛ぶクリスをよそに、ヴァンは面倒そうにため息をついた。
「ああ、おえらいさんがズラっと並んでそうだね」
「どうしてそんなに平気そうなの！？」
「Aランク冒険者を雇うのは、ほとんど金持ち貴族だからだよ。相手するのは慣れている。さすがに皇帝陛下ほど位の高い人は初めてだけどね」
もしかしなくても貴族のクリスより、冒険者のヴァンの方が貴族間の処世術を身に着けているように見えた。
微妙に負けた気持ちになりながら、クリスは上司に尋ねる。
「召喚状はありますか？日時の確認をしておきたいです」
「これだよ。ほら、こっちはクリスちゃんの分。これはヴァン君の分」
召喚状を受け取ったクリスはそろそろと封を開けて、書面に目を落とした。
略式だが、宰相閣下直筆の呼び出しだった。
登城日は2日後だ。

2日で納得のできる説明を順序立ててできるようにしなければ。
あとドレスも新調しないと。いえ時間がないからなんとか見栄えのいいものを用意したほうがマシね。
学校にも連絡しなきゃ。欠席で試験の評価が落ちて・・・って、あら。その日は休日ね。
よかった。

つらつらと考えていると、ヴァンがクリスの肩をつついた。
「なに？」
「普通に初めから説明してたら長くなりそうだからね。重点を決めて簡潔にまとめたほうがいいんじゃないかな。滞在時間を長くしたいなら別だけどさ」
「そんなわけないじゃない。畏れ多くてすぐに帰りたくなると思うわ」
「なら、打ち合わせようか」

ヴァンの言葉に、クリスではなく上司がうなずいた。
「是非そうしてくれ。私やギルドには国から連絡がまわってきたらわかることだから、そちらを優先してほしい」
「了解っと。それじゃクリスを借りていくけど構わないよね？」
「早めに返してくれよ？貴重な受付専門なんだ」
「わかってるよ」

クリスが口をはさむ間もなく、とんとん拍子に話がまとまった。
ヴァンにうながされて立ち上がりながら、クリスは失くさないように召喚状を懐に入れる。
「どこに行くの？」
「近くの喫茶店。そういうところのほうが女の子は好きそうだし」
「嫌いではないけど」

「じゃ、そこで」

あっというまに大通りにある喫茶店に連れてこられたクリスは目を白黒させた。
やけにヴァンのエスコートがうまく、手慣れているように感じたのは気のせいだろうか。

喫茶店は乳白色を基調とした清潔な雰囲気の店だった。
窓際に置いてある花の鉢植えや、壁際の小さな椅子に座っているクマのぬいぐるみなどが可愛らしい。
日が落ちたためにランプを天井からつるして灯りを取っている。

店内は女性客が多く、冒険者の装いをしているヴァンは浮いて見えた。
彼自身はちっとも気にならないらしく、店員に合図を送ってから窓側の席へ進んでいく。
クリスたちがテーブルにつくと、さっとメニューが店員から手渡された。

クリスは学校のクラスメイトたちがこういった場所に放課後寄り道したり、遊んだりしていることは知っていた。
だが成績を維持しながらアルバイトをこなす身で、そんな余裕はなかったので喫茶店でなにを頼めばいいのかわからない。
だからヴァンに「嫌いではない」と答えたのだ。「好き」かもわからないくらい馴染みのない場所だったから。
「なにを頼むか決まった？」

クリスはメニューから顔を上げずにうなった。
メニュー内容がさっぱりわからない。
「ねえ、ヴァン・・・。お姫様の口どけとか、白雪の雫って料理の

名前なの？」
「ああ、それは創作料理とか。見た目からとった通称みたいなものだよ。普通の料理名を書いてる喫茶店のほうが多いけど、ここは違うみたいだね。気になるなら店員に料理の中身を訊いてみるか、いっそ勘で頼んでみるのも楽しいよ」
「そういうものなのね・・・じゃあ、勘で挑戦してみるわ」

せっかく普段縁のない場所に来たのだから、楽しんでもいいなとクリスは思った。
料理を頼んでしばらく待つと、クリスの前にはお姫様の口どけ。
ヴァンの前には黒い発酵茶が置かれた。
クリスは料理名を口にするとき少し気恥ずかしい思いをしたが、ヴァンは「一番いい発酵茶で」と、メニュー名ではない名前で注文していた。
ヴァンいわく、どこの飲食店でも発酵茶は常備されている庶民の飲み物なので、この店でも単品で頼めるはずだ、ということらしい。
自分で挑戦するときめたものの、通称のメニュー名で恥ずかしい思いをしたクリスはつい恨めしい目を向けてしまった。

お姫様の口どけ――――木苺のムースタルト――――を口に入れたクリスは、とろけるような舌触りにうっとりした。
ついてきたミルクも砂糖か蜂蜜が入っているらしく、ほんのりした甘さがちょうどいい。
「おいしい・・・」
「そりゃよかった」

頬を緩めながら、クリスはタルトを完食した。
そして最後にミルクを飲んでほっと一息ついたとき、はたと気づく。
ものすごく微笑ましいものを見るような目でヴァンが笑っていた見ていた。

食べ終わるまでずっと見られていたらしい。
「こういう店は初めてみたいだったからね。心配したけど、気に入ってくれたみたいでよかったよ」
「・・・うん。でも見てないで声をかけてくれればよかったのに」
「ごめんごめん、なんかなごんじゃって。つい見てた」

クリスは頬を染めて、むっと口をとがらせる。
子どもっぽいと思われたらしい。
羞恥に言い返したかったが、いい反論を思いつかなかったので話を変えることにした。
「それよりも！2日後の打ちあわせをしましょ」
「はいはい」

さらに微笑ましそうに見られた。なぜだろう。

魔術学校の妖精　？

クリスはヴァンから視線をそらして、話を続けた。
「陛下はお忙しい方。面会の時間を短く済ませるためにも、要点だけまとめてご説明した後は、詳しいことを書いた書類で補ってはどう？」
「俺、貴族の書類なんてわかんないよ？」
「それは私が書くわ」
「なら、話す重要な部分だけまとめようか。ウンディーネにも協力してもらおうよ」
「そうね。あの場で何があったのか、まだちゃんと聞いてないし」

クリスはそっと右太ももの紋を撫でて、ウンディーネを呼んだ。
急に流水の乙女が現れた店内は少し騒然としたが、何人かはクリスの顔を見て納得した表情をした。
男爵令嬢クリス＝ルクスが上位精霊の契約者であることは、皇都の魔法に携わる者ならわりと有名である。魔術学校でもクリスは特に隠して生活しているわけではない。
「どうしたの～？クリスちゃ～ん」
「聞きたいことがあるの。どうして呼びかけに応じなかったのかとか、あの部屋でなにがあったのかとか」

ウンディーネは手を顎に当てて、やけに人間臭いしぐさで口を開いた。
あいかわらず顔は能面のように動かないが。
「そうね～。クリスちゃんと図書館でお別れして～、飛んで遊んでいたら～・・・地面から出られなくなっちゃったの～」
ウンディーネが言うには、水の精霊のからだは水の粒子そのもの。

それを霧のように自在に姿を変えられるらしい。
それを応用してネズミでも通り抜けられないほど狭い隙間を通り抜けたり、雨が地面に染み込むように中にもぐりこんで遊んでいたという。
「それって楽しいの？」

ついクリスは訊いてしまったが、ウンディーネはこくこくと何度もうなずいた。
精霊の感覚は人間には理解できないようだ。
「それでね～。ず～っと潜って行ったら、おっきな狼さんがいたからびっくりしたわ～。それでね～魔物化してるみたいだったから～、近寄らないで別のところに行こうとしたの～」
「できなかったんだね？」

ヴァンが確かめる口調でウンディーネに尋ねる。
「そうなの～。あの部屋から出られなくて～困っちゃって～。変で～嫌な石も見つけちゃうし～。だから～狼さんの寿命が来るまで待とうと思って～、寝てたの～」
「倒れてたんじゃなかったのね」

クリスは脱力した。
呼んでも来ないし、見つけたら見つけたで床に伏せる精霊。
どんな凶事が起こったのかと心配した気持ちを返してほしいくらいだ。
「でもでも～。クリスちゃんが起こしてくれなかったら～、きっと１００年くらい眠ってたから～、来てくれてよかったわ～」
「そんなに時間がたったら人間は死んじゃうもの～」と、のほほんと笑うウンディーネ。
クリスは己の契約精霊のあまりの呑気さに、気力を根こそぎ持って

行かれた気分になった。
けれど気になることがあったので、ヴァンに問いかける。
「ねえ、ヴァン。魔物に寿命はあるの？」
「専門家じゃないからはっきりわからないけど、あるみたいだよ。魔物は瘴気に侵された生き物が狂ったなれの果てらしいから、そのもとになった生物の寿命に依存するらしい。猫とか犬だと長くて１０年くらいかな。クレナダ村にいた死霊のようなものだと、核がなくなるまで動き続けるから１００年単位で考えないといけないだろうけどね」
「瘴気に狂う・・・」

———瘴気。
どこから生まれ、どうやって発生するのかも解明されていない力。
昔から人間には普段見えないが、世界中に存在するらしい。
その力は生物を侵食し、理性を奪い、狂暴化させ、魔物に堕とす。
普段見えなくとも、凝縮した瘴気だと視認可能という噂もある。
ひとつ言えることは、浄化の魔法が効果的なことから決して益のあるものではないということだ。

ただ、瘴気を発していたらしき石を持ってもなんともなかったクリスは、浸食される感覚がわからなかった。
それとも長い時間をかけてゆっくり作用するのだろうか。

クリスが考え込んでいるあいだに、ヴァンも気になることが出てきたらしい。
「そういえば、あの例の謎の生物は魔物化していなかったね」
脳裏にコミカルな表情の球体生物が浮かんだクリスは、不快感に眉を寄せる。
「あいつにも話を聞く必要があるね」

「・・・私も行かなきゃダメかしら？」
できれば二度と会いたくない存在である。
しかしヴァンはウンディーネを指さしながら言った。
「ウンディーネしか地下に潜れない。あの生き物が自発的に地上に出てこない限り、俺たちに会う手段はないよ」

ウンディーネの契約者はクリスである。
またクリス自身も事件に関わった人間だ。
なにより皇帝陛下に説明するというのに、気持ち悪いからといって手間を省くことなどできない。
拒否することはできそうになかった。
「わかったわ・・・。それじゃあ学校の門が閉まる前に今から行きましょう。また夜中に忍び込みたくないもの」
「まだ開いてるの？」
「魔法や錬金術の自主練習は夜の7時まで認められているわ。それまでなら開いているはずよ」

クリスは壁にかけられた時計を見た。
５００年前から錬金術が発達するようになり、こういった便利な道具の普及が進んでいる。
時計は最たるもので、昔は大貴族が大金を積んでも入手困難だったらしい。
その時計の長針も短針も６の数字をさし示していた。
「６時半か。急げば間に合うかな」
「ええ。ここから学校まで１０分もかからないわ」

クリスはそう言って立ち上がりながら伝票に手を伸ばした。
指先がふれる寸前でヴァンが横からかっさらう。
「え、ちょっと。自分の分は自分で払うわ」

「俺が誘ったんだからおごるよ」
「でも」
「おごられてなよ、苦学生」

苦学生という言葉に、クリスはぐっと詰まった。
そのあいだにヴァンはさっさと会計を済ませてしまう。
そのまま外へうながされて、慌ててクリスはヴァンに続いて通りに出た。

魔術学校へ向かう道すがら、クリスはヴァンに言った。
「ありがとう・・・でも次は私がおごるから」
「遠慮しなくていいのに。俺ってけっこう稼いでるんだよ？」
「そうね、きっと私の家の全財産より稼いでるでしょうね。でも遠慮とかじゃなくて、けじめなの」

世界でただ一人のAランク冒険者のヴァンが依頼を1つこなすのに、どれだけの金貨が動くかなんて考えただけで目まいがする。
けれどクリスは財政難にあえぐ男爵家を知ったときから、実家のために自分でできることはすべて自分でこなしてきた。
特待生になるために猛勉強したし、半額になった学費を払うこともアルバイトをして賄う。

硬いクリスの表情に、ヴァンは面白そうな声を出した。
「ふぅん、クリスは生真面目だね。じゃあ次は期待してる」
「え。あれ？・・・あ、うん」

無意識の流れで、またヴァンと出かける約束をしてしまったクリスは首をひねったが、
いまさら撤回もできないので仕方なくうなずく。
そんなふたりの上空をただよいながら、ウンディーネが「クリスち

ゃんって〜、おもしろ〜い」と言った。

ぽよんぽよんと跳ねる球体から、クリスは視線を逸らした。
あのあと閉門する前に魔術学校に入ったふたりは、用具倉庫まで再訪してウンディーネに
地中に潜ってもらった。
そして人目を避けるために地下の回廊まで潜っている。
その際に再びすらいむじゅうさんごうに飲みこまれて転移したので、もう丸いもの全部がトラウマになりそうだった。

・・・ふぇんりるの死骸がある部屋には入っていない。
まだ血の海に沈んでいると思うと足がすくんだ。
そんなクリスを見ていたすらいむじゅうさんごうは、線にしか見えない眉を器用に下げて情けない顔をした。
ヴァンが腰を落として球体に尋ねかける。
「ちょっと訊きたいことがあるんだ」
「ぼく、ぼくに。ききたいこと？ききたいこと？」
「ああ、いろいろね。まず、あの石はなぜここにあったのさ」
「しらない、しらない」
「知らない？フードをかぶった男は来なかった？」
「にんげん、にんげん？きてない、きてない」

すらいむじゅうさんごうの返答は簡潔だった。
ヴァンは考えることを後回しにして、疑問点を次々と質問していく。
「あの狼は魔物化したのに、お前が無事なのはどうして？」
「ぼくの、ぼくの。のうりょく、のうりょくは。“まほうをつかえるていどののうりょく”だから、だから」
「能力？」

「まじょ、まじょが。くれた、くれた。ぼくらを、ぼくらを。つくって、つくって、くれたの、くれたの」

クリスは驚愕のあまり見ないようにしていた球体のほうをふりむいた。

「魔女ですって？まさか青の森の魔女？」

「うん、うん」

思わぬところでモナド皇国の伝説の名前が出てきたと、ヴァンも驚いた。

すらいむじゅうさんごうは続けて言った。

「ぼく、ぼくも。しょうき、しょうき。あぶなかった、あぶなかった。でも、でも。まほうで、まほうで。じょうか、じょうかした」

５００年前。

モナド皇国が建国された当時、まだ盤石ではなかった国のために魔女エレオノーラは要となりそうな施設を守護する方法を編み出したらしい。

それが人工的に妖精を生み出して、役割と力を与え、土地と契約するもの。

魔女はすらいむじゅうさんごうに“魔法を使える程度の能力”与え、ふぇんりるには“人間を幸運にする程度の能力”を与えたという。

さらに妖精たちに共通の能力を１つ、自動的に発動し続けるような“主に空間を固定させる程度の能力”をほどこした。

建物と地盤を維持し、上で暮らす人々に安寧をもたらす力。

ふぇんりるが瘴気に侵されて狂っていったとき、すらいむじゅうさんごうは自身を浄化しつつ、同胞にも魔法をかけようとしたらしい。

しかし、すらいむじゅうさんごうの魔法は球体の内側で発動するものだった。

飲みこんで身の内に取り込まなければ、他者に魔法をかけられないのである。地下回廊を行き来するのに、人間を丸呑みするのもそのためだ。

本来魔法にそんな規制はない。
すらいむじゅうさんごうが言うには、人工的に妖精を模写したら劣化したものができあがるという。
どういう具合に劣化するかは人工妖精ごとに違ったようだが。
「まじょ、まじょにも。せつりは、せつりは。かえられない、かえられない」
「じゃあ、ふぇんりるを飲みこめばよかったじゃないの」

クリスは憧れのエレオノーラの話に少し興奮しながら言った。
球体の人工妖精は悲しげに身を震わせる。
「ふぇんりる、ふぇんりる。よけて、よけて。だめだったの、だめだったの」

そのまま床に楕円形に広がってしくしく泣きだした。
黙って話を聞いていたウンディーネは退屈してきたのか、すらいむじゅうさんごうの真似をしていっしょに床にべちょりと広がる。
ふたつの水たまりのような生き物ができあがった。

呆れた目を向けながらクリスは、避けたくなる気持ちはわからなくもないと冷静な感想を抱いた。
ただ同胞のふぇんりるの場合は気持ち悪さからではなく、瘴気によってまともな判断ができなかった結果かもしれない。
そしてとうとう完全に魔物化してしまった。

そんなときにウンディーネがたまたまやって来たのだという。
ウンディーネは正規の扉であるすらいむじゅうさんごうの転移では

なく、地面をもぐってやってきた。
そのため魔物化しても自動発動し続けていた、ふぇんりるの“主に空間を固定させる程度の能力”がウンディーネを訪問者ではなく、建物の一部が落ちてきたと認識したらしい。
その動く“建物”を固定させるために、ふぇんりるの能力はウンディーネを部屋に閉じ込めた。

水たまりから球体に復活したすらいむじゅうさんごうが、ウンディーネのほうを向いて言った。
「ごめんね、ごめんね。たすけたかった、たすけたかった。でも、でも・・・」
「気にしないで～。私、寝てたから～」

ちょっとは気にしたほうがいい。
クリスは心の中でつっこんだ。

ヴァンが話の筋を戻すように口を開いた。
「んで、困ってるところに水の精霊の名前を呼ぶ俺たちを見つけたってわけ？」
「うん、うん。そうなの、そうなの。たすけてほしくて、たすけてほしくて。ここから、ここから。でたの、でたの」
「なるほどね」

クリスは頭の中で話の内容を整理しながら、ふとこの回廊について疑問に思った。
地下回廊はどこかに通じているわけではなく、小部屋とそれにつながる行き止まりの通路があるだけだ。
「ねえ。ところでこの地下の空間ってなんのためにあるの？私、学校でこんな場所があるなんて聞いたことなかったわ」
「ここ、ここ。ひみつのこべや、ひみつのこべや」

「秘密？どうして」
「しらない、しらない。まじょ、まじょが。がっこうには、がっこうには。ひつようだって、ひつようだって」
「・・・よくわからないけど、伝説の魔女のことだもの。きっと深い意味があるのね」
無理やりクリスは自身を納得させた。

おおよその事情を把握したクリスとヴァンは、すらいむじゅうさんごうに別れを告げて地上に戻り、急いで学校から出た。
閉門ぎりぎりの時刻である。
「じゃあ、私はこのままギルドの仕事が終わったら、家で書類にまとめるわ」
「そうだね。そっちは任せるよ」
「ええ。じゃあ2日後に」
そして目の前の状況ができあがった。

魔術学校の妖精　？（後書き）

エレオノーラ「魔法の学校に秘密の小部屋はデフォでしょ。大きな蛇も、例のあの人もいないけどねぇ」

魔術学校の妖精　？

回想から意識を戻したクリスは、ゆっくりと手元のティーカップを机に戻した。
彼女がまとめた書類は宰相の手にある。
すでに事件のあらましはヴァンが説明したあと、クリスは補足の情報をつけたした。

そうして言うべきことがなくなると、皇国の中枢はそれぞれに考え込んだ。
彼らの中でどんな結論が出されたのか、クリスははらはらしながら視線をあげた。
皇帝陛下の緑の瞳とかちあう。
びっくりして目を見開く少女に、皇帝はふっ笑いかけた。
壮年の偉丈夫の目じりに人懐こそうな印象を与える皺が寄る。
「よく調べてくれた。引き続き指名手配の男の情報を追ってもらいたい。・・・だが、いくつか黙っていてもらうことができたな」
「はい、陛下。なんなりとお申し付けください」
「1つ、余の祖。魔女エレオノーラのつくった人工妖精のこと。2つ、瘴気を撒く石がまだ浄化されておらぬこと。あとは・・・宰相、財務大臣。なにかあるか？」

皇帝の言葉を継いで宰相と財務大臣が口を開いた。
「陛下、犯人らしき男が人間ではないかもしれぬことも黙っていてもらうがよろしいかと存じます」
「そもそも魔術学校に侵入されたこと事態を、内密にした方がよろしいのではないでしょうか」
ふたりの言葉に皇帝はうなずいた。

「では、この４つの沈黙を命ずる」

クリスは内容に気になる部分があったが、命令に応じようとした。しかしヴァンが片眉を器用にあげて遮る。

「待ってくれないかな。３つ目の犯人が人間じゃないってどういうこと？」

説明のあいだも敬語を使わないヴァンだったが、クリスの心配をよそに皇帝たちは無礼を見とがめなかった。

皇帝は「我が国の民ではない。ましてや貴族でもない者に忠誠や敬う心は求めぬ」と、ヴァンの行動を容認したのである。

今も命令をすぐに受けなかったが非難されなかった。

宰相がクリスの書類に目を落としながら、ヴァンの疑問に答えた。

「１つ１つ理由を述べましょう。１つ目の沈黙は、この国の礎がいまだ人工妖精に支えられていることが諸外国に漏れては一大事だからです。モナドは自力で大陸の覇者であり続けねばなりません。国の威信というやつです」

それはクリスにも理解できたのでうなずいた。

隣でヴァンも静かに首を縦に振る。

「２つ目の沈黙は、国民に不安を与えないためです。生物を魔物に堕とす元凶が排除されていないことは、大いに世論を騒がせるでしょう。ただでさえ国境が結界で封鎖されておりますから、どれだけ救済策を出しても圧迫された精神が暴動に結びつかないとも限りません。少なくとも石の解明が済み、浄化する方法が発見されるまでは黙っていていただくことになります」

宰相は眼鏡を押し上げて、ため息をついた。

４つ目の沈黙を提言した財務大臣のほうを見やって言う。

「疑問を呈された3つ目は最後にご説明します。4つ目の沈黙は、国の威信も関係がありますが主に国庫の問題ですね」
「そのとおり。外国の要人も留学している場所に侵入者などあってはならん」

外国からの留学生がもたらす経済的利益は大きい。
留学生が自国へ戻ったときに魔術学校をアピールすれば、観光にやってくる人間もいる。
さらにまた留学生を送ろうと考える国も出るだろう。
加えてそれが要人であれば、彼らに随行してきた人間たちが消費する生活物資の分だけ周囲の店が潤う。
それなのに魔術学校が安全ではないとなれば、留学する者は激減する。
経済の回転はとどこおり、国庫に直撃するだろう。

財務大臣は淡々とそう説明しながらも苦い表情をしていた。
宰相が話を自分に戻す。
「1つ目、2つ目、4つ目は納得していただけたと思います」
「そうだね。それで肝心の3つ目は？」

ヴァンが続きをうながした。
「人工妖精の発言に問題があるのですよ。地下に人間は来ていない。では、人間以外は？ルクス男爵令嬢の精霊のような存在なら、小部屋へ自由に入れます」

その発言にクリスは首をかしげた。
「よろしいでしょうか？」
「どうぞ、ルクス男爵令嬢」
「ウンディーネは妖精の力で小部屋に閉じ込められ、自力では出てくることができませんでした。犯人が地面に潜って石を置いたなら、

彼もまた出られないのでは？」
「それは人工妖精が魔物化せず、暴走状態ではなかったからでしょう。理性を持った人工妖精が意志あるものを、無機物と誤認して固定の力をふるうとは考えられません」
「ずいぶん人工妖精を買ってるんだね」

ヴァンが冷やかに評した。
それに皇帝が苦笑しながら言葉を発する。
「人工妖精と交流を持っておれば、そう考えもする。そなたらはこの国の要所に彼らがいることは地下で聞いているはずだな？当然この城にも存在する。余は幼き頃から彼らと接してきた。この宰相と財務大臣も余の乳兄弟ゆえに知っておる」

クリスは目を見開いた。
頭の中ですらいむじゅうさんごうの球体が分裂して、いくつもの丸い人工精霊が城にいる様子が浮かぶ。
すぐに狼の姿をしていたふぇんりるを思い出して、そんな妖精の姿ばかりではないはずだと首を振って否定した。
あんなものが城中にいるとは考えたくない。

ヴァンがその明るい茶髪の髪を乱暴にかき回してから言った。
「犯人が人外の可能性が高いことはよくわかったよ。それと、ここに人工妖精がまだいることを知られて魔物化させたくないってこともね。口止めの本当の目的はそっちでしょ」
「そうだな。宰相が述べたことも真実だが、否定はせぬよ。彼らへの愛着もあるが、魔物化して国の基盤が揺らぐことこそ恐ろしい」

だんだん自分の顔がこわばっていくのが、クリスにはよくわかった。
ここで聞いていることは、末端の貴族が知っていいことではない。
この情報はモナドを崩壊させる引き金そのものだ。

じっと青ざめるクリスの表情を見ていた宰相が口を開いた。
「ご理解いただけたようですね。陛下の沈黙の命、受けてくださいますか？」

クリスに否はない。
むしろギルドで上司が「国への報告を優先してほしい」と言ってくれて助かったと思った。
そのおかげでクリスはギルド職員にも家族にも相談しないまま、皇帝陛下へ奏上する書類作成に追われたのだから。
「はい・・・。この生命にかえても決して口外いたしません」
「俺も構わないよ。冒険者の依頼人への守秘義務に入るだろうしね」

ヴァンも諾と返事をした。その口調が軽いのは彼がモナドに属していないからだろうか。
クリスはなんとなく不安になって、ヴァンの青い目を見つめた。
その視線に気づいたヴァンが「なに？」と問いかけてくるのに首を振る。
不安の理由がわからないのに、言葉にできなかった。

城を辞したクリスは、ヴァンと男爵家の馬車に乗っていた。
彼は窓から大通りを眺めている。
このままギルドにヴァンを送ったあと、クリスは自宅に戻る予定だった。
ヴァンは振り出しに戻ったフードの男の情報をまた集めるために。
クリスはまだアルバイトの時間まで余裕があるので、ドレスを着替えに。

不意にヴァンがクリスを見た。
上から下までまじまじと観察される。
「どうしたの？」
「いや、その恰好で喫茶店に入るのは目立つよね」
「え？それはそうでしょうね」

話の流れはわからないが、このドレスで通りを歩くのは勇気がいる行為だった。
クリスの夜明けの色をした髪と、湖面のような瞳にあわせた特注品である。
青を基調に藍色のフリルをふんだんに使った、色のグラデーション。
ボンネットには控えめながら精緻な青薔薇が刺繍されている。
首元のチョーカーもそれに合わせてたもので、蒼いサファイアの宝石が薔薇の形に咲いていた。
財務が圧迫している男爵家だから、手持ちのドレスは数点しかない。
しかしそのなかで一番仕立てに力を入れさせたものだ。
「じゃあ着替えてからでいいかな」
「だから、どうしたの？話が見えないわ」
「あれ、忘れちゃった？またお茶する約束したよね」

クリスは2日前のやり取りを思い出した。
今度は自分がおごる、と確かに言った記憶がある。
「そういえば約束したわね。私は構わないけど、あなたはあの男の情報を集めなくていいのかしら？」
「しばらくの間は仕事にならないよ。城の人間に見張られてたら、下手に情報屋とか接触できないね」
「城の？」

クリスも窓から外を見たが、男爵家の馬車に併走しているものは見当たらない。

ヴァンが彼女の注意をひくように手をひらひらと振った。
「そう簡単に見つかるような尾行はしてないよ。でもあんまり見ないほうがいいね。・・・俺たちが本当に沈黙を守るか確認したいんじゃないかな」
「そう・・・そうよね。陛下に信じていただけるだけのものが、私には何もないもの」

没落貴族の娘がいくら誓ったところで、口外しないことを証明するものもなければ実績もない。
一時の金目当てに、誓いを破って情報を売ると考えられても仕方なかった。
そのあとでどんな処罰が待っているかなんて恐ろしい想像しかできないが、己の欲望のために身を滅ぼす底辺の貴族がいることを、クリスは知っている。
ヴァンは馬車の背もたれに身を沈めて足を組んだ。
「あんただけじゃない。俺だってただの冒険者で、この国の人間じゃない。ギルドのランクなんて上の人間にとっちゃ、所詮仕事ができるかできないかの基準でしかないしね。金で動く俺たち冒険者を信用しろってほうが無理」

正論だが、自身のことをあっさり信用できない人間だと判断する彼にクリスは悲しい気持ちを覚えた。
たしかに乱暴狼藉の代名詞のような冒険者も多い。
けれどクリスはヴァンに傷つけられたことはないし、護身用に身代わりの彫像という貴重な道具を譲ってもらった。
それにクレナダ村のときも、2日前の事件のときにもずっと守ってくれたのだ。
だからクリスは、ヴァンが誰かに告げ口するような人間ではないと信じている。
「私はあなたのことを信用しているわ」

きっぱり言うと、ヴァンは虚をつかれたような表情をした。
これだけ顔を合わせておきながら疑っていると思っていたのかと、クリスは少し腹立たしい気になったが、先に約束の用事を済ませてしまおうと口を開く。
「それじゃあ一度私の家へ戻ってから、あらためて外出しましょう。着替えているあいだの時間は、応接の間で待っていてもらってもいいかしら」

ヴァンは少し間をあけて、ゆっくりとした口調で言った。
「・・・中に入っていいの？」

クリスはいぶかしげに答える。
「お客様を外で待たせていられるわけないでしょう」
「冒険者を入れたがらないお貴族様は多いんだけどね」
「うちは格式もないし、部外者を入れないほど警備が厳しいわけでもないわ。それに招いておきながら放置するなんて失礼すぎるもの」
「そっか」

そう言ったきり、ヴァンは男爵家に到着するまで口を閉ざした。
クリスも御者に進路をギルドから実家に変更する旨を伝えたあとは、会話の糸口を見つけられなかった。

身軽な服装に着替えたあとヴァンに連れられて訪れた喫茶店は、以前打ち合わせに利用した店よりも落ち着いた雰囲気だった。
丈夫な石材の建物が多い皇都では珍しい木造で、こじんまりとしている。
中に入ると美しい飴色をした木目の机がいくつか並んでいる。
客はあまり多くないようだ。
「前に皇都で依頼受けてたときに、たまたま見つけてね。料理にはずれはないし、静かでいい店だよ」

前の席についたヴァンがそう言った。
もとから机に置いてあったメニューを開くと、見慣れた品目が並んでいる。
クリスは連続で予想できない料理に挑戦する気はなかったので、ほっとしながらうなずいた。
「そうみたいね。大通りから何本か道をはさんでいるおかげで騒がしくないわ」
「そうそう。隠れ家みたいでいいっしょ」

子どものような表情でヴァンが笑った。
こんな顔もできるのだと驚いたクリスは、目をまたたかせる。
「こういうところが好きなの？」
「クリスは嫌い？」
「訊いているのは私なのだけど・・・。いいえ、気に入ったわ。前に行ったお店はたまに行くくらいがちょうどいいんじゃないかしら。普段、学校でもギルドでも人が多い場所にいるから、こんなふうに落ち着ける場所があるといいわね」
「なら、よかった。俺もそんなに人の多い場所は好きじゃないし」

ヴァンの台詞に、クリスはメニューから顔を上げて視線を合わせた。
「そうなの？ギルドの人たちとけっこう話していたから、なんだか意外だわ」

もしや自分のように人見知りなのだろうか。
Aランク冒険者のヴァンが？
クリスは自問自答して、それはないと首を振った。
各地を旅しながら人と交流して依頼をこなす冒険者が、人見知りとは考えられない。
ヴァンが頬づえをついてぼそりとつぶやいた。
「だって、めんどくさいし」
「・・・は？」

予想外の答えに間の抜けたが出た。
ヴァンはため息をつきながら続けて言う。
「冒険者やってるとさ、あちこち移動するから浅い人間関係しかできないわけ。そのくせ噂だけは詳しく流れるから、悪い評判たてられるくらいなら愛想をふるくらい、別に苦じゃない。だけど、いくら人と話すのが苦手とかじゃなくたってさ。毎日それだとうんざりしてくるんだよ」
「・・・・・・」

クリスは無言で頭痛のしてきたこめかみを押さえた。
それはつまり外面がいいということだろう。
今まで守ってくれているヴァンを、無意識のうちに聖人君子の枠に収めてしまっていたらしい。幻滅はしないが、自分への対応が親切心ではなく愛想からのものだとわかるのは気分がいいものではない。
「それなら無理に私との約束を守らなくてもよかったのに・・・」
「無理はしてないけど？」

きょとんとヴァンが目を見開いた。
「クリスは話してて楽だよ。おべっか使わなくても怒らないし、ウソをつく必要もない。っていうか、それならこの店に連れてこないからね」
「えっと・・・それなりに私は認められていると思っていいのかしら」

うまくヴァンの言葉を飲みこめなかったが、クリスはそう解釈した。ヴァンもうなずく。
「そうだね。貴族なのに屋敷に招いてくれるような子はすごく貴重だよ」
「貴重って言われても、貴族としてあなたに何かしてあげられることはないわよ？自分で言うのもむなしいけれど、うちは没落して久しいのだから」
「そういう意味じゃないよ。普通に話せるのが貴重だって言ってるんだ」

貴族の子女は幼いころ「冒険者は粗野だから近づかないように」と躾けられる。
それは親や雇った家庭教師からほどこされるもので、防犯的な意味合いがあった。
魔物退治などをする冒険者は乱暴な態度を取る人間が多く、下手な態度を取って逆鱗に触れて怪我をさせられないように。
また、貴族や金持ちの子どもばかり狙って身代金を要求するような、冒険者とは名ばかりの人間に関わらないように。
そう教育されて育つと、冒険者に対して恐怖心を抱いたまま大きくなる。
だから彼らはやむなく冒険者に依頼ができたとき、居丈高な態度で怯えを見せないように対峙するのだ。

クリスは実家の財政難から仕事を選んでいられなくて、高い賃金を払う夜のギルド受付係をアルバイトにした。
そのおかげで乱暴なしぐさや口調の冒険者でも、性根は気持ちよい人たちもいると知ることが出来たのである。
だから彼らに対して必要以上に警戒しない。
ヴァンが言うところの普通に話せるのが貴重というのは、そういうことだろう。
クリスはそう納得した。
「そうね。貴族らしくないのは認めるわ」
「うん、こうやって一般の民みたいな服着てるクリスのほうがしっくり来るよ。城にいたときみたいに着飾られると、どう接していいかわからなくなりそう」

皇帝陛下相手に普段の冒険者の衣装で対面して、さらに対等な口を聞いていた男の言葉とは思えない。
現にヴァンは軽くからかっているのか、いたずらっぽく青い目を細めている。
クリスも声を出して笑った。
「ふふっ。そんなに心配しなくても、あんなドレスはそうそう着ないわ。一張羅なのよ？」
「そりゃ安心だね」

ふたりで顔を見合わせて、また笑った。

調子はずれの鼻歌を歌いながら、くすんだ金髪の男が手の中のものを見る。
彼のざんばらになった髪は適当に編みこまれているだけで、あちこ

ちに飛び跳ねていた。

男がいるのは皇都の裏路地にある一室だ。
もともと別の住人が住んでいたが、その者は彼の背後で物言わぬ骸と化していた。
その人間が男か女かも判別がつかないほど、鋭利な何かで切り裂かれ、引きちぎられ、臓腑をまき散らしていた。

死亡してからそれほど時間がたっていないのか、濃い血臭が部屋に充満している。
男はそれをまったく気にする様子はなかった。
血だまりの上に座り込み、薄汚れた服を床に脱ぎ捨てる。
すぐに衣服は血を吸って、どろりとした赤黒い色に染まった。

続いて彼は裸のまま無造作に歩いて部屋を物色する。
サイズの合う白のズボンと、黒の上着を見つけると嬉しそうに身に着ける。
着ることが出来れば構わないと言いたげに、それが男物か女物かは関心がないようだった。

新しい服を調達し終わると、彼は再度視線をずっと握っていた手元に戻す。
それは男が河原から拾った、なんの変哲もない手のひらほどの鉱石だ。
川底で石同士ぶつかりあい、磨かれて丸みを帯びた石は不透明な鈍い輝きを放っていた。
彼は楽しそうに石を手のひらの上で転がす。

一回転。
石の内側に複雑な記号が刻まれた。

二回転。
石の表面に幾何学的な模様があらわれた。
三回転。
記号と模様を際立たせるように、石は透明になった。

男は満足げに左右から石を観察する。
「んっん～。こんなもんデショ。ボクって天才」

自画自賛しながら片方の腕の袖をめくり、軽くかかげた。
その瞬間、風が唸って男の手のひらを切り裂く。
鮮血があふれ出し、彼の頬に飛び散った。
さらに腕を伝って肩まで血にまみれる。
「ちょっと切りすぎたカナ？まあいいカ」

痛みを感じていない口調で、男は無造作に石に血をたらした。
模様の上に広がった血液は石の表面を滑らずに、海綿のように吸い込まれていく。
やがて透明だった石は赤色に染まり、続いて深い紅になり、最後には紫色に変貌した。

それはクリスたちが魔術学校の地下で発見した、あの石に酷似している。

彼は―――ヴァンに名前はないと言った男は、手の中の石を大切そうに見つめる。
「今度は時間かかったケド、やっぱりなんでも丁寧にするのがいいヨネ。もっと手をいれてもいいカナ・・・」

そう言いながら石を撫でる。
その頃には男の腕に走った裂傷は跡形もなく消えていた。

治癒の魔法を発動した様子もないのに、腕には傷跡すらない。
血の跡がなければ怪我をしたとは思えないほどだ。
「うん、そうダネ。もう少し手を加えタラ、きっともっとよくナル」
ひとりで納得した男は、さっさと歩いて部屋を後にした。
扉を開けて外の路地に出る。
太陽が真上から強烈な光を浴びせていた。

遠い大通りからここまで、人々の営みの声が聞こる。
暑いくらいの日差しだ。
彼はまぶしそうに手を顔の上にかざしながら、さらに路地を進んでいった。

途中でこの辺りに住んでいる住人らしき女たちが、数人集まって噂話をしているところを見つける。
彼は小声で魔法を発動する呪文を口ずさみながら、跳ねるようにその場を横切った。
男が通りすぎた途端、女たちの体から血が噴き出す。
まとめて風の魔法によってずたずたに切り裂かれ、ただの肉塊に成り果てた。

それを見もせずに、男は路地裏のさらに奥へと進んでいった。
特に彼に目的地はない。
ただふらふらと奥へ行きながら、出会った人間を殺していく。

十数人殺したあたりで、周囲が騒々しくなってきた。
遠くから人の叫び声や、鎧がすれ合う金属質な高音が聞こえてくる。
ようやく死体を見つけた人々が騎士団を呼んだのかもしれない。
「うるさいナァ。もうちょっと殺し足りなかったノニ、仕方ないナ」

男が手に持っている石の色を見ると、紫色にところどころ黒色が混じっている。

「前は地面のなかだったカラ、今度は高いところがイイナ」

楽しげにそう言った彼の姿は風に紛れて消えた。

第三章　主な登場人物（前書き）

※三章のネタバレあり

第三章　主な登場人物

～登場人物紹介～

・クリス＝ルクス　１６歳　女
男爵令嬢。でも土地があるだけ。お金はない！学費はギルド受付のバイトで稼いでます。
水の大精霊ウンディーネとの契約者。

・ヴァーヴァティ　１９歳　男
樹海で冒険者に拾われ、育てられた捨て子。
冒険者ギルドで唯一のＡランク。本名は長いので「ヴァン」と略している。
現在、モナド国家とギルドの依頼でクレナダ村を廃村に追い込んだフードの男を追跡している。

・ウンディーネ　年齢不詳　女
水系統の精霊の中で一番力を持つ精霊。
生まれたばかりのクリスの魂が水色だったので、水を司る存在として好感を持つ。
そのままそばで成長を見守るために無断で一方的に契約。

・名無し　年齢不詳　男
最近各地で起こる魔物や精霊の暴走事件にかかわっている青年。
とても強い魔法使い。
話し方が独特。

・エレオノーラ　年齢（三十路＋５００年程度）　女

かつてのクレセント王国の公爵夫人。
蒼の森の魔女と呼ばれ、絵本などにも登場する有名人。
魔法と錬金術を使わせたら右に出る者はいない。

・キール　年齢（１８歳＋５００年程度）　男
かつてのクレセント王国公爵家当主。
エレオノーラの夫。
見た目は永遠の美少年。その実、腕も口も達者なヤンデレ様。

・ギルベール　年齢（２５歳＋５００年程度）　男
亡きグランティオス帝国の元間者にして、かつてのクレセント王国公爵家の家宰。
帝国の禁術により、肉体改造されている。
近年、めっきり主婦業が板についたという噂が・・・。

・すらいむじゅうさんごう　年齢不詳　性別不明
ぷにっとした丸っこい球体の持ち主。モナド国立魔術学校の妖精。
“魔法を使える程度の能力”保持者。

・メルルゥ　年齢不詳　性別不明
ウサギ型の人工妖精。すらいむじゅうさんごうよりも流暢に人語を操る。
“形や大きさを自在に変えることができる程度の能力”保持者。

・黒竜ジークフリート　年齢不詳　性別不明
モナド皇国の心臓部、城の塔に住む全盲の人工妖精。
“奇跡を起こす程度の能力”と“ありとあらゆるものを破壊する程度の能力”保持者。

・皇帝、宰相、財務大臣

皇国の頭脳３人トリオ。
皇帝の一族は代々、祖先のエレオノーラの黒髪とキールの緑の目を持って生まれてくる。
宰相と財務大臣は皇帝の乳兄弟で幼馴染。

・マリー　三十路～四十路前半　女
冒険者ギルドで昼番をしている女性。
クリスと同じ年頃の娘がいる。

モナドの竜　？

皇都の裏路地で大量殺人事件が起こる1か月前。

クリスとヴァンはあの喫茶店での出来事以来、時々ともに出かけるようになっていた。
ギルド受付の昼番であるマリーなどは、面白がって「若いっていいわね」と笑っていたが、クリスはまったくそんな甘い関係ではないときっぱり言い返した。

なにせ行く場所が喫茶店であったり、日用雑貨の小物屋だけではないのだ。
ヴァンの剣の手入れをしに武器屋へ行くこともある。
フードの男の情報収集のために、あらくれ男たちが集まる場末の飲み屋に連れて行かれたこともあった。クリスのような若い女の子がいれば野郎の口は軽くなるんだよと同行させられたのだが、顔が引きつった。

いくら普通に話せる貴重な相手として認められていても、これは遠慮がなさすぎる。
私は冒険者ではない。
そもそも女の子に対する態度じゃない。
「・・・と、そう思うのよ」

クリスは目の前に座って発酵茶を飲んでいるヴァンを、じとっと見据えて訴えた。

学校は休日。夜からのギルド受付をするまで時間の空いていたクリスは、久しぶりに家でゆっくりしようとのんびり本を読んでいたら、突然訪ねてきたヴァンに喫茶店まで連れ出されのである。
一度クリスが招待した客人ということで、玄関で対応した使用人は疑うことなく通してしまったらしい。

ヴァンは飲み終わったカップを机に戻した。
あの木造の隠れ家のような喫茶店には、自分たち以外に客は数人しかいない。
「クリスは女の子扱いしてほしいってことだね？」
「特に丁寧に接する必要はないわ。でも最低限のことってあるでしょう？この1か月、いろいろなところに連れまわされて、さすがに文句の一つも言いたくなったの」
「迷惑だった？」
「・・・迷惑していないと思っていたことにびっくりしたわ」

クリスは皿の上のシフォンケーキを、側に添えてある生クリームをのせて大きく切り取って口に含む。
ほんのりした甘さが怒りを和らげてくれる気がした。
むっつりと頬を膨らませているクリスに、ヴァンが困ったような表情をした。
「ごめん。言ってくれたらよかったのに・・・。女の扱い方しか知らなかったからさ。どう接していいかわからなかったんだよ」
「少しくらいなら我慢できるから今まで言わなかっただけよ。・・・接し方なんて同じじゃないの？」
「全然違うと思うよ」

若くても年老いても、女性は女性だと思う。
クリスはヴァンの言葉に首をかしげた。
そこでふと場末の飲み屋でかけられた言葉を思い出して、ひとつの

可能性に気づく。
低い声で問いかけた。
「それは商売女の扱い方しか知らないという意味かしら？」
冒険者の男に連れられてきた少女に対する男たちの対応はふたつに別れた。
ひとつは関わらずに遠巻きに眺めるだけの者。
もうひとつはわざと絡みに来て、経験の浅そうな若い冒険者からあわよくば少女を奪おうとする者。
当然彼らはヴァンがＡランクとは知らずに喧嘩を売ったので、きっちり制裁されていた。
そのときに「商売女のくせに」と捨て台詞を吐かれたのを思い出したのだ。
クリスは箱入りの貴族令嬢ではない。
夜のギルド受付をこなしていれば、その言葉が肢体を売りにする娼婦のことだという知識くらいはつく。
そのときは敗者の戯言だと聞き流した。

クリスの湖面のような透き通った目が、今は凍える氷のように冷たくなっている。
ヴァンが慌てた口調で、両手を前にしてクリスの冷えた視線をさえぎった。
「えっと、ごめん。ほんとごめんって！今度から気をつけるから！たとえば、ええと、夜は連れ出さないとか！ほらいろいろ気をつけるから！」
「質問の答えになっていないわ」
「勘弁してよ・・・」
ヴァンは力なく机に突っ伏した。
明るい茶の髪が窓から差し込む日の光を反射して輝く。

それを眺めていたクリスは、追求しすぎたかと反省した。
実はそれほど彼女は怒っていない。
冒険者たちが娼婦を買うことも、それが商売として経済の一部となっていることも忌避感はない。特定の女性がいるにも関わらず、そういう行為をするなら話は別だが。
そうでないなら、彼女たちのような夜の慰めが必要なときもあるだろうという理解もできる。
ただ今までのように振り回されたくなくて、わざときつい物言いをしただけだ。
こんなふうになるまで追い詰める気はなかった。
「ごめんなさい。言いすぎたわ」

その言葉にヴァンが顔を上げる。
「許してくれたってことかな？」
「ええ、これから気をつけてくれるのでしょう？」
「もちろん」
「なら、いいわ」

大の男。それもAランク冒険者がすがるような声で言うのに、クリスは笑った。
笑顔が見れたことでクリスが本当に怒っていないとわかったのか、ヴァンもほっと息をついている。
「それで、今日はこれからどうするの？私は家で本の続きを読むわ」
落ち着いてクリスが尋ねると、ヴァンは視線を上にあげて思案気に口を開いた。
「俺はこのあと情報集めるのがうまいやつを何人かあたってくるよ。まあ、いつも通り期待してないけど」
「そうね・・・。ギルドに寄せられる、あやふやな目撃情報も最近

は少なくなってきているわ」
「どこかに完全に潜ったかな」

フードをかぶった風の魔法を使う男。
それだけしか判断材料がないので、集まる情報はあやしいものばかりだ。
その不確かな情報さえ、この頃は出てこなくなっていた。
クリスはあの男が人間ではないという皇帝陛下たちの言葉を思い出す。

たとえばクリスの契約精霊ウンディーネの実体は水の粒子で出来ている。
そのため地面にも滲みるように潜り込めるし、空気中に霧のように漂うことも可能だ。
もしフードの男も同じことができるなら、人間から身を隠すなど容易だろう。
ヴァンがため息をつきながら言った。
「いっそどこかで事件でも起こしてくれれば、まだ特定しやすいんだけどね」
「縁起でもないこと言わないで。またどこかであんな石が出てくるなんてごめんだわ」

クリスはウンディーネが行方不明になったときの記憶を思い出して苦い顔をする。
「そうして魔物が出てくるなんてことになったら・・・」
「魔物ねえ・・・石のことがあるから、魔術学校でのことはあいつが関わってる可能性が高い。でも石と魔物以外にもあの男自身を警戒したほうがいいよ」
「風の魔法のこと？」

クレナダ村でふたりを吹き飛ばした、とてつもない威力を持つ魔法。あのときは運よく助かったが、ウンディーネの加護を受けるクリスが治癒の魔法を強化できなければ、怪我を治すことさえできなかったかもしれない。
ヴァンはうなずいた。
「そうそう。まあ結局、被害を防ぐ方法なんて、風の魔法が得意なやつをしらみつぶしにしていくしかないんだけどさ」
「風の魔法が得意な人はどこにでもいるわ・・・気の遠くなる話よね。魔力消費が激しい上に制御も難しい光や闇の魔法が得意な人なら、まだ見つけやすいけれど」
「やるだけやるよ」

そう言ってヴァンは伝票を手に、店主のほうへ歩き出した。
クリスもとっくに食べ終わっていたので、立ち上がってついて行く。
毎回どちらかが料金を支払うことが恒例になっていた。

会計を終えて先に店を出ていたヴァンは、路地の奥を指さしながら言った。
「じゃ、俺はこっちに用があるから」
「そう、気を付けて。また夜にギルドで待っているわ」
「ああ、またね」

ヴァンの姿が見えなくなるまで見送ったクリスも、身をひるがえして帰途についた。

彼は巨躯を丸めて眠りの境をさまよっていた。
魔女の夢だ。
魔女は彼を生み出したとき、彼の同胞のように能力を付与しながら

言った。
「この大地は私のかわいい子たちの国。そしてこの場所はあの子たちの大切な家。だから契約ではなく、お願いをするわ。親愛を持ってあの子たちを守ってあげて」
彼は魔女の言葉にうなずいた。
このときはまだ生まれたばかりで、言葉を理解することはできても話すことはできない状態だった。
「そう、いい子ねぇ。ありがとう。あなたの名前はファフニールにしようと思っていたけど、優しい子みたいだから何者にも負けないように英雄の名前をあげる。ジークフリートと名乗りなさい」
彼は歓喜した。
創造主であり、生みの親であり、主である魔女に名をもらったことが嬉しかった。
たとえ千歳にこの大地に縛られることになっても。
たとえ幾千、幾万の災厄に見舞われても。
それらすべてを乗り越えて、彼女の子どもたちを守ろうと決めた。
彼はまどろみの中で再度心に誓った。
「ジーク・・・また眠っているのか？」
黒髪に緑の瞳の壮年の男が、ジークフリートのいる部屋に入ってきた。
塔の最上部にある、この切り取られた空間までずいぶんと階段を昇らなければならない。
男は少し苦しそうに息を切らしていた。
ジークフリートは目を開けることなくぼんやりと声を聞いていた。

無理をしてまで会いに来なくていい。
魔女の珠玉の子。
その子孫の男。
「また来るぞ、ジーク」

それなのに黒髪の男はそう言って去って行った。
きっと約束どおりまた訪ねてくるのだろう。
あの男は幼いころから約束をたがえたことはなかった。
ジークフリートはどの魔女の子らも慈しんだ。
男の誠実さに親愛を捧げ、快いと思った。

だからこそ来てはいけない。
千の禍因、万の災厄から必ず守ってみせよう。
それが魔女とジークフリートの願い。

彼はまたまどろみに沈んでいった。
腕に災いの種を封じて。

モナドの竜　？（前書き）

ちょいグロ注意

モナドの竜　？

その日もヴァンは方々を訪ねて、フードの男の情報を追い求めていた。
だが収穫もないまま夕日が落ちようとしていたとき、何人かの騎士が走って通りの向こうへ消えていくのを見つける。
夕餉の買い物に出ていた人々が何事かと騒いでいた。
ヴァンは騎士たちが走り去った路地に向かって地を蹴る。
「厳重警戒中の皇都で誰がバカやったんだか」

ぼやきながら駆けだした。
国境が封鎖されているモナド皇国は、現在フードの男の確保と治安維持のために騎士団による見回りが強化されている。
また犯罪をおかした人間には現行法よりも厳しい罰が与えられることになったので、スリや万引きなどの軽犯罪のみならず、殺人や強盗などの凶悪犯罪もほぼ完全に鳴りを潜めていた。
そんな中で騒ぎを起こすような人間はまともではない。

実際、ヴァンは騎士たちに続いて現場にたどり着いたとき、あまりの凄惨な光景に狂人の仕業かと思った。
濃い血臭が鼻につく。
切断された腕。
細切れにされた腸。
切り裂かれて脳髄をぶちまけた頭蓋。
ひとりひとりが区別できないほど、ただの人体の一部分しか見て取れない。
あとは肉塊と化していた。
若い騎士がひとり膝をついて崩れ落ちた。

「うっ・・・うぇ・・・っ。げほっ」
胃の内臓物を吐き出しながら嗚咽している。
慣れてないとこうなるよね、とヴァンは冷静に心の中でつぶやいた。
近くにいたほかの騎士がヴァンに気づいてすばやく寄ってきた。
「お前は何者だ？ここは危険だから下がれ！」
騎士はヴァンがそれ以上現場に踏み込まないように、大きな鎧姿で立ちふさがった。
しかしヴァンは威圧感を感じていない口調で飄々と口を開く。
「俺はヴァン。Aランク冒険者やってるよ。照会は冒険者ギルドでよろしく」
「Aランク！？」
ヴァンの自己紹介に目前の騎士以外にも何人かが驚愕の叫びをあげる。
「うん、そう。で、俺が誰からどんな依頼を受けてるか知ってるよね？国の指揮下にいるやつが知らないとは言わせない」
「・・・ふん。陛下のご意向だ。フードの男だったか？やつがこれに関わってるか調べに来たのか」
「わかったなら、どいてくれないかな。心配しなくてもここを荒らしたりしないよ。近くにまだあいつがいるかもしれないから、通してほしいだけ」
先ほどまで嘔吐していた若い騎士が「ひっ」と息を飲んだ。
この凶行を起こした犯人が近くにいるかもしれないと怯えたのかもしれない。
そばにいた同僚の騎士から喝を入れられていた。
「たわけ！軟弱者が！立って被害を確認しろ」

「はっ、はい！」

ヴァンの前に立っている騎士も含めて、現場にいた者たちがあわただしく動き出す。

それを横目に見ながら、目の前がひらけたヴァンは血の海へ歩を進めた。

靴に血が跳ねて臓腑がこびりつくが、構わず奥へと向かう。

流血の痕跡をたどり、奥へ。それがなくなっても血のついた靴跡が残っていたので追跡は簡単だった。

しかし、やがて血の跡は途切れた。

「ん？急に消えてる・・・。転移の魔法かな」

力ある魔法使いなら、修練を積めば転移の魔法を展開させられる。

ただしその飛距離は各々の魔力に依存していた。

短ければ目と鼻の先。

長くても街の一区画分ほどだ。

「まだ血は赤いし、それほど時間はたってない。なら皇都にまだいるね」

ヴァンはフードの男の力量は、一区画分の転移を可能にするだろうと考えている。

もしこの犯行があの男の所業なら、ここに残っていても仕方ない。

逆に血の跡がある場所ではなく、道をはさんだ向こう側の区画をくまなく捜索したほうがいいだろう。

そう判断して、すぐさま行動に移した。

それから1か月。

迅速に行動したはずの騎士団もヴァンも犯人を捕まえられずにいた。
手がかりや目撃情報があるにも関わらず。

あれだけ派手に殺害すれば、目撃者は大勢いた。
その場にいなくても、返り血をあびた人間を見たという証人もいる。
それらから金髪の年のころは２０代の青年が犯人だろうと目星をつけているが、皇都中をくまなく探しても発見できなかった。

騎士団は煮え湯を飲まされた犯人をやっきになって捜査しているようだが、ヴァンはそのことでかえって金髪の青年がフードの男ではないかと思っていた。
人を簡単に殺し、その場から転移できるだけの力を持つ魔法使い。
そしてクモの巣のように細かく皇都に張り巡らされた騎士団の包囲網から、精霊のように人外の方法で身を隠すことが可能な存在と考えれば同一人物と推測できた。
「っていうか同じような力を持ってて、似たような犯行をするやつが複数人いるとか考えたくないし」

軽い口調でそう言って、ヴァンはギルド本部の扉を開けた。
中でクリスたち職員がせっせと冒険者の応対をして働いている。
ヴァンに気づいたクリスが軽く手挙げてあいさつした。
こちらも手を挙げ返す。

歩みを止めずにフードの男専用になっている情報掲示板に赴く。
一番新しい情報は3日前で止まっていた。
もとから期待してなかったが、この情報のなさは唸るしかない。
「どうするかな」

事前に、ここまで長期間拘束されるようなやっかいな依頼だと予想できていれば、今ごろ国外にとっとと避難していたかもしれない。

今回の依頼金は国家負担なので破格値だが、それでも各国を回って何件か依頼をこなした方が稼げただろう。
モナドに特別思い入れがあるわけじゃない。

ああ、でも・・・。
そうしたらクリスと会えなかったのかな、と思うと少し残念な気がした。

クリスはヴァンに手であいさつをしたあと、また作業に没頭した。
先ほどまで並んでいた冒険者たちの依頼の契約用紙を整理する。
そろそろ月が真上に来る時刻だ。
もう今夜の訪問者はヴァンで最後だろう。

ひと段落ついて、ふと顔を上げるとヴァンがこちらに歩いてくるところだった。
「こんばんは、ヴァン」
「やあ、クリス。で、あの掲示板の情報って3日前までしかないの？」

開口一番痛いところを訊いてくるヴァンに、クリスは苦笑いした。
「そうよ。3日前のその情報だってあいまいだわ。見たかもしれない、すれ違ったような気がする・・・そんなのばかり」

クリスはヴァンから裏路地での出来事を聞いている。
猟奇的な殺人事件。
それがクレナダ村で遭遇したフードの男が犯人かもしれないと聞いたときは、またあのときのように大勢の死者が出たのかと気が滅入った。

クレナダの村人をすべて殺して死霊にするだけでなく、皇都でまで殺人を犯す意図がつかめない不気味さもある。
そのとき背後から上司がクリスに声をかけた。
「クリスちゃん、これ会計にまわしといて」

クリスは書類の束を受け取って立ち上がった。
「はい、行ってきます。ヴァン、それじゃまた」
「うん。またね、クリス」

そうしてお互い歩き出した直後。
クリスは一瞬、目まいを起こしたと思った。
書類を抱え直し、頭を振ろうとしたとき遠くから地響きが聞こえてくる。
大地が揺れた。
「うわっ、なんだ地震か？」
「棚が倒れる！」
「おい、大丈夫か？」

職員たちがざわめきながら、床に手をついている。
とても立っていられない。
クリスも座り込みながら、きょろきょろとあたりを見渡した。
ヴァンだけは受付台に手をついてかろうじて立っているようだ。

ウ゛ォオオオオオオオオオオオオオン！！！！！

音の衝撃波だった。
建物全体がびりびりと震え、耐えかねて壁がぱらぱらと欠片をこぼす。
地揺れはまだ断続的に続いていた。
「な、なに今の・・・」

クリスがすくみ上っていると、視界の端でヴァンは剣を杖代わりにして外に出ようとしている。
「様子を見てくるよ。動かないで待ってて」

「危ない」と言って止めようとしたクリスの声は、再び襲ってきた音波によってヴァンには届かなかった。
そのまま彼は扉をくぐって通りに出ていってしまう。
クリスは右太ももの青い紋をなぞって、己の契約精霊を呼んだ。
「どうしたの～、クリスちゃ～ん・・・って、あら～？みんな床に倒れちゃってるわ～」
「地震みたいなのが襲ってきているの。ウンディーネ、ヴァンと合流して様子を見てきてくれない？私じゃ立って歩くこともできないもの」

三度、音の衝撃がやってきた。
クリスは耳をふさいでうずくまる。
耳の奥まで響いて頭が痛くなってきた。
「でも～、ちょっと待って～。これは～・・・なにかの声ね～」
「こ、声？これが？」

ウンディーネの言葉にクリスは驚いた。
こんな音としか認識できないものが声だなんて信じられない。
「そうみたい～。このまま続いたら～、この建物も危ないわ～。クリスちゃんも～、外に出たほうがいいと思うの～」

その台詞と内容に、ギルド職員のざわめきがぴたりと止まった。
無言で床に這いながらも、重要な書類と物品を持てるだけかき集めていく。
「よし。出るぞ、クリスちゃん」

「あなたも貴重品くらいは持っていきなさい」
「え・・・、え・・・？」
戸惑った声をクリスが出すと、壮年の上司がギルドの印と通帳簿を探しながら言った。
「こういう危険と隣り合わせの生活してるやつらと商売してるとな。逃げるときは逃げるのが賢いって、ここに刻まれるんだよ」
自身の頭を指さしながらそう言う上司に、まわりの職員たちも深くうなずいている。
クリスはまだギルドでアルバイトを始めて1年と少しだ。
こんな対応が脳裏に刻まれるほど経験を積んでいない。
だから先達の言葉には従うべきだろうと、クリスもうなずいた。
這いずりながら入口へ向かう集団は滑稽だったが、皆真面目な顔だった。
クリスも身代わりの彫像と財布だけ持って、落ちてくる壁へ天井の欠片に注意しながら移動する。
そばでウンディーネが空中をただよいながら、ときどき気遣わしげにクリスを振り返った。
それに大丈夫だと答えながら、何度目も声らしき音の衝撃を耐えて。
ようやくクリスは外に転がり出た。
月明かりに照らされる大通り。
扉を開けた瞬間から、人々の悲鳴が鮮明に聞こえてくる。
クリスは不意に月がかげったのに気づいて顔を上げた。
目に映るのは、月光を遮るほどの巨躯の持ち主。

「竜・・・」

呆然とクリスはつぶやいた。

おとぎ話や伝説に出てくる翼持つ空の王が、そこにいた

モナドの竜　？（後書き）

このくらいのグロならセーフ・・・ですよねσ（・ε・、●）

アウトだとキーワードに注意事項とか入れなきゃヽ（´Д`；≡；´Д`）ノ

モナドの竜　？

ジークフリートは己の意識が瘴気に食われていくのを感じていた。
いかな能力を持っていても、この世界の摂理には逆らえなかったようだ。

太陽があれば月が存在するように。朝が来れば、夜が巡るように。
陽のあたる場所には陰ができる摂理。
生きとし生ける陽の存在は陰と一対ゆえに、その存在を上回る質量の陰の影響を受けたとき浸食される。

ジークフリートは己の生命力をかけて城に瘴気が流れ込まぬよう抑え込んでいたが、それももはや限界だった。
遠くないうちに理性を失って魔物化する。
そして魔女と己の大切な国と家と、子どもたちを傷つけてしまうだろう。

――――そうなる前に皇国中に眠る同胞よ。いまだ活発に活動する同胞よ。我は奇跡を望む。

ジークフリートは生み出されたときから見えぬ目を開いた。
漆黒の鱗に覆われた巨躯よりも、なお深い暗闇の瞳。
光を映さない目を虚空に向けて、彼は己の能力を解放した。

その力を受け取ったのは、彼の同胞だけではなかった。
彼を生み出した魔女もまた、その力の開放を感じて顔を上げた。
またたき１つ。

その間に皇都で起こっている事態を正確に把握する。
「あらぁ・・・これは・・・。やってくれるじゃない。皇都がめちゃくちゃよぉ」
「・・・へぇ。誰がやったのか知らないけど、まさか殺さないよね、エル。私の奥さん」
「当然でしょう、キール。私の旦那さま」
「そうだね。殺すなんて生ぬるい。死んだ方がマシってくらいの地獄でのたうちまわって、血反吐吐いて、泣いて懇願してもまだ足りない」

金髪の少年にしか見えない者の口から、物騒極まりない言葉が出る。しかしエルと呼ばれた黒髪の女も否定しなかった。
「ヤンデレ全開フルスロットルねぇ。普段なら止めるけど、今回は全面同意。久しぶりに怒ったわ。私が直々にお灸をすえてあげる」

彼らの背後に控えていた眼鏡をかけた男が一礼して気を引いた。
「留守はお任せください」
「よろしく、ギルベール。私はおばかさんにお仕置きしてくるわぁ」
「じゃあ私は子供たちの安全を確かめるよ。ついでにしばらく向こうで暮らせるように手配しよう」

キールという少年は無表情のまま、淡々と話を進める。
ギルベールと呼ばれた青年はうなずいた。
「では手配がすみましたらお呼びください。こちらの荷物をまとめて持参し、私もそちらへ合流いたします」
「じゃあ、そういうことで行きましょうか」

最後に女が男たちをうながす。
そうして3人は住み慣れた森を出て、皇都へ向かった。

クリスは目の前の光景が信じられなかった。
巨大な黒の竜が夜空に向かって吠えている。その巨大な身体が一歩足を出すだけで、その下にあった建物が瓦礫となった。
長い尾が振るわれるたびに、逃げ遅れた人々が紙切れのように弾き飛ばされる。
悲鳴と絶叫。
そして竜の咆哮が空気を震わせた。

クリスの肌が泡立って体ががたがたと震えだす。
頭の中は真っ白だった。
「クリス、ウンディーネ！」

ヴァンが通りの少し先で、こちらに気づいて声を上げた。
クリスは返事をしたかったが、歯の根ががちがちと鳴るだけで言葉にならない。
揺れ続ける地面の上を、ヴァンは剣を支えにして歩いてやってきた。
「ギルドから出てきたのは正解かもね・・・。この状況じゃ、いつあの化け物に踏みつぶされるかわかったもんじゃない」

声が出ないクリスはこくこくと首を振ってうなずくだけだ。
同じように脱出してきたギルドの職員たちも言葉が出ないのか、呆然と竜を見上げている。

突然クリスは光に目を焼かれた。
熱さは感じない。
そしてまた唐突に光は収まり、夜の闇が戻ってきた。
ウンディーネがクリスに寄り添うように空中から地面に降り立つ。
「クリスちゃ～ん。結界を張ってみんなを囲んだほうがいいわ～」

「な・・・な、に？」

クリスは光の衝撃で前身の震えは鎮まったが、まだうまく回らない舌で尋ねた。

「大気中の～魔力がすご～く高まってるの～。なにか始まるわ～」

水の精霊の言葉にヴァンは顔をしかめた。

これ以上何が起こるというのか。

クリスにはもうわからないことばかりだ。ただ、ウンディーネの警告には従ったほうがいいと手のひらを前に出して結界を展開する。

「大地の・・・加護よ・・・“フィールドバリア”」

先ほどより流暢に言葉が出たことにほっとしながら、目の前の魔法の維持に集中した。

ウンディーネの補助と魔力制御を受けて、周囲一帯を魔力を帯びた半円状の半透明なドームが覆う。

ヴァンが剣の柄に手を当てて、いつでも抜けるようにしたまま腰を落とした。

ある人工妖精は小箱の中で悠久をまどろんでいた。

ある人工妖精は指輪に宿って、代々の持ち主を守っていた。

ある人工妖精は古びた柱で時の流れを見守っていた。

ある人工妖精は大樹と一体化して、人の営みを見ていた。

皇国中に存在する全ての人工妖精が、長であるジークフリートの願いに応えて顕現した。

クリスは空中に現れた様々な姿を持つ存在に圧倒される。
いくつもの尾を持つ動物たちや、人に翼が生えたようなものまでいる。
ヴァンも呆けたように空を見上げたまま動かなかったが、その中の一点を見た瞬間「あっ！？」と驚きの声を上げた。
「あれって魔術学校の謎生物じゃないか？」
「ええっ？」

クリスは彼の言葉に驚いて、半信半疑のまま視線を辿った。
・・・いた。
すらいむじゅうさんごうだ。
特徴的な丸いフォルムと、脱力感を誘う顔は間違いない。
「なんで空に浮かんで・・・まさか。この訳のわからない生き物たちは全部あれの仲間？」
「・・・かもしれないね」

クリスとヴァンが推測をたてていると、ウンディーネが流水の髪をかきあげてふわりと浮きあがった。
目線は空中の人工妖精と思われるものに固定されている。
「たぶんそうね～。気配が同じだもの～」

そのとき、すらいむじゅうさんごう含む人工妖精たちはいっせいに竜に向かっていった。

九本の尾を持つ狐のような人工妖精が放った炎は、黒竜の鱗の表面を焦がす。
翼を持つカラスの頭を持った人型の人工妖精は、突風を起こして黒

竜の歩みを止めたが尻尾で撃ち落とされた。
大きな猫のような人工妖精が雲を操り、酸性の雨を降らせて竜のやけどをひろげる。

クリスは他に地面に座り込んでいる人々のように、ただ見上げ続けるしかない。
人工妖精たちが竜を止めようとしているのは見て取れたが、それに介入できると思うほど自惚れてはいなかった。
次々と果敢に立ち向かっていく人工妖精の力も、それと一進一退の攻防を繰り広げる竜も、人知の及ばない規格外である。

クリスは1か月以上前に、魔術学校の地下ですらいむじゅうさんごうに聞いた話を思い出していた。

５００年前に未熟な国のため、魔女エレオノーラが編み出した守護の法。
人工妖精を生み出して、役割と力を与え、土地と契約するモナド皇国の基盤。
クリスにはあの竜がどんな存在で、なぜ皇都を破壊しようとしているのかわからないが、今たしかに彼ら人工妖精は皇都を守るために戦っていた。

不意に後方でバシャンと水をぶちまけたような音が聞こえた。
びくりを身を震わせながら視線を向けると、地面の上にすらいむじゅうさんごうが伸びている。
「い、いたいよぅ。いたいよぅ。なにか、なにかに。ぶつかったよぅ、ぶつかったよぅ」

どうやら遥か空中から落下してきたときにクリスの張った結界に阻まれて、後方へ流れ落ちたらしい。
ヴァンがすらいむじゅうさんごうに話しかけた。
「おい、どうなってるんだよ。これ」
「あ。みず、みず？ヴぁん？ヴぁん！クリス！クリス！」

見知った人間を発見して嬉しいのか、そのまま球体に勢いよく戻ってバウンドしながらやって来る。
そして結果にぶつかって、ばしゃりと再度地面に落ちた。
「・・・・・・」
「いたい、いたいよぅ」

クリスは無言で結界を緩めて、すらいむじゅうさんごうを中へ招き入れる。
いくら外見が生理的に受け付けなかろうと。
いくら脱力ものの言動をされようと。
この球体が皇都を守るために戦っていたのを見ていたから、無下にするのはためらわれた。

すらいむじゅうさんごうの姿を見たギルドの職員たちがどよめいている。
「なんだあれ・・・」
「生き物・・・か？」
「顔がおかしい」
「待て。着眼点はそこじゃない」

相当動揺しているようだ。
すらいむじゅうさんごうを知っているクリスは説明して彼らの動揺を鎮めたかったが、皇帝陛下の沈黙の命があるために口をつぐむしかない。

この皇都が壊滅しつつある状態で、沈黙がどれほど価値を持つかはわからなかったが。

ヴァンは竜が歩みを止めたことで、ようやくまともに立てるようになった地面を踏みしめて球体に近寄った。
水の精霊もすらいむじゅうさんごうを覗き込むように、空中を泳ぐ。
「ねがいを、ねがいを。かなえなきゃ、かなえなきゃ」
「願い？」

クリスが結界を維持しながら、ささやくように尋ねる。
「ねがい、ねがい。じーくふりーとの、じーくふりーとの」
「・・・じーくふりーと？知ってる竜なの？・・・まさかあの竜はふぇんねると同じ状態？」

柳眉を寄せながらヴァンが詰問する。
丸い人工妖精は「うん、うん」と何度も肯定した。
「じーくふりーと、じーくふりーと。とっても、とっても。つよい、つよい。かてない、かてない。でも、でも。じーくふりーとの、じーくふりーとの。ねがいは、ねがいは、きせきを、きせきを。おこすから、おこすから」
「聞き取りずらいね、あいかわらず」

ヴァンが冷静につっこんだ。
クリスは球体の言葉を脳内で反芻して意味を探る。
ひとつひとつ確かめる口調で、すらいむじゅうさんごうに訊いていった。
「あの竜はじーくふりーと、と言うのね？とても強い人工妖精が瘴気で魔物化したと思っていいのかしら？あと、あなたが魔法を使えるように、あの竜は奇跡を起こせる・・・とか」
「うん、うん。きせき、きせきで。かって、かって。とめなきゃ、

とめなきゃ」
「・・・奇跡を起こせる能力そのものが信じられないけれど、それに頼らないといけないくらい強いのね？」
「・・・うん、うん」

すらいむじゅうさんごうの筆で描いたような眉が、へにょりと情けなく下がった。
ヴァンはしばらく何事か考え込んでいたが、やがて顔を上げて口を開く。
「止める方法・・・。これ、依頼料あげてもらってもいいよね」
「ヴァン？倒す気！？」

軽い口調で言う彼に、クリスは驚愕して叫んだ。
ヴァンは彼女に首を振って、「違うよ」と苦笑する。
「あんなところに行くだけで命がけなんだから、倒すなんて無茶すぎるよ。・・・あの竜は城の方角から来た。城の連中が不意をつかれたのか、力が足りなかったのかはわからないけど、すくなくとも加勢はないと見てる」
「城から・・・そんな・・・」

クリスは皇帝陛下や宰相たちの顔を思い浮かべて、最悪の状態を想像する。
あの竜に踏みつぶされていたとしたら、無事に済むとは思えない。
しかし、ひとまず自分たちの身の振り方を考えなければ。
そう気持ちを切り替えてヴァンを見上げる。
「それじゃあ、どうする気なの」
「倒せなくても止められればいいんだよ。あの竜が狂って魔物化した原因が例の石のせいなら、その石を破壊できれば弱体化できるかもしれない。可能性の話だから、浄化が効かないように破壊もできないことも考えられるし。そもそも石の影響じゃなければ無駄足。

それに本当に弱体化するかどうかも賭けだね」

竜を倒すのも無謀だが、ヴァンの賭けも充分無謀だった。

モナドの竜　？

「どうして・・・」

クリスは声がかすれた。
どうしてそんなに平気そうな顔をして、死地に赴こうとしているの。
「無理よ・・・死んでしまうわ・・・」

自分の顔が泣きそうにゆがんでいる自覚がある。
涙は見せまいと我慢しているせいで、頭痛がしてきた。
それなのにヴァンは不思議そうにこちらを見ているだけだ。
「どうしてって？俺はAランク冒険者だからだよ」
「そんなの理由になってないわ・・・あなたはこの国の民じゃないのよ。逃げてもいいの。ねえ・・・ねえ！依頼が命より大事なの！？」
「それしか俺は生き方を知らないからね」

あっさりと命より依頼を取ると言うヴァンに目まいがした。
「そんな、そんなのって・・・変よ。おかしいわよ」

クリスは「行かないで」と引き留めようと口を開きかけた。
しかしクリスの訴えは言葉になる前に、周囲の歓声に打ち消された。
「お願いします！助けて！」
「行ってくれるのか？さすがだ！」
「おおおお、ありがとうございますありがとうございます」

ギルド職員も、街の人々も、皆がヴァンをすがるような顔をして見ている。
その台詞の中にはひとつも彼を案じるものがなかった。

――――おかしい。おかしい。こんなの変だ。
クリスは地面にうずくまったまま耳をふさいだ。
これ以上、人々の言葉を聞いていたくなかったのだ。

――――だって、ヴァンは怪我をする普通の人間なのよ？魔法は苦手で剣の補助があっても初級しか使えないのよ？
――――それに人とのかかわりが面倒な人なの。でも他人の頼みとか依頼とか断れない優しい人なの。
――――それから、お茶は必ず発酵茶を砂糖なしで飲むのよ。いろんなお店を知っているの。そんな普通の優しい人なのよ。
――――なのに、なのに！Ａランク冒険者なんて呼称でくくって決めつけないで！！！！！

そんな人をあの竜のもとへ単身送り出すなんてどうかしている！
これではまるで・・・「生贄」じゃない！！
本人もそれを受け入れて、抵抗ないなんて絶対まともじゃない！！！

ヴァンはクリスが考えに翻弄されている間に、竜のいる方角へ向かって歩き出そうとしていた。
剣の調子を確かめ、靴ひもを結び直している。
その様子を見ながら、クリスは座り込んでいた地面からふらりと立ち上がった。
「ヴァン・・・」
「クリス？ここでウンディーネといるんだよ」
「ヴァン・・・」
「あと結界はそのままで。一応この球体生物も連れていくから、守りが薄くなる」
「ヴァン・・・」

「本当に気をつけてね。ま、さくっと終わらせてくるからさ」
「ヴァン！」

クリスの呼びかけを無視して、こちらの身の安全ばかり気遣うヴァンを怒鳴りつけた。
「馬鹿じゃないの！？馬鹿じゃないの！？ほんと馬鹿！」
「ク、クリス・・・？」
「馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿！！！信じられない馬鹿！！！」

ヴァンはクリスの剣幕に押されて閉口した。
その隙にクリスは畳み掛ける。
「そりゃあこの危機的状況で、ここにいる謎の球体たちに任せていても改善が難しいのはわかるわ。それにはこの街で一番強い人間が動くことが効率いいことも理解できるわ。ひとりで行動するのが、足手まといや余計な負傷者を出さないためだってことも頭ではわかるのよ。・・・でもね」

クリスは一泊おいて、思い切り息を吸って大音声で宣言した。
「私も行くわ！！！！どうせ馬鹿を止められないなら、友達として一緒に馬鹿やってあげるわよ！連れて行ってなんて言わない。ついて行くわ」

ヴァンはぽかんと口を開けたまま固まった。
ウンディーネが気遣わしげにクリスの頬を撫でる。
「クリスちゃ～ん。私ができることは限られているのよ～？」
「わかっているわ。水系統の魔法の制御と増幅だけだって言いたいのでしょう？とっくに覚悟の上よ」
「クリスちゃ～ん・・・」

ウンディーネが無表情ながらも、口調は泣きそうにぶれている。

ヴァンが慌ててクリスの前で手を振ってきた。
「ちょっと正気なの？大丈夫？」
「失礼ね。私は正気よ」
「じゃ、なんで？俺はひとりで大丈夫だから」
「勝手について行くと言っているでしょう」
「なんで・・・なんでさ。クリスは学生で、貴族で、女の子だよね。依頼受けてるわけでもないのに、なんでなの」

クリスはどうして伝わらないのかと苛立ちを隠せずに、地面をかかとで踏みつけた。
石畳にあたって硬質な音が響く。
「心配してるって、なぜわからないのよ！この底なしの馬鹿！！」
「し、しんぱい・・・？」
「何その意外そうな声。そうよ、心配しているの。長くはないけど、決して短い付き合いじゃないでしょう、私たち。私はあなたのこと・・・その。一方的だけど友達だと思っているし、助けたいとも思うわ」
「とも・・・だち・・・」
「そうよ。ついて行くわ。止めてもなにしてもついて行くわ。守ってくれなくても結構！むしろ魔法は私のほうが得意よ」
「・・・・・・」

ヴァンはついに沈黙した。

その頃。
元は城のあった場所の端、塔があった付近でかがみこんで何かを探している男がいた。
しばらくあちこち見て回り、ようやく瓦礫の下から目当てのものを

見つけたのか嬉しそうにしている。
「ほらやっぱり、これもここにあったヨ。回収できてよかッタ！同じ場所にふたつあると持っていくのに便利だカラ、待っていた甲斐があったヨ」

男はくすんだ長い金髪を無造作に編みこんでいる。
もしここに裏路地で殺人事件を起こした現場を見た人間がいれば、彼が犯人だと叫んだだろう。

青年が持っている石は１つが紫色をしていた。
これは倒壊した城の一室から発見したもの。
もうひとつは紫に黒が混じった石。人を殺して負の感情を瘴気に転換して石に移しこんだ、紫の石より瘴気が濃いもの。

あの裏路地で連続殺害事件を起こした日。
彼は石を持って黒竜ジークフリートのもとへ訪れた。
といっても非合法な行動方法だったので、石を置くとさっさと退散したのだ。
理性のある時のジークフリートは、皇都の中心に置かれるだけあって強力な力を持った優秀な守護獣だった。
「まあ、ああやって魔物になっちゃったラ、優秀とか関係ないヨネ」

青年は楽しげにそう言いながら、風の後押しを受けて高速で皇都から脱出し、離れて行っていた。
国境が封鎖されていても、潜り込める場所はいくらでもあった。
ほとぼりが冷めるまで、どこかの森の奥にでもいようか。
そんなことを考えながら平原を疾駆していると、急に青年ののど元に剣が突き付けられた。
「はい、そこまでよぉ」

口調は軽いのに、底冷えするほど強い殺気をまとった女が剣をつきつけてきたのだ。
一瞬前まで気配も姿もなかった。
男がやむなく足を止めると、瞬く間に彼の周囲に剣や槍、矛や槌などの武器が無数に現れる。
それらすべての武器がすぐにでも彼を串刺しにできるように、至近距離で空中に浮かんで待機していた。
その間、女は一言も発していない。
無詠唱で見たこともない魔法のような技術を披露したのだ。
青年は怪訝そうな表情の中に、警戒をにじませた。
「キミ、ナニ？」
「何者じゃなくて、何？ふふっ・・・私を人間と認めないその言葉。久しぶりに聞いたわぁ。何百年ぶりかしら」

黒髪黒目の女はへらりと相好を崩しながら笑った。
しかし目は冷え冷えとしたまま、殺気が痛いほどだ。
「こたえてヨ」

男は足が勝手に後ろに下がろうとすることに驚いた。
これが「恐怖」だというのだろうか。
女はあくまで顔だけはにこやかにほほ笑んでいる。
「そうねぇ、答える義理はないけど。あえて教えてあげるわ。よく聞きなさい、坊や」

女が一歩足を踏み出した。
青年は威圧感を感じてのけぞる。
「あなたが壊したこの都の守護者の母。あなたが傷つけ、泣かせた皇族の祖。青の森の魔女エレオノーラ。それが私」
青年は「蒼の森の魔女」がなんなのか知らなかった。

生じてから人との関わりなんて、数えるほどしかないせいだろう。
一般常識なのカナ、と思いながら青年は首をかしげて見せた。
内心は初めて感じる「恐怖」に逃げてしまいたい気持ちでいっぱいだ。
「なんなノ？仕返しに来たノ？」
「仕返しなんて生ぬるいわぁ。うちの子を泣かせたなんて万死に値すると思うのよ。殺して解して並べて揃えて晒して・・・と言いたいところだけど、この時代の後始末はこの時代の者がするべきねぇ。だから8分の7殺しに抑えてあげるわ。感謝しなさい」

業火が男の体を包み込んだ。
声を上げる間もなく、次いで空気圧に押しつぶされて地面にめり込む。
内臓が傷ついたのか喀血した。
「かは・・・っ」
「まだよ、まだ終わらせてあげない」

今度は急激に上空へ引き上げられる。
そして無数の剣や槍や矛で貫かれ、さらに全身を氷づけにされた。
そのまま落下して氷が砕け散る衝撃で、体に武器をハリネズミのように突き刺したまま転がり出る。
「い・・・っ！ひぃ・・・っ！？」
「うるさいわよぉ。真空になれば声も出ないでしょ」

その言葉通り、男の周囲を丸い結界が覆ったあと空気が一瞬でなくなった。
声が出ない。
息が出来ない。
目が飛び出すほどの激痛と、酸欠による意識の白濁。

完全に気絶する前に、魔女と名乗った女は青年を結界から出した。
「死なせないって言ってるでしょ？人間よりずいぶん丈夫みたいだから、まだまだ平気よねぇ？」

炎が。
風が。
雷が。
氷が。
大地が。
水が。
すべての事象が青年に牙を剥く。

青年が反撃しようとしても、魔法が発動しない。
「無駄よ無駄無駄。魔法が発動するにはね。どうしても時間がかかるの。呪文となえたり、魔法の効果を想像したり、体の硬直時間があるの」

その言葉の間も責苦はやまない。
「硬直時間を狙って、魔力を逆流させてあげれば・・・ふふっ。魔法はキャンセルされちゃうのよぉ？なかったことにされるの。無駄っていうのはそういうこと」

上空へ打ち上げられた男の体が力なく地面に打ち付けられた。
体には無数の穴と、全身のやけど、裂傷、擦過傷。
内臓も損傷し、骨もほとんど砕けている。
おびただしい血が流れているが、その端から傷口は癒えていっていた。
青年はこれでようやく回復できると、息をついた。

女はその様子を見て、にんまりと笑う。

「ふぅん？再生能力もなかなかのものだけど、治るときって神経がつながるのよね。痛覚とかせっかく切断されてたのにねぇ」
「え・・・あ・・・？ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！」
「ああ、はいはい。うるさいうるさい」

ごきゅり、と鈍い音を立てて青年の咽喉が不可視の力で押しつぶされた。
「がっ！？ひっ」
「まだ足りない気がするけどぉ・・・。そろそろ向こうも決着つきそうだしね。この辺で勘弁しておいてあげるわぁ」

そう言って女はついてもいない埃をぱたぱたと払った。
すでに青年の目は精神が追い詰められているのか、濁ってうつろだ。
「あ、そうだ。お土産上げるわ。“喰らえ彼の腸（はらわた）”」

抵抗できない青年の下から、どす黒い触手のようなものが無数に伸びてくる。
そして青年の腹をえぐるように掻いた。
「・・・・・・っ！！！」

声なき声で男は痛みを訴えた。
実際には見た目は何も変わっていないが、たった今。彼の内臓の大部分が抜き取られたのである。
言葉通り、触手に喰われたのだろう。
青年は地面からぴくりとも動かなくなった。
「これで回復にはだいぶ時間かかるでしょ。ご愁傷さま。・・・なんて嘘よ。ほんとは全然そんなこと思ってないけどねぇ。ちゃんと苦しんでね」

笑い声を残して、女はその場から消えた。

モナドの竜　？（後書き）

これはひどいオーバーキルwww

モナドの竜　？

その場にいたギルド職員や、崩れそうな家屋から避難してきた顔見知りの住民たちに引き留められながらも、クリスは毅然と宣言した。
「私はこれが正しいなんて思っていないわ。貴族以前に、ひとりの無力な人間として避難して安全な場所でいるのが賢いって知っているわ。でも馬鹿だとわかっていても、やりたいことができたの」

クレナダ村の一件から数か月。
クリスはもう無関心を装って逃げる自分の性格を許すつもりはない。彼女が引かないと知ると、住民たちは渋々言葉を引っ込めた。
もとよりクリスに時間を割いている暇はない状況である。いつ竜の歩みが再開するかわからないのだから。

最後まで反対したのはヴァンだった。
最初こそクリスの剣幕に押されていたが、すぐに復活して、
「逃げなよ！」
「いやよ！」

と、ふたりで喧々諤々とした応酬をする。
それ地面から見上げていた球体の人工妖精が、おろおろとクリスとヴァンを見比べた。
「けんか、けんかは。だめだよぅ、だめだよぅ」
「あんたは黙っててよ！」
「謎生物はお黙りなさい！」

頭に血がのぼっているふたり同時に言い返されて、すらいむじゅうさんごうは「ぴっ」と妙な鳴き声を上げて震えあがった。
ウンディーネが思案気に小首をかしげながら、クリスのもとに空中

を漂ってくる。
「クリスちゃ～ん。いいこと思いついたかもしれないわ～」
「ウンディーネも黙って・・・え？」
クリスはとっさに怒鳴り返そうとしたが、水の精霊の言葉に思いとどまった。言いあっていたヴァンもウンディーネの次の言葉を待っている。
「いいこと？」
「うん、そう～。クリスちゃんと私の契約って～、水系統の魔法の制御と増幅でしょ～？」
「そうね。それでもあの竜を倒せるとは思えないけれど」
あくまで基盤となるのはクリスの魔法だ。
クリスが不可能なことを可能にはできないし、人間の限界を超えた威力の増幅もできない。
ウンディーネもそれにうなずいてみせた。
そして足元のすらいむじゅうさんごうに視線を移す。
「でも～クリスちゃんが倒せなくても～、同じ人工妖精ならできるかもしれないのよね～？」
すらむじゅうさんごうが飛び上がって驚いた。
「ぼ、ぼく？ぼく？」
「え、こいつが？無理でしょ」
即ヴァンが否定する。
たしかに上空を見上げれば、今も奮闘する人工妖精たちの姿が見える。
倒すには至っていないが、足止めには成功しているようだ。
しかし地面に目を戻すと、情けなく震える球体の生物。
「こいつは上から落ちてきたんだよ？戦ったけど負けたってことで

しょ」
「それはそうだけど～。クリスちゃんの魔法で～、増幅をかけてあげたらいいんじゃないかしら～」
クリスはウンディーネの話に考え込んだ。
他人の魔法や攻撃力、防御力などを増幅させることは、治癒を得意とする水系統の魔法の応用でできないこともない。
そこで問題になるのは、やはりこの球体生物の地力だろう。
地力が低ければ、威力を増幅させてもたいしたことはできない。
あら？でも待って。そういえば地下回廊への行き方って・・・。
クリスはふと思い出したことを確認するために、すらいむじゅうさんごうと同じ目線になるようにしゃがみこんだ。
「ねえ。あなた“転移”ができるわよね？」
「うん、うん。できる、できるよ」
“転移”はそうとう力のある魔法使いでなければ使いこなせないものだ。
己の身の内に取り込まなければ発動しないという条件があっても使用できるというのは、それだけすらいむじゅうさんごうの地力が高いことの証明になるかもしれない。
「いけるかもしれないわ」
クリスの言葉にヴァンは疑わしげに、すらいむじゅうさんごうを見やった。
「どうもこいつ見てるとさ。強そうに見えないんだけど」
「それは否定しないわ。でも少なくとも私よりも魔法使いとして優秀よ・・・ものすごく癪だけど。ええ。認めるのはものすごく抵抗があるけど」

「ひ、ひどいよぅ・・・ひどいよぅ・・・」
球体の人工妖精の涙まじりの抗議は黙殺された。
ヴァンは肩をすくめながら、クリスに尋ねる。
「それで、どんな作戦思いついたのさ」
「あそこまで大きくて強いもの相手に小細工なんてできないし、想像もつかないわ。だからシンプルにいこうと思うの」
クリスは地面に小石で簡単にこの周辺の地図を描いた。
「ここが今いる場所。ギルド本部前ね。それからここが竜のいる場所。街の区分で言うと、４区画ほど離れているわ」
それから簡略化した竜の背後に丸印を描きこむ。
「まずこいつに私たちは飲みこまれて・・・ああ、嫌だけど。飲みこまれてから、増幅した“転移”で４区画分を飛び越すの。できなければ何度か繰り返して飛び越せばいいわ。とにかく早くたどり着ければいいのだから。それでこの丸印の場所に着いたら、私たちを出して、今度は竜を飲みこんで増幅した浄化の魔法か攻撃の魔法を叩き込めばいいんじゃないかしら」
「俺は魔法に詳しくないから、それが成功するかわからない。でもあの竜を飲みこめるの？あれより小さいふぇんりるを飲みこむこともできなかったのに？」
「それは・・・」
クリスが説明に詰まったとき、第三者の声が割り込んできた。
「それはアタシがなんとかする」
結界の外側にいつのまにか一匹のウサギが鎮座している。
すらいむじゅうさんごうが嬉しそうに跳ねた。
「めえちゃん、めえちゃん！」

「ええい、５００年たってもまともに話せない役立たずのナマモノめ！アタシはメルルゥだ！めえちゃん呼ぶな！」

ウサギは小さな体躯を怒らせる。

クリスは滑らかに人語を操るウサギを見て、この動物も人工妖精なのかしらと考えた。

「あなたも人工妖精・・・よね？どうにかするって、具体的にはどうするの」

メルルゥと己のことを称した人工妖精は、はっとして我に返った。

「ごめんごめん。怒ってる場合じゃなかった。そうよ、アタシは人工妖精メルルゥ。初めまして、竜に挑む勇気ある人の子ら」

メルルゥはウサギの体で器用に一礼する。

そしてぴくぴくと長い耳を動かした。

「アタシは耳がいいのさ。地上での会話は聞いてたよ。これ以上皇都が破壊される前に、行きながら話そうじゃない」

クリスたちはすらいむじゅうさんごうの体内にいた。

長い間この体内にいるのは初めてだが、意外と息苦しくなかった。

丸い結界内にいるときのように、足場も安定している。

難点はすらいむじゅうさんごうという、生理的に受け付けない生物に飲みこまれている状況そのものくらいだ。

その中で、すでに作戦会議は終わっている。

ヴァンはあっさり肯定したが、クリスはまだ迷っていた。

「本当にいいの？こんなことしたら、あなたたち・・・」

「迷うのは余裕のあるときにしな。選択の余地なんてもう残されち

ゃいないんだ」

メルルゥはクリスの迷いをばっさりと切り捨てて、表情の読めないウサギの顔を上げる。

クリスはメルルゥの揺るぎない視線を受けて、どきりとした。

「ジークフリート・・・あの竜だって仕方ないって言うだろうよ。アタシら人工妖精はこのモナドが好きなんだ。そんで魔女が好きだ。ここに住んでるヤツらも大好きだ」

「メルルゥ・・・」

「アタシらは守る者だ。守られる者じゃない」

話している間にも球体の人工妖精の皮膚越しに、景色が次々と変わっていく。

そしてついに、すらいむじゅうさんごうが竜の背後に“転移”した。

ヴァンは剣を抜き放って、外に出た瞬間飛び出せるように身を低くしている。

「クリス。やるだけやってから後悔してくれない？そこのウサギもどきが言うように、これ以上時間かけたら死人が増えるだけだよ」

「わかってる・・・。わかってるわよ・・・」

ウンディーネが苦しそうに眉根を寄せるクリスに気遣わしげに寄り添った。

無言で彼女の頭をなでる。

クリスはウンディーネになでられながら、ようやくうなずいた。

まだ眉間にしわが寄っているが、手に必要な魔力を集め出している。

「やるわ」

「よし。じゃ俺たちを出してよ、すらいむじゅうさんごう」

満足げに笑ったヴァンが球体の人工妖精に合図を出した。

「うん、うん。きをつけて、きをつけてね」
「それはこっちのセリフだよ」

クリスはふたりのやり取りを見ながら、増幅の魔法陣を展開させる。
勝負はあっという間だった。

すらいむじゅうさんごうから出ると同時に、ヴァンが地を蹴って竜に肉薄する。
尾の部分に思い切り幅広の剣が振り降ろされた。

ウ゛ォオオオオオン！！！

竜の咆哮が空気を震わせ、クリスたちの鼓膜を破らんばかりに響き渡る。
尾には傷一つついていないが、剣の衝撃によって竜はこちらの存在を認識した。
ぐるりと巨大な顎を持つ頭が振り返り、地上の小さな人間たちを見下ろす。
今まで戦っていた人工妖精たちに背を向けて。

メルルゥが叫んだ。
「そら、今だ！入道雲みたいにでかくなりな！」

その声を受けて、すらいむじゅうさんごうの体が急速に巨大化する。
竜に匹敵するほどの巨躯を手に入れた彼は、大口を開けたまま直進した。
途中でメルルゥを飲みこみ、さらに空に浮かぶ大勢の同族を一口で丸飲みする。
クリスは展開させたまま維持していた増幅の魔法陣を発動させた。
すらいむじゅうさんごうも同時に無詠唱で増幅の魔法を使う。

すらいむじゅうさんごうの体内で二重の増幅を受けた数多の人工妖精たちは、各々の能力の最大値を引き上げた。
闇が。
冷気が。
光が。
風が。
さまざまな能力をが1か所で爆発的に高まり、連鎖し、融解した。
そして人工妖精たちは溶けあい、混じり合い、ひとつの純粋な力の化身となる。
人間に気を取られて背を向けた竜に向かって、その力を解放した。
背後から痛烈な一撃を浴びた竜は、ゆっくりと地面に倒れていく。

メルルゥの作戦はクリスの作戦の穴を埋めて強化するものだった。
すらいむじゅうさんごうだけでは、どれだけ頑張っても抵抗する竜を飲みこむことはできない。ふぇんりるを浄化できなかったことで、それは容易に想像がついた。
しかしそこにメルルゥの“形や大きさを自在に変えることができる程度の能力”と、存在する全ての人工妖精の力があわされば話は別だ。
あとはクリスと、すらいむじゅうさんごうがさらに増幅してやればいい。
それは人工妖精自身の限界を超える能力を引き出した上に、それを連鎖融合して一撃必殺の力を生み出す。
その間の時間稼ぎはAランク冒険者のヴァンが請け負った。

危険な竜の足止め役だというのに、彼はただうなずいて引き受けた。
自分以上に危険な行為をする存在がいたからだろうか。

作戦を説明し終わったメルルゥが最後につけたしたのだ。
「その代償に、アタシらはきっと消滅するだろうけどな」

ウサギの表情はわからなかったけれど、陽気にからからと笑う気配がした。
その彼女はもういない。
「ぼく、ぼく。がんばるからね、がんばるから！」

そう言って線のような眉をあげて、すらいむじゅうさんごうは気合の入った口調で言った。
その彼ももういない。

彼らはただの力の塊――――クリスには閃光にしか見えなかった――――となって、竜の背で弾け飛んだ。

竜が地面に倒れ込む間際、ヴァンがクリスの腰を抱いて横に飛んだ。
その顔面すれすれを竜の巨体が過ぎ去る。
黒竜ジークフリートは轟音とともに地に伏した。
「お、おわ・・・ったの？」
目の前で倒れている竜の頭を見ながら、クリスがつぶやいた。
竜は目を閉じて微動だにしていないが、ヴァンはまだクリスを抱き寄せたまま剣を構えている。
そのときウンディーネがクリスとヴァンに覆いかぶさった。
水に包まれたような感覚のあと、そのままふたりして水圧で地面に押し倒される。
――――――――――――！！！！！
直後、声なき咆哮が竜の口から放たれた。
地面に伏せたクリスたちの頭上を高密度の闇色の塊が通りすぎていく。
闇は瓦礫を一瞬で砂礫に変え、建物から逃げ出そうとしていた人間を喰らった。
クリスがまばたきひとつする間に、闇の塊が通りすぎた場所が更地に変わる。
「くそっ！」
ヴァンがクリスを肩に担ぎあげた。
「え・・・」

「舌かまないでよ！」

そのまま一直線に市街地を走り抜けて、皇都の外へ続く通りを疾走する。
人ひとり担いでいるとは思えない速さで走る彼の背中に、クリスはしがみついた。
竜はその場に倒れたまま動かないが、口腔がゆっくりと闇色に染まっていくのが見える。
ヴァンはちらりと背後を見て、それを確認すると横道にそれて走り続けた。

数秒後、再び高密度の闇色をした破壊の力が放たれる。
先ほどまで走っていた通りが無に帰るのを見て、クリスはようやく思考が戻ってきた。

人工妖精たちの捨て身の攻撃は無駄だった？
否。
竜は倒れて、その場から移動していない。
ただ無力化には至っていない。
なぜ？
人工妖精たちすべての力を増幅させてなお、竜には及ばなかったから？
それじゃあ・・・それじゃあ・・・彼らの死は無駄だったの？

クリスの目から涙がこぼれ落ちた。
疾走するヴァンに並んで、空中を駆けるウンディーネがクリスに話しかける。
「クリスちゃ～ん、今は逃げることだけ考えて～」
「そうだよ。ほかの人間も助けていられない」

水の精霊の言葉に続いて、ヴァンが冷静に言った。
この街にはまだたくさんの人が残っている。郊外にいた家族も、中心部にいたギルドの職員も、魔術学校の学生も、馴染みの店の人たちも全員が逃げられたとは思えない。
ただでさえ真夜中の襲撃だったのだ。
すばやく皇都から避難できた者がどれだけいるだろう。

でもそのすべてを救うことなど不可能だと、クリスは知っていた。
竜の討伐失敗。
皇都を守護していた人工妖精の全滅。
それらを間近で見て関わって、今も己の無力さを噛みしめているのだから。

モナド皇都の陥落。
その情報は伝書鳥を通して世界中を駆け巡った。
国境封鎖の結界の影響で、貿易の停止と経済活動が停滞していた皇国にとって都の陥落は大打撃である。それは大陸の半分を治める大国であっても、野心ある諸外国から狙われかねない事態であった。

皇帝は筆をおいて、目の前の書類を見ながらため息をついた。
とたんにヒビの入った胸骨を中心に全身を痛みが走る。
「ぬ・・・。まだ治らぬとは」
「致し方ありますまい。生命があっただけでも儲けものです」

皇帝陛下のぼやきに、頭に包帯を巻いた財務大臣が答えた。
その隣には松葉杖をついて足に包帯を巻いた宰相がいる。
彼らは城の塔にいた人工妖精、黒竜ジークフリートが魔物化して暴走したときにそろって負傷していた。轟音をたてて崩れ落ちる城の

瓦礫の下敷きになった皇帝は、一時期生死の境をさ迷っていたほどである。

その半死半生の皇帝を、己自身も決して軽くない怪我を負いながら救出したのが宰相たちだった。彼らのほかにも幾人か国家の中枢を担う人物が逃げのびている。

「いま皇都はどうなっておるのか。ジークもいまだ暴走しておるという報告もあるようだ。・・・被害者の確認はすすんでいるのか？」

皇帝は書類に掲載されている数字に目を落とした。

そこには拠点を皇都から2キロメートルほど北上した場所にある、ジュール城塞都市に移したあとに残った騎士たちを派遣して調べた被害者数が記されている。

皇都には一時居住者を含めておよそ2万人の人間が生活していたが、そのうちの3分の1は物言わぬ屍となって発見された。

中心部にはいまだ黒竜が生存しているようで、近づくと唸り声が聞こえるという。

そのせいで周辺部の捜索しか出来ておらず、被害者はさらに膨れ上がると予想していた。

「あれから1週間。自力で逃げられるものは、ほぼ皇都から脱出したものと思われます。数は３０００人程度と見られておりますが、まずは彼ら避難民の安全と生活を確保するのが先かと」

宰相も複製した同じ書類を見ながら言う。

現在、一時的に皇都の主な機能を移したジュール城塞都市は元グランティオス帝国の首都だった。

当時も強固な要塞だったが、５００年前にクレセント王国に敗北した後はさらに防砦の改良がなされて、モナド皇国最大にして最後の防衛線と呼ばれている。

都市全体を囲む壁はすべて錬金術師たちによって強化された石が使用されており、簡単には崩されない。また、常駐する兵の質が高いことでも知られていた。
そのため脱出した民のほとんどが安全性をかんがみて、このジュール城塞都市に避難してきている。
「生きておる者を優先せねばならんか・・・ふむ。議事堂などの公共施設を解放してはおるが、全避難民を収容することはできまい。空き地に仮の住居を造らせよう。その際の人手は避難民から募り、賃金を渡せば多少は生活もできような」

皇帝は顎に手を当てながら言った。
その際にまた骨がきしんだのか痛みに顔をゆがめている。
労しそうに見ながら、財務大臣が別の書類を手に進言した。
「避難民の衣食住をまかなうなら、ジュールの金庫が空になる前に財源の確保が必須です。皇都へ派遣した騎士たちへの手当ても考えねばなりません。また、働き口を巡ってもともとジュールに住んでいた者たちとの軋轢も生じましょう。その対策をこうじた後なら、陛下が養生する時間が取れるかもしれませんな」

どれも一朝一夕に片づけられる問題ではない。
もうしばらく彼らの不眠不休の活動は続きそうだった。

クリスはジュール城塞都市にある男爵家の別宅にいた。
テラスに出て日の光を浴びていると、あの夜の出来事が幻のように思えてくる。

あのあと、クリスはヴァンに抱えられて皇都を脱出した。
他にも脱出してくる人々がちらほら見えたので、彼らについてジュ

ールまで来たのである。
幸い家族にはすぐに出会えた。
逃げるなら砦のあるジュールだと彼らも北へ向かったらしい。たいした怪我もなく、娘との再会を喜んでいた。
そしてクリスを助けてここまでやってきたヴァンに滞在をすすめたが、彼はそれを断ってひとりで皇都へ引き返していった。
魔術学校でふぇんりるが魔物化したように、人工妖精が瘴気に侵された今回の事件。
ヴァンはふたつの類似性から、瘴気をまく石とフードの男が関係していることを推測していた。そしてフードの追跡の依頼を遂行するために戻ったのである。

竜には近づかないと言っていたが、危険性は高い。
自分が持っていた身代わりの彫像を押し付けるようにして渡したが、お守り程度にしか役に立たないかもしれない。
やはりクリスには、生命より依頼を重要視する彼の価値観がわからなかった。
しかし理解できなくても、力になりたいという気持ちは変わらない。
そのとき扉を軽く叩く音がして、使用人の女が静かに部屋へ入ってきた。
庭に続くガラス製の扉を開けて、奥のテラスにいるクリスのもとまでやって来る。
「お嬢様、砦から手紙が届いております。封蝋の印は皇家のものとお見受けいたしましたので、中は開いてみておりません」
「ありがとう。お父様たちにはあとで私から説明しておきます。下がってください」
「かしこまりました」
女が部屋から出ていくのを見届けてから、クリスは手紙の蝋をひっかいて砕いた。

ぼろぼろになった蝋をはがして手紙の中を見る。
内容は皇帝陛下への謁見願い受理されたという文面だった。
「よかった。・・・私は私にできることをするわ、ヴァン」

クリスはそっとつぶやいた。
１週間前、このジュール城塞都市に皇帝陛下や宰相閣下たちも避難してきていると男爵の父経由で知ったとき、すぐに謁見を申請したのである。
落ちぶれた男爵家の娘から皇帝への謁見願い。
通常なら通らないが、クリスは魔術学校での一件から申請が通る可能性は高いとにらんでいた。

陛下たちは皇都が廃都と化す未曾有の事件が起こってなお、私が沈黙の命令を守っているか確認したいとお考えになるはず。
多くの案件を抱えていらっしゃる今、直接会って真偽を確かめられるなら人手を割かずに済むのだし。きっとお会いくださる。

その予想は外れず、クリスの手元には皇家の手紙があった。

一方、ヴァンは廃墟となった皇都の一角でもとは城だった場所を歩いていた。
見渡す限り瓦礫と、腐敗してきた死体しかない。
「ここにもない・・・か。やっぱりもう回収されたかな」

瓦礫の塊をひとつ蹴って、その下に埋もれていた部屋を見る。
そこにも目当てのものはなかった。
ヴァンは今、城に預けた瘴気をまく石を探している。魔術学校の地下回廊で拾ったものだ。

石を研究して、その解明をすると宰相はたしかに言っていた。
ならば、研究者のいる城か直轄の施設にあるはずなのだ。
だが1週間たっても成果はあがらなかった。

考えられる予想は1つ。
クレナダ村のときのようにフードの男が回収に来て、すでにここに石はないということ。
「こうならないように、わりと早めに戻ったつもりなんだけどね。竜が魔物化してすぐに回収したってことかな。だったら竜が最初に現れたこのあたりに、何か足取り掴めるものがあるといいけど」

ぼやきながらも瓦礫のすきまや、崩れた建物の奥を覗き込んでいった。
しかし灯りひとつ調達するのが困難な場所では、日が沈む前に捜索を切り上げるしかない。
ヴァンは夕日に照らされて茶から金に近くなった己の髪をかきながら、空を見上げた。
「今日も収穫なしっと。・・・そろそろ一度ジュールに戻るかな。生きてる人間もいなさそうだし」

――――それは反射だった。
とっさに崩れかけた建物の影に隠れて、地面にしゃがみこむ。
その視線の先にくすんだ金髪で、ぼさぼさ頭の男が立っていた。
反応が少しでも遅れていたら、彼に気づかれていたかもしれない。

敵か。
味方か。

ヴァンは目まぐるしく思考しながら、過去の情報を思い出していた。
くすんだ金髪の青年と路地裏の大量殺人事件。

見つからない犯人。
殺害方法は風の魔法が有力。

金髪の男はふらふらと体を左右に揺らしながら、目の前の瓦礫の隙間に手を差し込んだ。
ずるりと灰褐色の物体を引きずり出す。
そのまま躊躇いなく口に含んで咀嚼し出した。

ヴァンは嫌悪感に顔をゆがめた。
人間は死後、血や不要物を流しながら硬直していく。それ終わると腐敗が始まり、肉体は健康的な肌色から毒々しい赤へ。やがて腐敗が表面化すると白っぽくなり、腐り落ちる頃には灰色や黒色が混じるようになる。
この廃墟となった都のそこかしこで見られるものだ。
金髪の男が口に入れているものは、その死体の腐肉に見えた。

咀嚼し終えた男は、ふらりと揺れながら歩き出す。
「ア・・・ハハッ。足りナイ・・・足りなイィィ」

男の独白が風に乗って聞こえてきた。その独特の口調と発音に聞き覚えがある。

もうこれ犯人確定でいいよね。
フードの男の正体があいつで決まりだよね。
他に変態の快楽殺人者がいるなら、この国終わりでしょ。

ヴァンは男の行動を目で追いながら、内心で毒づいた。
そして不意を突いて、魔法を使われる前に捕縛しようと気配を殺して近づいていく。
男は気づいていない。

距離にして数十歩。
金髪の男がふらりふらりと瓦礫の向こうに姿を消した瞬間、ヴァンは駆けだした。
瓦礫を一息に飛び越えて、男の真上から鞘に入ったままの剣を振り降ろす。
金髪の男が驚いたような表情で見上げたが・・・遅い。

ヴァンの体重を乗せた一撃が男の眉間に入った。
「ぐぅっ」
「もう一丁！ほらよ！」

急所に重い打撃を受けた男がよろめいたところを、続けざまに攻撃する。
着地の低い姿勢から足払いをかけ、衝撃に崩れ落ちる男の腹に肘を打ち込んだ。

男は背後の瓦礫に勢いよく激突する。
そのまま四肢を投げ出して動かなくなった。
「よっし。魔法がなかったら、こいつもこんなもんか」

ヴァンは念のために抜刀して男に近づく。気を失っていればよし。
そうでなければもっと痛い目にあってもらって、強制的に眠ってもらおうと。

あと数歩分というところまで距離を詰めたとき、突然金髪の男が哄笑をあげた。
「ヒッ。アハハハハハ！！に、人間なんカニ、ま、負けるナンテ！！」

この数歩分の距離はすでにヴァンの攻撃範囲内だ。
男がおかしな行動をとれば、すぐに切りつけるつもりで剣を構えて
ヴァンはその場に立ち止まる。
男はヴァンをにごった目で見上げた。

モナドの竜　？

地にころがったまま、名前を持たない男は低い声でぽつりと言った。
「許せないヨネ？」

せっかく蓄えた力は魔女によって吹き飛ばされ、散らされた。
肉体を損傷した。
回復のために瘴気の濃い死体を食べていたら邪魔された。
人間なんかに負けた。
ああ、忌々しい。

ぼそぼそと小さな声で語る金髪の男からヴァンは距離を取った。
剣の攻撃範囲から外れてしまうが、それよりも男の得体の知れなさへの警戒が勝った。
「あんた・・・何者？やっぱ人間じゃないわけ？」

男の伸び放題の前髪の間から、ぎょろりと目玉が動いてヴァンを視界に捉える。
「前に言わナカッタ？ボクは名無しダッテ。名無しは人間じゃないヨ」

あっさり己は人間ではないと断言する男は、唇を吊り上げた奇妙な笑みを浮かべた。
「名無しハ、魔王になるんダヨ」
「・・・は？」

魔王。
単純に考えるなら魔の王。魔物の王あたりが妥当だろうか。
ヴァンは突拍子もない単語に眉を寄せた。

「何言ってんの、あんた」
ヴァンの問いに答えずに金髪の男は笑い声をあげる。
笑っているのに怒りのこもった声音は、ざわりと背筋に悪寒を走らせた。
「アッハハハハハ！だからネ、ボクは負けちゃダメなんダ！許せないンダ！・・・死んでヨ」

金髪の男が地面にあおむけの状態から、うつぶせに転がる。
そのままこちらへ這ってきた。
「死んでヨ死んでヨ死んでヨ死んでヨ」
「・・・っ」

壊れたオルゴールのように繰り返し同じ言葉を発しながら、男は這いずってくる。
ヴァンは地面の瓦礫を男に向かって蹴りつけた。
石の塊が男の額にぶつかって血を流す。
「痛いナァ。ひどいナァ。もっと力が欲しいナァ。死んでほしいナァ」

ゆがんだ笑みを浮かべた男はたいして痛みを感じていないようだった。
「ああもう、気持ち悪いな！あんたが死んでよ！」

抜き身の剣を振り上げてヴァンは男に一歩近づく。
これ以上男の戯言を聞いているのは気分が悪かった。
ヴァンの殺気を間近で浴びた金髪の男は、笑みをさらに深める。
「やっと近づいてくれタ」

男の体からぶわりと黒い靄のようなものが放たれた。

飛びのく間もなく、ヴァンはそれに飲みこまれる。一瞬にして視界が暗闇に染まった。
体の中から力が抜けていく。
ヴァンは己の失態を悟った。あの奇妙な行動は自分を己の攻撃範囲内に誘い込むための罠だったのだ。
しびれを切らしたヴァンはそれに乗ってしまった。
「美味しいヨォオオ」

黒い靄の向こうから金髪の男の歓喜の声がする。
「おいしいって・・・食べられてるのは俺？」

ヴァンは力の入らない膝を地面について苦笑いを浮かべた。
剣を支えにしているが、いつまで保つかわからない。
「返してもらって正解かな、クリス」

気の強い少女を脳裏に浮かべながら懐を探って、彼女に押しつけられた身代わりの彫像を握り締めた。

黒髪黒目の女が廃墟にたたずんでいた。足元には茶髪の青年が苦しげにうずくまっている。
青年の生命の炎は消えかけていた。
手に持っている像のようなもののおかげで、死ぬのが遅くなっているだけだ。
このまま放置すれば一刻もしないうちに、廃墟に死体が1体増えるだろう。
「なにこれデジャヴ？また拾い物フラグなのねぇ」
エレオノーラは５００年前に夫と出会った時のことを思い出した。

あのときもボロボロの人間を捨て置けずに拾ったのだ。
ため息をつきながら手を一振りすると、青年の呼吸が正常に戻った。
顔色はまだ悪いままだが、きちんとした場所で療養すれば徐々に改善されるだろう。
「“エリクシール”を使うまでもなかったわね。この子ったら生命力強すぎでしょ。いや悪運かしら？」

ダメージを引き受ける像を持っていなければ。
これを成した犯人が青年の死亡を確認せずに去らなければ。
エレオノーラが通りかからなければ。
青年は間違いなく死んでいた。

宵闇が迫る中、黒竜のいる方角を見ながらエレオノーラは眉を下げる。
「ごめんねぇ、ジークフリート。もう少し待っててちょうだい。ちゃんと製作者として死なせてあげるから」

黒髪の魔女は当初の目的だった竜討伐を先延ばしにして、茶髪の青年を救出することに決めた。

翌朝、クリスはジュール城塞都市の一角に来ていた。
街を囲む壁の一部が砦となっており、そこが現在のモナド皇国の中枢になっている。
以前城に参内したときよりは劣るドレスを身にまとって、馬車から降りる。
あのときのドレスは廃墟となった我が家に埋もれているだろう。
それにもし手元にあったとしても、皇都が陥落して沈んだ空気の中で華美なものを着る気はなかった。

飾り気のない落ち着いた藍色のドレスをひるがえして、クリスは砦の中へ入っていく。
途中で衛兵に止められたが、例の手紙を提示するとあっさり奥へ通された。

そして砦の最奥にある、小さいながら質のいい調度品の飾られた部屋に通されて待つことしばし。
クリスは皇帝陛下と宰相、財務大臣と顔を合わせていた。
「目通りをお許しいただき、恐悦にございます」

ぴんと背筋をのばしてから、優雅に見えるようにゆっくりと一礼する。
皇帝はソファにゆったりと腰かけながら微笑んだ。
以前面会したときよりも精彩を欠く表情が、その包帯の下の怪我と心労を思わせる。
「構わぬ、余に話があると聞いている。まずは楽に座るといい」
「ありがとうございます、陛下」

机を挟んでクリスと皇帝は向かい合った。
宰相と財務大臣は壁際の二人掛けのソファに座る。

砦としての機能を優先した結果なのか、この建物全体が窓のない小部屋の連なりでできていた。そこで男3人と額をつきあわせて相談事となると、なかなかの威圧感がある。
クリスは心の中で喝を入れて持ち直した。
「恐れながら、私ひとりの手では成せぬ事柄ゆえに、陛下の力をお借りしたく参上いたしました」
「申してみよ。話は聞こう」
「はい、陛下。単刀直入に申しますと、私を例のフードの男の追跡

に加えていただけないでしょうか」

宰相が大仰なため息をついて、肩をすくめた。

「何をおっしゃるかと思えば。貴方はご自分の立場を自覚されておりますか？堕ちたるとはいえ、貴族につらなる子女。そしてモナド国立魔術学校の特待生になるほどの才媛。さらに上位のヒト型精霊との契約者ですから、卒業後の道は城仕えが決まっているも同然なのですよ」

財務大臣もクリスをなだめるように、子どもに向ける甘い声音で話しかけてくる。

「貴方のギルド本部での活躍は聞き及んでおるぞ。クレナダ村での浄化作業だけでなく、誠実に真面目に業務をこなすと評判らしいではないか。ギルド長が一度本気で就職先をギルドに、と打診してきたほどだ」

引き留める言葉は違えど、ふたりともクリスの身を案じてのことだと感じられた。

だからクリスは柔らかく微笑んで礼を返す。

「もったいないお言葉です、宰相閣下、財務大臣様。ですが、私クリス＝ルクスはもう決めたのです。ここで承諾していただければ、その足で冒険者ギルドのジュール支部にて冒険者登録を行います。ちなみに、そのままフードの男と決着がつくまで男爵家に戻らぬ表明と迷惑をかけぬ意思表示のため、すでにこちらへ来る前に役所で籍を抜く手続きをしてまいりました」

皇帝陛下は興味深そうにクリスの湖面色の瞳を覗き込んだ。

クリスも皇帝の緑の瞳を見つめ返す。

「余と男爵はそう話したことはないが、家族を大切にしている男だったように記憶しておる。親御には許してもらえたのか？」

クリスはその言葉に視線が遠くになるのを止められなかった。
もちろん砦に向かう前に両親を説得するために場を設けたが、結果は芳しくない。
クリスが冒険者になって犯罪者を追うと宣言すると、母親は卒倒した。
父親は顔を青ざめさせながら「まだ子どもなのに」「そもそも学生だろう」「女の子なのに」と、引き留めるための言葉を延々口にし出した。
親心のわからないクリスではない。
多大な心配をかけていると理解しながらも、このままた見て見ぬふりの生活に戻り、人と距離を置いて暮らしていくことは耐えられなかった。
一昼夜かけて話し合い、熾烈に討論を交わしながら、なんとかクリスは両親から条件付きで冒険者となる許しを得たのだ。

条件は３つ。
１つ、生きて帰ること。
２つ、ときどき手紙で安否を知らせること。
３つ、納得する旅ができて終われば、必ず帰って学生として復帰すること。

条件はどれもがクリスの身を案じたからこそのものだった。
頭が自然と下がる。
とてもひどい親不孝をしている。
けれど人と距離を置いて生きてきたクリスの人生で、初めてできた心からの友人の危機に何もせずにはいられない。
ヴァンと一方的であっても約束したのだ。
「友達として一緒に馬鹿やってあげる！」と。

その意気込みも、すべてはこの場での皇帝陛下の返事にかかっている。
モナド国家とギルドからの依頼で、ヴァンはフードの男を追っているのだ。追加で冒険者を雇うなら、依頼主に伺いを立てるのは当然のことだった。
ギルドのほうは皇帝陛下が許可したと言えば、国の機関のひとつとしてクリスを依頼に組み込むしかなくなるだろう。
「陛下、父と母は最終的には折れてくださいました。親不孝とわかっていても、貫きたいことがあるのです」
「ふむ・・・クリスよ。思いを貫くには様々な覚悟が必要であろうな。・・・死ぬ覚悟はあるか？殺す覚悟はあるか？手が血まみれになっても生きる覚悟はあるか？」
「正直に申し上げますと、覚悟しているつもりである、と答えるしかございません」

皇帝は難しい表情をしながらも、目線で続きを促した。
クリスはひとつうなずいて話を続ける。
「死ぬ覚悟も殺す覚悟も、その場に立ったことのない者が誓ったところで所詮机上の空論。口先だけに終わるでしょう。その先にある血まみれの生もまた同じ。ですから覚悟しているつもりである、というあいまいなものでしかお答えしかねるのです。・・・ですが、私はひとつだけ覚悟している、と答えることができるものがございます」

小部屋にいる皇帝陛下、宰相、財務大臣をひとりひとりクリスは見わたした。
モナド皇国の頭脳。
小娘の下手な小細工は無用である。ただ自分の素直な言葉を、クリスは口に出した。
「私は決して諦めない覚悟だけなら、この胸にしっかり刻みこんで

おります」

クリスは祈るように手を組んで、じっと返事を待つ。
皇帝たちは小声でしばらく話し合っていたが、やがてクリスの前に座りなおして言った。
「苦しい旅路になるであろうな」
「予想のうちでございます」

皇帝の気遣わしげな言葉にクリスは毅然と胸を張った。
「悲しい思いをすることもあるでしょうね」
「それでも立ち上がり、前へ進むことが諦めない覚悟でございます」

宰相の事実を淡々と述べる冷静さに、クリスもまた静かに応じる。
「世の中は善だけではない。絶望することもあるかもしれん」
「私はかごの鳥のように育っておりません。善人も悪人もいるのが人であると認識しております」

財務大臣の現実的な言葉には、冷ややかな笑みさえ浮かべた。
そのやり取りを見ていた皇帝は目を細めてクリスを見ると、「うむ」とうなずいた。
「心意気はわかった。ならば小さな冒険者よ。依頼人からの最初の頼みを聞いてくれるか？」
「はい、陛下。なんなりと」

クリスはモナドの頭脳から「諾」の返事を引きだせたことに、ほっとしながら首肯する。
皇帝は流れるように言葉をつづけた。
「同じ依頼を請け負っているヴァンと合流し、この言葉を伝えよ。・・・沈黙の命を変更する。１つ、人工妖精に関することは、彼らが魔女によって生み出されたことのみ黙するように。彼らが皇都の上

空で多く顕現したことで人目に晒されすぎた。すでに噂にもなっておるようだ。よって、その出自のみ秘せよ。2つ、瘴気をまく石が浄化されぬまま行方不明の可能性が高いこと。皇都へ派遣した騎士たちにも内密に探らせているが、まだ石は見つかっておらぬのでな。すでに犯人に持ち去られておるやもしれぬ。皇都に戻ったというヴァンが見つけていなければ、その可能性はさらに高まろう」

皇帝の言葉にクリスは神妙にしながら、忘れたり違えないように記憶に刻みつける。

「3つ、犯人が人間ではない可能性についてだが。魔術学校と同等かそれ以上の警備網を潜り抜けて事を成し、逃走できるものとなると・・・。ますます人間ではない可能性が高くなったと考えてよい。慎重に沈黙を守るように。4つ、これは魔術学校どころか皇都が廃墟となった今では無効と考えてよい」

「では3つの沈黙と、その変更を伝えればよろしいのですね？」

「そうだな」

「うけたまわりました、陛下。では、本日は時間をお取りしていただいてありがたくも、ご迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げます」

クリスは立ち上がって最上級の礼をした。

スカートの裾をつまんで広げ、片足を一歩引いて軽く膝を曲げて頭を下げる。

ただお辞儀をするだけの礼ではなく、平身低頭して平伏する意味がある礼だ。

この方々がクリスを認め、許してくれたこと。

そして期待を込めて依頼を任せてもらえたこと。

それらに感謝するため、皇帝たちが退室するまでクリスは頭を下げ続けた。

モナドの竜　？

クリスがジュール城塞都市にある冒険者ギルドの支部を訪ねると、マリーの熱烈な抱擁で歓迎された。
「クリスちゃん、クリスちゃん！無事だったんだねえ・・・よかったよ、本当に」
「はい、マリーさんたちも無事でよかったです」

ギルド支部の建物内を見回すと、ちらほらと見知った顔が見えた。あのとき本部から逃げ出した人たちである。
「あのあとクリスちゃんたちと会えないまま、皇都から出なくちゃいけなくてねえ。危ないからってわかっちゃいたけど、気になって仕方なかったよ」
「ご心配をおかけしました。ヴァンがいなければ死んでいたでしょう。・・・その、それで彼はまだこちらには戻っていないのでしょうか？」

ようやく抱擁から解放されたクリスが周囲のギルド職員を見ながら尋ねると、だれもが首を横に振った。
マリーが頬を押さえてため息をつきながら言う。
「一度こっちのギルド支部に来たのは見たよ。そんときに皇都に偵察に行くって言ってたねえ。戻ってないってことは、まだ皇都にいるのかもしれないよ」
「そう・・・ですか」

クリスは思案するために目線を下げた。
今彼らを見たら思わず怒鳴ってしまいそうだ。
今の会話の中にひとつもヴァンを案じるものがない。ひとつも引き

留めようとも、警告をうながそうともしていない。
やはり彼らはヴァンのことをAランク冒険者で、絶対強者だと思い込んでいるのだろう。
竜があらわれた夜に感じた失望をぶつけてしまいそうだった。

彼自身も己を軽視する傾向があった。
クリスはヴァンに比べれば確かに弱い。経験も足りない。陛下たちの前で覚悟の話をしたけれど、きっと絶対に諦めないなんて言いきれるほど強くない。
でも、もしこんな私が彼の足枷になれるなら、きっと少しはヴァンも自分自身を大切にしてくれるようになるんじゃないかしら。

私は狭い世界しか見ずに、人から遠ざかっていた殻にこもっていた。
それを壊してくれた彼への恩返しになるなら・・・。

クリスはそっとカバンから書類を数枚取り出した。申し訳ないと思いながら、名残惜しそうなマリーと別れて、さっさとギルド支部の奥へ入っていく。
そして書類をギルド受付【初心者用】と書かれたプレートの卓へ提出した。
それを受け取った男は見覚えのない顔をしている。
おそらくもとからジュールのギルド支部に勤めていた人だろう。
ずれ気味の眼鏡をあげながら、おっとりした口調でクリスの書類を確認している。
「冒険者登録をご希望の方でしょうか？」
「ええ、そうです」
「・・・はい、はい。不備はありませんね。冒険者について説明がありますので、こちらへどうぞ」
受付の男が隣のブースに案内しようとするのを、クリスは手を挙げ

て止めた。
「いいえ、結構です。本部で働いていたことがありますので、冒険者規約のことは頭に入っております」
「え？あ、そ、そうなんですね」

ギルドは１０歳から登録可能だが、クリスのように若い・・・それも女が登録することは非常に珍しかった。
魔物の討伐を含めて肉体労働が多い職業なのだ。
女性の体力ではそうそうに根をあげる。
そう考えていた時、受付の男の後ろからギルド本部にいたとき世話になった初老の上司がやってきた。
「おお、無事でしたか！・・・ん、おや？あなたは冒険者になるおつもりですか？」
「お久しぶりです。はい、いろいろ思うところがありまして。家族だけでなく皇家にも許可をいただいております。あとはこの書類一式が通れば、何事もなく冒険者がひとり増えるだけですね」

皇家の言葉に受付の男がひきつった声を上げた。
初老の上司は考え深そうにクリスを眺めていたが、宅に置いたままだった書類をさっと取り上げて文章に目を走らせる。
「・・・ふむ。問題ないようですね。では印を押して・・・っと。はい、これであなたは今から立派な冒険者ですよ。駆け出しのランクＥですが」

自分の頭越しのやり取りに、受付の男は目をきょろきょろさせながら顔を青くしたり、白くなったり忙しい。
クリスは哀れに思いながらも、ギルドで働いていればそのうち常識なんて吹っ飛ぶだろうと黙って視線を逸らした。
「ありがとうございます。さっそく依頼を承っておりますので、このままジュールを出ます。依頼の申請と契約用紙はこちらです」

少し離れたところで働いているマリーの耳に入れば、ほぼ確実に騒ぎになって足止めをされてしまう。
彼女の心配は最近過保護と言える域に達していると思う。
そうなる前にクリスは支部を出たかった。
よどみなく冒険者登録用紙の印を確認し、ついで依頼関係の書類をまとめて初老の上司に手渡す。
「では、いってきます」
「お待ちなさい」

マリーに止められると思っていたが、意外にも初老の上司に引き留められた。
彼はメモ帳に何か走り書きをして、それをクリスに手渡した。
「これはこの街の防具屋や武器屋で、評判のいい店の場所を描いた地図です。まずハズレを引かされることはないでしょう。がんばりなさい」

クリスは己の服装を見下ろした。
クレナダ村に向かうときに着ていた動きやすい服ではあるが、長旅には耐えられそうもない。ここは素直に厚意に甘えるべきだろう。
「ありがとうございます。さっそく行ってきます」
「いってらっしゃい、気をつけて」

その言葉をヴァンにもかけてくれればいいのに、と皮肉に思いながらクリスはギルド支部を後にした。

クリスは今まで護身用以外に武器を持ったことがない。
持たずとも学校内は安全であったし、家の中もある程度警備されて

いた。
ギルドともめごとを起こすような知恵の足りない冒険者には、元冒険者の上司がきっちり対応してくれた。主に肉体言語で。
あのときは痛そうだったわね・・・現役冒険者のほうが。

クリスは回想しながら、まずは武器屋の扉を叩いた。
店内にはショートソードや、大剣、弓などの様々な武器が壁に立てかけられている。
「いらっしゃい。お嬢ちゃんだと護身用でも探してんのかい？」

店の奥にいた体つきの大きな中年の男が、クリスを品定めするように見た。
クリスは不快感に見舞われながらも首を振る。
「いいえ、魔法使い用の杖を探しに来ました。旅に充分耐えられるものがいいのですが」
「旅？おいおい。あの皇都が墜ちたってぇのに・・・どこに行こうってんだ」
「一人旅ではないので大丈夫ですよ。遠いところにいる知人に会いに行くだけですから」
「ふん・・・まあ、そんなら。ちょいと待ってな。奥からお嬢ちゃんでも扱えそうな軽いやつ持ってきてやるよ」
「ありがとうございます」

その対応から店主なのだろうとあたりをつけたクリスは、男が倉庫に行っている間に体の力を抜いた。
店主自らが対応するなら、下手なものは掴まされないだろう。
先ほどの会話で軽い嘘を混ぜたクリスは、罪悪感からこわばっていた頬をそっと抑えた。

ヴァンと合流すれば一人旅ではなくなるし、犯罪者を追うという依

頼も知人に会いに行くとあいまいに言い換えただけなのだが、どうにも落ち着かない。
人と深い付き合いをしてこなかった自身のコミュニケーション能力の低さに落ち込んだ。

そうしているうちに店主が白くて長い棒を持って戻ってくる。
「これなんかどうだい？杖の本体は魔力伝導率を上げた鋼製。上のとこについてる細長い石は水晶だ。水晶って魔除けになるんだってな？」

クリスは手に持って何度か軽く振ってみる。
少し重いが、軽すぎて頑丈さを損なうよりマシだろう。
水晶が魔除けになるのは、魔力を瘴気にまみれている、いないに関わらず吸い取る効果があると言われているからだ。
実際に確かめたものはいないので眉唾物かもしれないが、クリスは杖に魔法的な機能性を求めていなかったので構わないと思った。

魔力の伝導率が多少あがったところで、ウンディーネの加護を持っているクリスにはあまり恩恵がない。
魔法使いが杖を使うのは、魔法の威力を左右する魔力の伝導率をあげたいからだ。
そのあたりを水の精霊の加護でこなしてしまっているのだ。
ただ、これからフードの男を追跡するにあたって、己を魔法使いだと一目見てわかるほどアピールできる武器は便利だと考えた。
見た目が年若いのだから、これくらいの牽制は必要である。
「あの、じゃあ、これください。おいくらでしょうか？」
「そうだなあ・・・倉庫に眠ってたもんだしな。ちょいとまけといてやるよ。銀貨５０枚でどうだ？」

銀貨１枚で軽く一食は食べられる金額だ。

そして銀貨５０枚あれば、朝と晩の食事つきの宿に一週間は泊まれる。

高い・・・高いが・・・錬金術師の伝導率を高めた付与つきの杖。
それは高すぎることはない絶妙さ。

クリスは店主の商売の腕にうなった。
うなって、悩んで、考えて。
結局買うことにした。必要経費と割り切らなければならないだろう。

次の防具屋でも似たようなことが起きた。
そこで勧められたのは頑丈で動きやすそうな白の上着に、青の籠手。
そしてベルトで幾重にもしっかり固定された藍色のブーツだ。
上着とブーツはなんの変哲もない衣装だが、籠手は錬金術師が頑丈さと軽い魔法防御の効果を込めた一品である。
しめて銀貨４０枚。

クリスはかなり軽くなった財布を見ながら、今夜の宿は治安のよい場所で、それなりに安いところを探そうと決意した。
もう食事つきでなくても構わない心境である。
贅沢は敵だった。

翌朝、クリスはギルドに立ち寄っていた。
昨日の登録時にはあまりマリーたちと話せなかったので、あらためて再会のあいさつをする。そしてもう一度ヴァンの行方について尋ねてみた。
「昨日のうちにすれ違ったのかもしれませんし。彼から連絡はありませんでしたか？」

「あったと言えばあったけどねえ・・・本人かわからないようなものだったよ」
「・・・どういうことですか」
だめもとで質問したというのに、意外な反応が返ってきた。
クリスは驚いて目を見開いてマリーを見る。
「それがねえ。茶髪で幅の広い剣を持ってる腕の立ちそうな冒険者で、２０歳前後の男って言ったらヴァンくらいしかいないだろう？その男がどうも怪我して動けないっていうんで、代理の人がギルドに連絡入れてくれたんだよ」
「怪我・・・そんな・・・」
伝言を人に頼まなければならないほどの大怪我をしたというのだろうか。
クリスは血の気のひく音を聞いた気がした。
「一応会いに行ってみるかい？連絡先を黙っておくようにとは言われてないからね」
「お願いします！すぐに行きます」
マリーが地図を描いて住所を描きこむ間、クリスは落ち着かない気持ちで自分の手を握りしめる。
やはり浄化の魔法が使える自分が同行すればよかった。
あのとき、覚悟がなくて見送るしかなかった自分が恨めしい。その後、自分に喝を入れて追いかけると決めたけれど、その追いかける相手が大怪我をしている。
そうなる前に追いつきたかった。
悔恨は尽きない。
マリーから場所を聞いたクリスはギルド支部を飛び出した。
どうか生死にかかわるような怪我ではありませんように、と祈りな

がら。

モナドの竜　？

「――――まで、することは――――」
「――――じゃない。――――から、大丈夫」

ぼそぼそと人の話し声がする。
ヴァンはゆっくりと浮上する意識の端で、気配を探った。
ふたり・・・いや、ひとり部屋から出ていったようだ。扉の開閉する音がした。
「ああ、意識が戻ったようですね」

意外と至近距離で聞こえた声に、ヴァンはびくりと身を震わせる。
目を開けると、そばに眼鏡をかけた神経質そうな男がいた。
「ここは・・・」
「我が主の屋敷です。あなたは皇都で主の婦人に助けられたのですよ。覚えていませんか？」

ヴァンの記憶にあるのは、くすんだ金髪の男が黒い靄を発したところまでだ。
助けられたというが、この男や先ほど出ていった人間が敵ではないとは言い切れなかった。
慎重に周囲を見回す。
無駄な飾りのない丈夫そうな木製の家具と、清潔な室内。
しかしよく見れば、どれも丁寧に加工されたのか、艶々とした飴色の輝きを放っている。
少なくとも人を雇えるだけの家で、家具にも金をさける余裕のある金持ちってとこかな。

内心でそう判断しながら、目の前の男に視線を戻す。
「悪いけど覚えてないよ。で、あんたは？」
だるさの残る体を起こしながら問いかけると、男は綺麗に一礼した。
「左様ですか。私はこの家に仕える家宰のギルベールと申します。Aランク冒険者のヴァン様とお見受けしますが、間違いないでしょうか」
「ああ。どこで俺のことを聞いたのか知らないけど、そのヴァンであってるよ。でも・・・家宰ねえ。ただの雇われた人間には見えないけど？」
ヴァンが目を開く前に意識を取り戻したことを察知した能力といい、先ほどの隙のない礼のしぐさといい。
とうてい一般の人間には見えなかった。
「警戒はごもっともかと。ですが、それらはすべて経験の差と申し上げておきましょう」
ギルベールと名乗った男は眼鏡のふちを持ち上げながら、唇の端を上げて皮肉っぽく笑った。
ヴァンはひくりと頬がひきつるのを感じる。
この目の前の男はAランク冒険者と知りながら、ヴァンのことを未熟者扱いしたのだ。
ヴァンは他の血の気の多い冒険者に比べれば喧嘩っ早いほうではないが、今このときギルベールという男を殴り倒したくなった。
もっともこちらは本調子ではない上に、向こうはまったく隙を見せないので実質不可能だったが。
「あんたみたいなヤツに仕えられてる人間に同情するよ」
せめて言葉で反撃すると、ギルベールはにこやかに微笑んだ。
「あんたではなく、ギルベールという名がございます。それから我

が主と婦人にこのような態度は取りません。もっともこの程度のことなら簡単にひねりつぶすような方々ですから、杞憂というものですね」

「・・・・・・」

一筋縄ではいかない家宰をひねりつぶせる主人のいる家。

どんな化け物屋敷かと、ヴァンは頭を抱えた。

そのとき扉を軽く叩く音がした。

ギルベールが内側から開くと、黒髪黒目の２０代後半に見える女が入ってくる。

「聞こえてたわよぉ。ギルベールったら、怪我人をいじめちゃダメじゃない」

「奥様、誤解です」

「奥様やめてってば。ほら、あんた。これ薬草入ったスープだから飲みなさい」

女が差し出した器には乳白色の液体。

ほんのりミルクの香りが漂い、ヴァンの胃を刺激した。

急に空腹を訴え出した腹をおさえながら、これを飲んでいいものか迷う。

敵ではないという証拠がいまだに見つからないのに、不用心に口に入れるのはためらわれたのだ。

それにギルベールの言葉が正しければ、このどこにでもいそうな容貌をした奥様と呼ばれる女は、相当の力を有していることになる。

じっとヴァンがスープを見つめたまま動かないでいると、女がしびれを切らしたのか床を一度踏み鳴らした。

「もう！そんなに警戒しなくてもいいじゃない。だいだい殺すつもりなら、あの場で見捨てたほうが遥かに簡単だったわ。死にかけてた自覚ある？」

「死にかけていた？・・・・え、マジで？」
だるさ以外に体に不調はない。
ヴァンは自分の身を見下ろしながら首をかしげた。
生死の境をさまよったようには見えない。
しかし女は顔の前で人差し指を立てて、真面目な顔で言った。
「本気と書いてマジと読む。妙な像・・・受けた攻撃を身代わりにする効果があったみたいだけど。それを握り締めてたでしょ？あれのおかげで即死はまぬがれてたみたいねぇ。まあでも放置していたら、そのうち像の効果が切れて確実に死んでたわ」
「・・・それがほんとだとしても、助ける理由がわからないね」
錬金術師が錬成した身代わりの彫像の効果を、いともあっさり見破った女に寒気を感じながらヴァンは問いかける。
女は胸を張って答えた。
「気まぐれよ」
「・・・は？」
「だから、気まぐれだってば。見捨ててもよかったんだけどねぇ。目覚め悪そうじゃない？疑ってもいいけど、完全に治るまで利用するくらいの気持ちでここにいなさいよ」
すがすがしいほどの笑顔で言い切る女に、ヴァンは顔をしかめる。
「別に今すぐ出ていってやるよ。怪我もないしね」
「そうねぇ、怪我はないわね。でも出ていけるだけの体力があると思ってんの？」
ヴァンは女の言葉に耳を貸さず、寝かされていたベッドから立ち上がって出ていこうと思った。手をついて足を床につける。
とたんに激しい目まいと嘔吐感にさいなまれた。
「う・・・え？なんだよ・・・これ」

ベッドの住人に逆戻りしながら、ヴァンは呆然とつぶやく。
女はため息をつきながら、スープの入った器をギルベールに渡した。
そしてヴァンの額に無造作に手を当てる。
「ギルベール、ちょっとこれ持ってて。・・・うん。熱があるわねぇ。たぶん、まだ上がるわよ。自覚ないって、よっぽど今まで病気知らずだったのかしら」
「なんで・・・」

ヴァンは幼いころから丈夫な性質で、たしかに病気らしい病気をしたことがなかった。
薬師の世話になるのももっぱら怪我が主だ。
女はヴァンから手を放して、床にしゃがみこむ。
視線を合わせながら、ゆっくりとした口調で言った。
「死にかけていたって言ったでしょ？瘴気に侵されて魔物になりかけていたのよぉ。浄化の魔法を使えば、魔物化しかけているあんたまで滅びそうなくらいの浸食率だったわ。だからあんたの体力を浄化の力に転換して、内側から瘴気を追い出すことにしたの。わかる？今のあんたの体力は生まれたての赤子並ってことよ」

ヴァンはおだやかな女の口調に眠気を誘われながら、なんとか意味を把握する。
その技がどれほど高度かなんて考えていられなかったが、自分の体調が思っていたよりも悪いことは理解した。
悔しさにぐっと唇をかむヴァンに、女は優しく語りかける。
「寝ちゃいなさい。起きたらまた温めたスープ出してあげるわ。おやすみ、“ラリホーマ”」

女の言葉が終わると同時に意識が闇に包まれていく。
ヴァンはあらがいようのない睡魔にとらわれた。

「せっかくの奥様のスープが冷めてしまいましたね」
「いいのよ。病人相手に目くじら立てることないわぁ」

ヴァンが完全に寝入ったのを確かめてから、ギルベールはぼやいた。
女――――エレオノーラはくすりと笑う。
それを横目で見ながら、ギルベールはまだ不満そうに眉を寄せた。
「このような礼儀知らずな男を、気まぐれでも助ける価値があるのですか」
「ほんとは気まぐれじゃないからよ。死にかけていたっていっても、あのときのキールほどじゃなかった。ただ・・・罪滅ぼしかしらねぇ」

エレオノーラは遠く、皇都の方角を見ながら目を伏せる。
「私のつくった子たちが利用されて、魔物になって。だからといって、舞台からとっくに降りた時代遅れの魔女が助ける気はなかったわ。だから妖精たちが自爆するのを黙ってみていた。ジークフリートに束になっても敵わないと知っていながらね。でも・・・偽善だけど、とばっちりを食らった人まで放っておくことはできなかったのよ」
「その偽善に助けられた人間は多くいます。キール様も、私も。そして腹の立つことに、この男も」

ギルベールの言葉にエレオノーラはそっと笑った。
案外この家宰はお人よしな部分がある。
なんだかんだ言いつつも、ヴァンの面倒を見るだろう。
そして自分もまた、５００年たっても人間臭い部分が残っていたようだ。

「それじゃ、もうひとつくらい偽善が増えてもかまわないわねぇ。この人を拾っちゃったせいでできなかったけど、今からジークフリートのところへ行ってくるわ。最後くらい私が後始末つけなくちゃ」

エレオノーラは自身の足元に転移の魔法陣を展開した。
魔女の膨大な魔力によって、皇都までの2キロメートルもの距離を一息で詰める陣が描かれていく。
ギルベールが転移に巻き込まれないように一歩下がりながら言った。
「そろそろキール様がお戻りになる時間ですよ」
「あらそう？入れ違いになるわねぇ。きっと機嫌が悪くなるから、ちゃんと宥めておいてちょうだいね」
「竜を相手にする方がマシな話ですね」
「貧乏くじと思って諦めて。むしろ私も機嫌の悪いキールの相手したくない」
「それが本音でしょう？・・・頼まれたからにはやりとげますよ。病人の介護もご心配なく」

ヴァンの看病を引き受けると言った家宰に、エレオノーラはやはりこの男も愛すべき偽善者だと思いながらうなずいた。
「じゃ、あとのことは任せるわ」
「いってらっしゃいませ」

ギルベールの優雅な一礼に見送られながら、魔女は竜のもとへ飛んだ。

クリスはマリーから聞いた住所をもとに、郊外まで来ていた。
ジュール城塞都市の男爵家別邸に馬車はないので、徒歩での移動になる。

それに男爵家と縁を切っている状態では、たとえ馬車があっても使おうとは思えなかった。
ただ、中心部にあるギルド支部から歩き通しで少し足が痛む。
「このあたりのはずだけれど」

軍事基地として発展している街の中心部と違って、見渡す限りうっそうと茂った木々しか見えなかった。
来る途中に貴族の別荘と思われる豪華な屋敷が見えたが、教えられた住所はさらに奥を示している。
ウンディーネを呼び出して周囲を見てきてもらおうかと考えていたとき、背後から馬のいななきが聞こえた。
振り返ると栗毛の馬に乗った少年が駆けてくるのが見える。
「びしょうねん・・・」

思わず片言の発音になるほどの衝撃を受けた。
遠目でもはっきりわかるほど繊細で秀麗な面。
艶やかな金髪が木漏れ日を反射してまぶしいほどだ。
その美しい少年はクリスの姿をみとめると、馬の速度をゆるめて近づいてきた。
見下ろす緑の瞳が透き通っていて、クリスは吸い込まれそうだと思った。
「君は？見ない顔だね」
「うあっ！はい！・・・あの、この家を探しているのですが。ご存知でしょうか？」

声まで美しいってどういうことかしら、とクリスは動揺しながら尋ねた。
マリーに描いてもらった紙を差し出す。
金髪の少年は馬上から降りて、紙をのぞきこんだ。
「ああ、これは我が家だな。うちに用でも？」

クリスは少年の言葉に驚いて目を見開いた。
「ヴァンは・・・。あの、冒険者の男がいませんか？彼の知り合いなんです。怪我はしていませんか？無事ですか？」
矢継ぎ早に問うてから、慌てすぎだと気づいたクリスは自身を戒める。
「すみません。ギルドでこちらのことを聞いて来たんです」
肩を落としてそう言うクリスに、少年は何かを思い出すように宙を見上げた。
「たぶんそれは、うちの奥さんが拾った男じゃないか？大きめで、幅の広い剣を持っていたな。ヴァンというのか」
「はい・・・間違いないと思います」
クリスは１０代後半にしか見えない美少年の口から、「奥さん」という似つかわしくない単語が飛び出したことに驚きながらも肯定する。
この年齢で妻がいるということは、もしかしたら彼は貴族なのかもしれない。
政略結婚では年齢を重視されないのはよくある話だった。
「それなら相乗りになるけど一緒に行こうか。まだここから離れた場所にあるんだ」
「ありがとうございます。私はクリス＝ル・・・いえ、クリスです」
ルクスの性は男爵家を出たと同時に名乗ることは許されない。
つい出かかった言葉を飲みこんで、クリスは自己紹介した。
「わかった、クリスだな。それじゃあ行こうか」
先に馬にまたがった少年に馬上へ引き上げられながら、クリスは首

をかしげた。
今さらりと名乗りを流された気がする。
相手が自己紹介したなら、自分も名乗り返すものじゃないのかしら。
もんもんと考え込むうちに、少年の背後に座らされたクリスは馬の歩き出す振動で我に返った。
「少し速度を上げるよ」
「あ、はい」
しかし振り返った少年の美麗な顔に考え事が吹き飛ぶ。
ついで早足になった馬の動きについていくのに精いっぱいになったクリスは、結局少年に名を尋ねる機会を失った。

モナドの竜　？

クリスは別荘というにはささやかな屋敷に迎え入れられた。
小さな庭には色とりどりの花。
手入れが行き届いていて、家人の趣味の良さがうかがえた。
そして庭の奥には見慣れた野菜が植わっている菜園のようなものが見えたので、実家と同じく困窮しているのかもしれない。

そんなことを考えているうちに玄関前に到着すると、正面の扉が静かに開いた。
「おかえりなさいませ、旦那様」

黒髪で眼鏡をかけた男性がうやうやしく一礼する。
馬から先に降りた少年がクリスに手を差し出しながら、男性に向かってうなずいた。
クリスはありがたくその手をとって地面に降り立ち、ほうっと息をつく。
馬車につながれている馬を見ることはあっても、乗って移動するのは初めてだった。
少年の騎馬技術が上手いのか、それほどひどい揺れは感じなかったが、少しばかり緊張したのだ。

金髪の美しい少年が男性に向かって馬を引き渡す。
「厩に返しておいてくれ。彼女は私が案内しよう。客人の知り合いだそうだ」
「左様でございますか。では後程なにか摘まめるものを持って参ります」
「頼む」

いくつか簡単なやり取りを交わしたあと、少年の緑の瞳がクリスを捉えた。
「我が家へようこそ、クリス嬢。訊きたいこともあるだろうが、歩きながらで構わないか？」
「はい、かまいません」
クリスは宝石のような瞳を正視できなくて、そっとわずかに逸らしながら答える。
少年は鷹揚にうなずいた。

屋敷の中に一歩入ると、クリスは調度品のひとつひとつが特注品であることに気づいて瞠目した。
男爵家とつながりのある比較的裕福な貴族の屋敷で見かけたことがあるが、ここにあるものはそれ以上に丁寧に職人の手によって造られているように見受けられる。
錬成術の複製技術による既製品につきものの粗さもなければ、特注品にありがちな装飾過多で丈夫さを重視しないものでもない。
品と実を兼ね備えた素晴らしいものだった。
先ほど実家と同じく困窮した貴族かもしれないと考えたが、その線は消えたわね、と内心で分析する。
そうなると庭で見かけた菜園が気になった。
野菜を育てずとも生活していけるだけの財力はありそうだ。どうもちぐはぐな印象を受ける屋敷である。

クリスがきょろきょろと周囲を見回すのを見て、少年が苦笑した。
「なにか珍しいものでも？」
「あ、いいえ。不躾に失礼いたしました。まずはお名前をお聞かせ願えませんか」

あからさまに観察していると見抜かれたクリスは、羞恥に頬を染めながら質問する。
馬上に乗る際に名乗りの流れをかわされた気がしたので、気になっていたのだ。
少年はふと考え込むように黙り込んだ。
「そうだな・・・訳あって名前が独り歩きしているものでな。すまないが本名は名乗れない。代わりにデュークとでも呼んでくれ」
遠回しに断わったり、騙そうとするのではなく、「名乗れない」とはっきり口にした少年にクリスは好感を覚えた。
「デューク様ですね。古代の制度で公爵位を意味していたと記憶しております。そのつながりで本名を明かせないのでしょうか？」
少年――――デュークは口元に笑みを浮かべる。
「クリス嬢は博識だな。そう考えてくれていい」
クリスは公爵一族の庶子の可能性を想像して口をつぐんだ。
貴族のしがらみなど、上位にいくほど知らないほうがよいことが多い。
男爵家令嬢として社交界に出たときも、そのような上位の貴族たちには出来る限り関わらないスタイルをとっていたので、深く追求する気は起きなかった。
話しているうちに階段を昇り、屋敷の2階奥にある部屋の前にたどりつく。
「ここが君の探し人と思われる男がいる部屋だ。私は下のフロアにいるから、ゆっくりしていくといい」
「ありがとうございます、デューク様」

クリスが一礼する間に、デュークは颯爽と去って行った。
その背を見送ってからクリスはおそるおそる扉を叩く。
返事はない。
もう一度叩いてみたが返答がないので、そっと扉を開けて隙間から部屋の中を覗き込んだ。

部屋の窓際に設置されたベッドに茶髪の青年が眠っていた。
人の気配に敏感そうなのに、クリスが扉を完全に開けても目覚めることはない。
それほど重症なのかと、心痛できりきりと痛む胸を抑えてクリスはヴァンに近寄った。

部屋のなかには一人用にしては大きめのベッドと、小さな机がひとつ。
机の上には水差しが置いてあった。

窓から差し込む日はかげりを見せ始めている。
その光のなかで眠るヴァンの顔色はお世辞にもいいとは言えなかった。
ぱっと見た限り目立った怪我はないが、内臓に衝撃を与えるような攻撃を受けていたらわからない。
呼吸も少し荒いようだ。

しかし眠るヴァンを前にして、クリスは顔がほころぶのを止められなかった。
あの禍々しい災厄を引き起こした魔物の竜がいる皇都に単身戻って、無事とは言えなくとも生命があるのは幸いだ。
あの人工妖精たちがいっせいに散る瞬間を目撃したクリスは、自分が死や暴力的なことにひどく臆病になっているのを自覚した。

音をたてないように、そっと床にしゃがみ込む。
手を伸ばして触れた額は平熱よりも少し高い気がした。
人に触れられても起きないというのは相当眠りが深い証拠だろう。
クリスはヴァンの足元に腰かけて、彼の覚醒を待つことにした。

ギルベールは己の主人に壁際に追い詰められていた。
「で、エルはどこだ？」

クリスにデュークと名乗ったキール＝フォント＝クレセント＝デュークは、階下におりてすぐに厨房にいたギルベールに話しかけた。
微笑むキールの表情は温和そのものだが、その手に持った剣がすべてを裏切っている。
「・・・後始末をつけに行くと、皇都に帰還されました」

奥方のことになると理性をうしなう主人を相手に、額をつたう冷や汗を無視して努めて冷静な口調で返した。
キールは忌々しそうに表情を一変させて、眉を寄せる。
「どうして引き留めなかった。エルに子殺しをさせる気か？」
「子・・・とは。相手は奥様が製造した人工妖精ですよ」
「だが、我が子のようにかわいがっていた。できるなら殺したくはないだろうに」
「僭越ながら、奥様は私情と魔女の役目を混同される方ではないとお見受けいたします」

エレオノーラはキールに養われるだけの女ではない。
力ある蒼の森の魔女だ。
５００年前、皇都の技術を革新的に進歩させたときに言っていた。
「自分の仕事には責任とるのが社会人よねぇ」と。

実際、錬金術の市場入りによって、それまで手作業で道具を作っていた者たちが職を失ったとき保護して自立させたこともあった。
魔女が関わることには魔女がけじめをつける。
それがエレオノーラなりの責任の取り方だった。

しかし嬉しげに人工妖精を生み出して名前と力を与えていた彼女の姿を知っているだけに、キールは苦い思いが込み上げる。
「さすがにジークフリートを相手にするのは、私でも骨が折れる。エルの後を追ったりはしないが、彼女が帰るまでにその意識は変えておけ。ギルベール。エルは仮初ではない生命と感情を持つ生き物に対して、そこまで割り切れる女性ではない。役目を果たした後、落ち込むこともある」

ようやく鞘に納められた剣を視界におさめて、ギルベールはほっと溜息をついた。
「存じ上げておりますよ。私のような合成獣に過分な対応をされる方だとね。・・・魔女としての奥様は見送りましたが、妹のような奥様がお戻りになった際のことを考えてモンブランを用意しております。あの方はケーキ類の中でもモンブランがお好きですから」
「すべてわかった上での対応か。ならばいい。その茶を上の客人たちに出して来い。ああ、あと私のことはデュークと名乗っている」
「デューク様ですね。かしこまりました」

キールが来る前まで手をつけていた仕事を再開したギルベールは、蒸らした茶葉の入ったポットをのぞきこむ。
乾燥させた花弁が湯で温められてふわりと広がっている。
巷で飲まれている発酵茶ではなく、体にもいいというハーブティだ。
あまり出回っていないのは独特の苦みがあるからだが、砂糖や蜂蜜を入れてやればまろやかに和らぐ。

手際よく準備し出した家宰の背後からキールは声をかけた。
「エルが帰ってきたら、モンブラン持って私の部屋へ来るように。私が彼女に食べさせるから」
「・・・かしこまりました」

５００年たっても主人の執着はエレオノーラただ一人に向けられているらしい。
ギルベールはすでに慣れてしまったが、今日は客人がいるのだから自重していただけないだろうかと頭痛のしてきたこめかみを押さえた。

エレオノーラは砂礫まじりの風にまきあげられた黒髪をおさえて、遠くを見つめた。
「ヤンデレがゆんゆんしてる気がする・・・」

目がうつろになるのを止められない。
ヤンデレに加えてどこからかヤバイ電波受信してるキールにつかまったら3日は離してもらえないのだ、物理的に。
初めてそうなったとき、エレオノーラは呑気に「拉致監禁プレイってこういう感じかしら」とのほほんと笑った。
だがそれが二度、三度と続いてくるとさすがに疲労を隠せない。
「いつもなら何を置いても戻るけど・・・さすがにねぇ？ジーク。もう少しだけ一緒にいてあげるわ」

彼女の足元には黒竜の骨格だけが標本のように残っていた。
まさにエレオノーラを食らおうとした瞬間、骨だけ残して中の肉は消えたのである。

エレオノーラは人工妖精の生みの親なので、彼らを構築している錬成陣を完全に把握していた。
それをもとに、魔物が退治された目印として残す意味がある骨以外の構築要素を消滅させたのだ。
黒竜はエレオノーラ自身に付与された2つ目の力――“ありとあらゆるものを破壊する程度の能力”を発現させる間もなく死んだ。

そんな骨だけの竜の頭蓋骨の上に、エレオノーラは無造作に座っている。
口調は軽いが、彼女の表情は一貫して無だ。
哀しみも怒りも表面にはあらわれていない。
しかしエレオノーラの裡でマグマのように、ふつふつと滾っていた。
「ごめんね、ジーク。ごめんね、フェンリル。ごめんね、自爆する選択肢しか選べなかった子たち」

エレオノーラはぐっとこぶしを握りしめた。
目の前の廃墟には、かつての栄華の名残はどこにもない。
エレオノーラが生んだ子たちの家も。
エレオノーラが通い詰めた図書館も。
キールとエレオノーラが我が子のひとりに託した元公爵邸も。
すべてが破壊され、瓦礫となっている。
死者はほぼ朽ちたのか、臭気はそれほどひどくない。
それがなおさら空しかった。

あのときエレオノーラが金髪のイカレた男を殺すのは簡単だった。
あいつがすべての元凶だと思うと怒りで頭がくらくらしそうだった。
だが金髪イカレ男と戦っているうちに、エレオノーラは彼が人間ではないことに気が付いた。

あれは――――瘴気。

瘴気が凝り固まって人型になった存在。そんなふうに感じた。
エレオノーラは生物を介さずに瘴気だけで魔物ができるのかとか、魔物にしては知能が発達しすぎているから、おかしいだとか。
金髪男をいたぶり続けながら、つらつらと考えた。

こいつを殺さないのは当然、生きている方が地獄だと絶望させるため。
キールともそう話したけれど、もしかしたら殺さないのではなくて殺せないかもしれない。
「私はチートだけど、最強じゃない。あの男は最強につながる可能性のある人間・・・うん？人間でいいのよねぇ？ああ、あいまいだわ！帰ったら時間かけて調べなきゃ。もっとほかに災厄の元凶がいるなら、そっちを叩かないといけないしねぇ。ぎったんぎったんにしてやんよ」

目を細めて陰惨に笑う姿は、エレオノーラが地球から転がり落ちてこの世界にやってきたころ。魔女と恐れられ、忌み嫌われた姿そのままだった。

しばらく太陽の傾きを見つめていたエレオノーラは、完全に日が落ち切る前の茜色に染まっていく廃墟で立ち上がった。
「とりあえず帰宅したらキールにスライディング土下座でしょ。ギルベールに泣きついてケーキかプリンもらうでしょ。それからあの冒険者の手当てして・・・うん。キールの機嫌がよければ手当てくらいでき・・・るわよね・・・？」

エレオノーラは己の旦那様がヤンデレゆんゆん状態のときに、宥める方法はひとつしかしらない。

ずっと平常状態に戻るまで抱きしめられ続けることだ。
今現在、屋敷に客のときにそれはないと信じたい。
信じたいが、ヤンデレ属性が信じさせてくれない。
「ヤンデレこわいヤンデレ。まじハンパない。チートよりヤンデレが強いと思う。食われる的な意味で」

エレオノーラは自分の腕で自身を抱きしめながら、顔を青ざめさせた。
「と、とにかく。日が落ちたら帰るわ、ジーク。骨格標本的なかんじで保存してもらえるといいわねぇ。あなたは何も悪くなかったんだから。よくやったわ、愛しい子」

足元に転移の魔法陣をゆっくり描きながら、エレオノーラはジークフリートだった竜の頭蓋骨を優しくなでる。
「魔物になってからも、この辺りで発生したわずかな瘴気さえすべてあなたが吸収していたから、ここではもう魔物はできないわ。ほんとうにありがとう。あなたは名前だけじゃなくて、本物の英雄になったのよ」

竜の骨は沈黙する。
己が手で殺した事実を思って、エレオノーラは顔をゆがめた。
それ以上なにかを語りかけることもできずに、顔を隠すように深くうつむく。
転移の魔法陣が発動一歩手前の輝きを放ちだした。
「・・・さよなら、私のかわいい妖精さんたち」

魔女の言葉は転移の魔法陣内に吹いた一陣の風にさらわれて、あっという間に空気に散っていく。
風がおさまることには、もう悲しい顔をした魔女の姿はなかった。

モナドの竜　??

時間は少し遡って、クリスがデュークもといキールと出会う前のこと。
キールは馬に乗って大陸で唯一自分と妻だけが使える紋章つきの通行札をぶらさげながら、ジュール城塞都市の最もにぎわっている場所を通り過ぎた。
城塞のうち砦として使用している建物へ向かっている。

やがて岩のごつごつした風合いを残した城塞砦の前についたので、馬から降りて近づいていった。控えていた門番に紋章を提示して、最高責任者を呼び出してもらう。
門番の顔色がやたら蒼白なのは、はやり紋章の持つ権力に怯えたからだろうか。

これが魔女――――私の奥さんに怯えたとかだったら、消し炭にしてやるのだがな。

物騒なことを考えているうちに、許可がおりたのか砦内部に案内された。
顔面の筋肉がこわばっておもしろいことになっている兵士たちを無視して、キールは最奥の部屋へたどりついた。

ノックせずに無断で中に入る。
部屋にはすでに1人の男が待っていた。
黒髪に緑の瞳の男は、キールが入ってくると無言で立ち上がってひざまずいた。

キールもまた無言で男を見下ろす。

自分とエルの子孫。この皇国の皇帝シグルド＝F＝モナド。
最初の皇帝に嫁いだ長女の面影がある。
「許す。顔を上げて気楽に話をしようか」
鷹揚にキールがうなずいてソファに座ると、皇帝も立ち上がって目の前のソファに向い合せに沈み込んだ。
歳経た目じりに皺がきざまれているのを見て、キールは老いない自分の異質さをあらためて自覚させられる思いだった。もっとも魔女に頼んで不老にしてもらったことに対して、後悔したことは一度もないが。
「我らが祖のお一人、キール様。お会いできて光栄の極み。我らが一族は皆あなたがたへの恩を忘れてはおりませぬ」
「恩など感じなくていい。子どものために動いていたら、結果的に国全体がよくなっただけだ。・・・それで、私がここへ来た要件の予測はついているか？」
「・・・役所に提出されていた建物の居住権のお話か？」
皇帝シグルドは今朝がた役所からあがってきた、亡きクレセント王国の公爵家の紋章が入った居住申請書類を見て卒倒しかけた。
臣下の手前こらえたが、頭の中では暴風が吹き荒れている。
人工妖精が魔物化する未曽有の危機に、皇国の祖が皇都ではなくジュール城塞都市にやって来る。
確実に皇都で黒竜ジークフリートが大暴れしたことが知られていると考えていい。
祖たちは殊の外、皇族や皇都を大切にしていたと代々伝わっていた。
その皇族で生き残ったのは自分一人。
妃たちは後宮から出ることもできないまま、崩れ落ちた建物によって圧死したようだ。
さらに皇都は壊滅状態となれば、どんな罰が下されるかわからない。
最悪、皇国の支配権を譲渡さなければならないかもしれなかった。

シグルドは少年にしか見えない金髪の亡国公爵に向かい合いながら、冷や汗が止まらなかった。
キールは皇帝の様子に一顧だにせず、淡々と話し出す。
「居住については家宰に一任している。数日中には追加書類が届けられるだろう」
「追加？書類を拝見したところ、不備はないように思えましたぞ」
「不備じゃない。庭を少し広くする予定だから、その分の追加書類だ」
「なるほど。合点いたしました。では、どのような要件かは皆目見当もつきませぬ」

せめて支配権譲渡という荒事ではありませんように、と普段信じてもいない神にシグルドは祈りを捧げた。
見当がつかないと言いながらも、脳内では最悪の場合にそなえて様々な対応策が練られている。
民を混乱させるような真似だけはできなかった。

悲壮な決意をかためているシグルドに対して、キールはソファの肘掛けに寄りかかり目を眇めて子孫を眺めている。
「我が祖と言いながら、対応は権謀術数。腹の内で悩んでいても解決しないものだ」
「キール・・・様」
「私が何百年この貴族社会を見てきたと思っている。まだまだ顔に感情が出ているぞ」
「は・・・」

５００年前の戦乱終結の立役者、キール公爵。
そして彼の妻、青の森の魔女エレオノーラ。
彼らを敵に回して生きているものはいないとされていた。

皇帝は幼いころからそう言い聞かされてきたし、実際に目の前にいる自らの祖から感じる威圧感は震えるほど恐ろしいものだ。
不興を買ったかと身をこわばらせた。

だがキールは何事もなかったように、机に置かれていた茶菓子をつまんだ。
胡桃入りのクッキーを選んで口に運ぶ。
「それほど緊張することはない。取って食おうというわけじゃないのだからな。・・・ふむ。皇帝シグルド。お前は我らとの約定を知っているか？知らなければそこから説明しなければならない」
「約定と申されますと、モナド皇国建国時に法律に組み込まれた三原則が真っ先に挙げられましょう。思想の自由、言論の自由、人権の尊重。これらはエレオノーラ様の提案であったと伝えられておりますが」
「それも守ってほしい約定だが、もうひとつのほうだな」
「・・・では、あなた方が皇都を去ったときの約定のことで相違ない。・・・たしか今後一切、緊急事態以外では手を貸さない。これからは子孫の新しい時代である。基本的に相互不干渉とする、と言い残して、あなた方は蒼の森にこもられた」

キールは満足げに微笑んだ。
「それだ。今まさに緊急事態のように見えるが、私たちはまだ打開策があると見ている。ゆえに、今生きている人間が努力し、解決するのが望ましい。そう釘を刺しに来たのだ。そろそろ元老院がうるさいころだろう？」

元老院は当主の位を子どもに譲った老いた貴族たちの集まりである。
当主でなくなっても発言権、影響力は無視できるものではない。
苦虫をかみつぶした顔で黙り込んだ皇帝に、キールは苦笑した。
「当たっていたか？」

「はい。何故魔女の力で犯人を討ち滅ぼさないのか、と連日問い合わせが来ておりますれば。今は避難民の生活安定を優先しているため、まだ追い詰められるほどではありませんが・・・いずれ対応せねばなるまいと案じておりました」
「そうか・・・。ならもうひとつ手助けくらいはしよう。今やっている国境の結界以外のついでにな」
「なんと！まことですか！？」

敵に回せば恐ろしい人物たちだが、味方となるとこれほど頼もしい者もいない。
シグルドは思わず表情を作るのを忘れて喜色満面で顔を上げた。
「ああ。要は犯人が捕まるか、死ねばいいのだろう。・・・たしか今冒険者ギルドにAランクの人間がいたな。史上初、ただ一人のAランクの噂は耳にしている。そいつを鍛えよう。私と、魔女と、合成獣が」

皇帝シグルドは思わずヴァンに同情した。
茶髪のまだ若い青年が、大陸随一の力を持つ一家に鍛えられる光景を思い浮かべたが、もはやただの拷問しか想像できない。
それとともに、数時間前に対話した水の精霊の加護を持つ少女のことを思い出す。
「彼には近々パートナーがつくやもしれませぬ。決定権は彼にあり、まだ未定のお話ですが・・・おそらくは」
「なら、そのパートナーとやらも鍛えよう。幸い我が家には魔法、錬金術、剣技、闘技に長けた者たちが揃っているからな。どんな者でも使えるように鍛えてやろう」
「・・・・・・」

シグルドはクリスに心の中で盛大に詫びた。
祖に隠し事のできないのは、血のなせる業だろうかとがっくりうな

だれる。
キールが不思議そうに皇帝を眺めた。

モナドの竜　???（後書き）

血筋じゃなくて生存本能とか、食物連鎖的な危機感でしゃべってる気がします。

モナドの竜　???

キールはもともと兄が公爵を継ぐと信じて疑っていなかったので、厄災に見舞われて公爵位についたときから腹の内を探るような会話が嫌いだった。
苦手ではないが、己の性質と相いれない。
そのため子孫といっても、貴族間のやり取りをした後は機嫌が下降する。
クリスという客人がいたので、それほど表には出さなかっただけだ。
その自制が妻のエレオノーラが帰宅したとたんに緩んだ。
幸か不幸か、玄関前で熱烈な抱擁をする公爵夫婦を見かけたクリスは硬直した。
妙齢の女性が少年に抱きしめられて困っているように見えるが、女性が奥方だった場合は邪魔するのは野暮だ。
クリスは2階から音をたてないようにそっと降りて、階段の下にいたキールに声をかけた。
「ギルベールさん、あの方はデューク様の？」
「奥様です。それで、どうかなさいましたか？」
ギルベールはクリスがずっとヴァンについて部屋から出てこなかったことを知っている。
茶を出しに行ったときも、そばを離れるようなことは言っていなかった。
クリスはそっと太ももに刻まれた青の紋をなぞりながら答える。
「奥様・・・やはりそうでしたか。あの・・・私は精霊と契約しているのですが、どうも先ほどから落ち着きがなくて。何かあったの

ではないかと来てみました」
「ああ・・・奥様ですね。あの方は大変力の強い魔法使いですから」
実体をもたない精霊は、同じく実態を持たない魂や魔力などに惹かれやすい。
ウンディーネがクリスと契約したのも、クリスの魂の色が好みだったからだと聞いている。
クリスは納得しながら奥様と呼ばれた黒髪の女性に視線を向けた。
黒の瞳と視線が交わる。
その瞬間、女性の頬に赤みがさした。
「ちょっと！見られてる見られてる！あんな若い子に見られるなんてええええ！！」
「エル、落ち着いて」
「あんたが元凶でしょうが！」

黒髪の女性は少年の胸をぐっと押して身を離した。
そのままクリスのもとへ駆けてくる。
しかしたどり着く前に、夫である少年に再度抱きしめられた。
「あああぁあ・・・ごめん。ほんと見苦しくてごめんねぇ。あなたお客さんでしょ？とりあえずどこか客間で待っててちょうだい。しばらくしたら落ち着くから」

背後から抱きつかれたまま、女性は苦笑いした。
クリスはひきつった笑みを唇に浮かべてなんとか返事をする。
「い、いえ・・・ごゆっくり」

ギルベールがクリスにそっと手を差し出した。
「こちらへどうぞ。旦那様より夕餉に招くよう言われておりますので、食堂へご案内いたします」
「えっ。いいえ、そこまでしていただくわけには」

「我が主の申し出です。遠慮なさらずに」
クリスは逡巡したあと、渋々うなずいた。
どのみち玄関で会話を続けるわけにはいかないだろうと判断したのだ。

クリスとギルベールの背が廊下の向こうに消えていくのを見送ったキールは、エレオノーラをあらためて正面から抱きしめた。これはエレオノーラが長時間出かけたときの恒例行事化したことから、充電タイムと家宰に命名されている。
腕の中の彼女は諦めたように力を抜いて、されるがままだ。
そんな５００年来の妻の顔を手のひらではさみこんで、じっと目をあわせる。
「そんなに心配しなくても、今回はすぐに解放するよ」
「そんなこと言って抱きしめられたまま、７２時間耐久の充電タイムしたこともあったわねぇ」
「今回は本当に。シグルドとの話も聞かせたい」

エレオノーラは脳裏に歴代の子孫たちを思い浮かべて、その名前が現在の皇帝であることを思い出した。
「あの子がどうかしたの？」
「今日会いに行ってきたんだ、約定の再確認をするために。ついでに君が拾ってきた冒険者を鍛えることを約束してきた。私たちではなく、今を生きる彼らが解決できるように」
「・・・どうしてかしら。言ってることはまともなのに、いじめの図しか浮かばない件について」
遠い目をするエレオノーラに、キールは不思議そうに首をかしげる。

「いけなかったか？」
大型犬が「褒めて！」と言っているイメージが浮かんだエレオノーラは、頭を振って妄想を振り払った。
そしてクリスの湖面のような瞳を思い出す。
「いいえ、いい案だと思うわ。鍛える人員に私とギルベールは入っているのかしら？あとあの女の子は何者？精霊の気配がえらく濃い子だったわねぇ」
「あの子は例の冒険者・・・ヴァンと言ったか。精霊の気配は知らないが、彼の知り合いらしい。今回のことを解決するのに役立ちそうなら、彼女も鍛える方針だ。当然３人で」
「・・・そう。他人のこと言えないけど、自重とか手加減とか忘れないでねぇ」
「善処する」

遠い昔にモナド皇国の騎士団を容赦なく鍛えた公爵閣下の返答に、エレオノーラは「それ日本じゃ否よ！拒否よ！」と心の中でうなだれた。
「まあ、いいわ。それなら今の時代の彼らが活躍しやすいように、私たちのことは知らせないようにしましょ」
「わかっている。私はデュークと名乗っているから、エルは・・・エレオノーラじゃなくてエルでいいんじゃないか？ギルベールは特に隠す必要はない。あまり有名な逸話が残っている訳でもないからな」
「そうねぇ。じゃ、あの女の子を鍛えることになったら私が担当するわ。精霊の気配がするってことは、魔法を使える素質があるってことだもの」
「わかった」
一通りの打ち合わせをしたあと、ようやくキールの腕から解放され

たエレオノーラはほうっと息をついた。
クリスを待たせている食堂へ足を向けようと身をひるがえす。
そのときエレオノーラの耳元に口を寄せたキールがささやいた。
「またあとでね、奥さん」
「え゛」
「やっぱりまだ充電が充分じゃないから」

言い終えると、さっさとひとりだけ食堂へ向かうキールの背中をエレオノーラは呆然と見つめる。
「エロイ。嫌な予感しかしない。昔はもっと可愛げがあった気がするのに！・・・あら？でもヤンデレ化して食われた記憶が・・・。なんだ昔からか・・・そっか」

魔女は乾いた笑いを浮かべた。

クリスは焼き魚を一切れ口にふくんで首をひねった。
ヴァンとの出会いや、これまでの経緯を皇帝陛下の沈黙の命令に触れない程度に軽く説明したときだ。
エルと名乗った奥方が、クリスとウンディーネの契約について言及したのだ。
「あなたと水の精霊の契約は、見る限り下位契約しかなされていないわねぇ。どうしてもっと上の契約にしなかったの？魔法の威力が上がるでしょ」

クリスにはまったく心当たりがなかった。
魔術学校で習っていない事柄だったこともあるが、そもそもウンディーネが生まれたばかりのクリスに一方的に結んだ契約なのだ。
そばにいることが当たり前になっていた水の精霊との契約を知ろう

とも思わなかった。
八つ当たり気味にウンディーネの紋に乱暴に指を滑らせて、彼女を呼び出す。
室内で同じように食事をとっていた家主と壁際に控えた家宰が目を見開いたが、クリスの前に座っている黒髪の奥方は動揺ひとつしなかった。
「あら。人型の高位精霊なのねぇ」
「はい、エル様。・・・で、どういうことなのかしら？ウンディーネ」

流水の美女はいつもどおり表情のない顔で空中に浮かびあがった。
「眠いわ～、クリスちゃ～ん」
「起きなさい」
「まだ寝てないわ～」
「屁理屈こねてないで、私との契約内容を説明してちょうだい」

クリスとウンディーネのやり取りに、ずり落ちかけた眼鏡をかけなおしながらギルベールは問いかける。
「クリス嬢、ずいぶん個性的な精霊ですね？」
「はっきり変だとおっしゃってくださってかまいません」

婉曲な表現をバッサリ切り捨てたクリスは、ウンディーネの頬をつついた。
つまんでも流水でできている彼女の頬をつかめないのはわかっているので、衝撃だけでも与えたかったのだ。
ウンディーネはつつかれた頬を手でさすりながら首をかしげた。
「ええと～、契約について知りたいのだったかしら～？」

流水の乙女はちらりと黒髪の奥方を見る。
「なにかしら？水の精霊さん」

「どうして教えちゃったの～？死んじゃうかもしれないのに～。高位契約は奴隷と変わらないって～、昔精霊仲間に聞いたことがあるもの～」

だから一度も下位契約以上したことがない、とウンディーネはつぶやいた。

クリスは驚いて口を開けたまま硬直する。

「死ぬ？精霊は肉体を持たないのに死んでしまうことがあるの？」

「人の死とは～ちょっと違うわ～。消滅って感じかしら～」

「消滅・・・」

肉体を持たない精霊はよすがさえも残さず消えてしまうというのか。ヴァンを助けたい気持ちはあるが、ウンディーネを犠牲にしたいわけではない。

クリスは一気に食欲が失せて、そっとフォークを机の上に戻した。

消沈しているクリスを見ながら、かまわずエレオノーラは食後のモンブランに取り掛かる。

「うん、美味しいわぁ。さすがギルベール」

「お褒めにあずかり恐縮です」

のんびりお茶を飲みだした妻に、キールは呆れたようなまなざしを送った。

「エル、さすがにこのまま放置はかわいそうじゃないか？」

「あら、そうねぇ。ねえ、ねえ。クリスちゃん。あなたはどこまで精霊の契約を理解しているのかしら」

クリスは呼びかけに顔を上げて、脳内の知識を思い出そうとした。

精霊と人間の契約。

人間の魔力制御の補助が主だったはずだ。

魔術学校でもその程度のものならば習った。だが、契約に格付けが

あることまでは知らなかった。
「魔法使いの魔力制御を簡単にするための補助機能といったところでしょうか」
「だいたいあってるわ。表面上に出ている魔法使いの魔力を精霊が干渉することで、ある程度の補助をしているのよ」

「でも」と、さらにエレオノーラは続ける。
「高位契約をすると、表面上に出ている魔力だけじゃなくて魂の底に沈んでいる魔力も引き出せるわ。普通はねぇ、クリスちゃん。魂の表面を流れる魔力だけを使って人間は魔法を発動させるの。でもそれだけじゃ、もったいないでしょ？肉体と魂を構築してまだ余りある力は、一生外に出ずに消えてしまうよりもバンバン使ってなんぼだと思うのよ」
「・・・魂に魔力が？聞いたことがありません。そもそも魂とは抽象的な概念ではないのですか？」

死後の世界や、魂の有無をたしかめた人間はいない。
いたら、とっくに書籍になって広く一般に知られているはずだ。
死という逃れられない未来への不安は、人間が誰しも抱くものなのだから。

エレオノーラはクリスの瞳をのぞきこみながら、唇をつりあげてにんまり笑った。
「その答えを知りたいなら、私の提案を飲みなさいねぇ。もしあなたが、あなたの正しいと思うことを正しいと思う方法で成したいのなら。私は力を貸すわ。もちろん水の精霊さんが死なない方法も知っているわよ」
「え？私・・・。私がどうして何かしたいことがあるってわかるんですか？」
「いい警戒心ねぇ。警戒は大事よ？・・・あのね、これでも人生経

験豊富なの。あなたの目はなにかを決意して、すぐにも動きたいっていう行動力あふれているわねぇ。ただ、代償はもらうわ」

代償という言葉にクリスはびくりと身を震わせる。
貧乏貴族出身で、いまや身一つのクリスに払えるものなどない。
「代償の内容を先に聞いてもいいですか」
「いいわよ。私やデューク、それからギルベールの過去を知ろうとしないこと。これだけ守ってくれたら、あなたを鍛えてあげるわ。破格でしょ？クリスちゃんのこと気に入っちゃったからねぇ」
「私のことを？」
「ええ、そう。精霊を対等に扱う人間は希少だわ。そこの水の精霊さんが言うように、下手に上位契約を結べば、精霊の生命力を魔力の補給代わりに使われるくらい。そうして命が尽きた精霊は消滅するのよ。もっとも、精霊の命は自然に還って生まれ変わるらしいから、完全に消えるのとは違うみたいだけど。生まれ変わった精霊はもう前の精霊と同じ人格ではないだろうし、きっと何年も何十年も何百年も生まれ変わりに時間がかかるものでしょうねぇ。高位精霊ならなおさらに。だから対等にやり取りするあなたが気に入ったの」
「・・・・・・」

ヴァンの力になりたい。
ウンディーネも失いたくない。
なにより強くなって、二度と大切なものを亡くしたくない。

過去を知ろうとするなという台詞には胡散臭さがただようが、こうして面と向かって会話する彼らはまっとうな人間に思えた。
少なくともヴァンを保護して手当てしてくれたのは、間違いのない事実である。

クリスは大きくうなずいて頭を下げた。

「よろしくお願いします、エル様」
「弟子とか生徒扱いでいいかしら？私のことは先生って呼んでねぇ」
「はい、先生」
クリスが笑顔で答えたとき、食堂の扉が荒々しく開いた。

モナドの竜　???

乱暴に扉を開けたのは金に近い茶髪を持つ青年ヴァンだった。
部屋の中をぐるりと見回して、クリスを視界に入れると驚いたようにわずかに目をすがめる。
「クリス、どうしてここにいるかは後で聞くから。とにかくこんな胡散臭いとこから出よう。家まで送るから」

クリスは突然のヴァンの出現と発言に目を白黒させた。
しかし皇帝陛下の依頼を思い出して、はたと我に返る。
「起きたのね、ヴァン。よかったわ。私は冒険者として依頼を受けてあなたに会いに来たの。なにをもって彼らを胡散臭いと評価しているかは知らないけれど、そうそう簡単には帰れない身になったのよ」
「冒険者？君が？学生でしょ」
「冒険者になったのよ。魔術学校は今壊れて休校状態だから、学生は一時お休み」
「そんなに金が必要なら、もっとマシなアルバイトするべきだね」
「アルバイト感覚で冒険者になったんじゃないわ。私は・・・っ！」

言い合いに発展したふたりの間に、キールが割り込んだ。
手を叩いて注目を集める。
「はい、そこまで。状況をつかめないままの口論は不毛だ」

クリスはもっともだと思い、激情から浮かせかけていた腰を椅子に戻した。ウンディーネは何を考えているのかわからない顔で、ぼんやりと机の上の料理を眺めている。
腕を組んだヴァンは胡乱げに目を細めて、扉に背を預けた。
「状況？あんたたちが一般人なら手当の礼でもして出ていくとこだ

けどね。どうも普通じゃない。長居していいことがあるわけ？」
「早急な考え方だな。まずは自己紹介でもしようか。・・・私はデューク。この屋敷の主人をしている。隣に座っているのは妻のエル。ギルベールはふたりとも知っているかな？・・・あと、皇帝の依頼というなら私たちも受けている。君たちとも無関係ではないだろう」

皇帝の単語にヴァンは苦々しそうな表情をする。
玄関に向けていたつま先をしぶしぶ室内に向けて、どっかりと音を立ててクリスの隣に座った。
言外に「話だけは聞いてやる」と表明しているようだ。

先ほどまで寝込んでいたようには見えない動作に、クリスはそっと安堵のため息をつく。
そして、この家の住人をひとりひとり見つめた。
金髪の家主は麗しい美少年で、その奥方は家宰いわく力の強い魔法使い。
家宰以外の使用人はいないようで、すべての家事を彼が担っているようだった。
質を重視した高価な調度品。それから庭の一角にあった菜園も思い出す。

裕福な貴族なら使用人を多く抱え、生活必需品などはすべて市場でまかなうというのに、彼らはこの屋敷内だけで生活を完結させているように感じた。

そのときヴァンが体をクリスのほうに傾けて、小声で話しかけてきた。
「さっきは言いすぎたよ。ごめんね」
クリスも声を潜めて返す。もっとも目の前でにこやかに微笑んでい

る黒髪の奥方には、距離的に声が聞こえているだろうが。
「いいのよ。私も大声で言い返すことじゃなかったわ。・・・本当に無事でよかった」
「うん・・・まあ、今は五体満足だけど死にかけてたらしいよ」
「え・・・」

さらりとなんでもない風に瀕死だったと告げるヴァンに、クリスは固まった。
ヴァンを凝視したまま動かないクリスに、エレオノーラは追加のモンブランにフォークを入れながら口を開く。
「すっかり治ってるから安心していいわよ。少し熱が出てたから、強制的に眠ってもらってたけどねぇ。それも治まってるみたいだから、もう心配ないでしょ」

やはりふたりの会話は丸聞こえだったらしい。
クリスは開き直ってエレオノーラに話しかけた。
「エル様が診てくださったのですか？ギルベールさんから聞きましたが、力の強い魔法使いであられるとか」
「本業は錬金術師よ。魔法も使える錬金術師なんて珍しくないでしょ？学校でも教えているのだし」

上位の精霊が反応するほどの魔力を持った魔法使いで、かつ錬金術師として生計を立てられる人間は希少である。
両方の才能を両立させることはなかなか難しい。
クリスは内心で否定しながら、その能力ゆえに皇帝から依頼を受けたのかもしれないと考えた。
「まずはクリス嬢の話から聞こうか。ああ、私たちに沈黙の命令を守る必要はないから。許可も得ている」
やり取りを見守っていたキールが机の上で手を組んで、クリスとヴ

ァンを見つめた。
クリスは皇帝の言葉を思い返しながらうなずく。
「わかりました。ただ、沈黙の命令の内容も若干変更されております。私が陛下から受けた依頼は、その変更内容をヴァンへ伝えること。そして、これは私からの我が侭で通していただいたものですが、もうひとつ依頼を受けています」

1つ、人工妖精に関する出自のみ秘匿すること。
2つ、瘴気をまく石が行方不明であること。
3つ、犯人が人ではないかもしれないこと。その可能性がますます高まっていることも。
4つ、魔術学校に外部の人間が侵入した件は、学校自体が廃墟となったので無効とすること。
謁見で話した内容を差異なく伝えられるように、言葉を選びながらクリスは話した。

一息ついたクリスにヴァンが鋭く追及する。
「それで、我が侭ってなに？」

クリスは視線を揺らして口をつぐんだ。
ここでヴァンにフードの男の追跡に自分も加わったというのは簡単だ。
しかし彼に拒否されてしまうと、どう行動していいのかわからない。ろくに街の外に出たこともないクリスには、ひとりで旅をする自信がなかった。
それでも彼の己を省みない生き方への枷となって、さらに拙くても魔法を使って恩返しができるなら・・・友人としてこんなに嬉しいことはない。
覚悟を決めて顔を上げた。
「フードの男が今回の犯人と目されているでしょう？彼の追跡に私

も加わったわ。これは皇帝陛下の許可のもと、ギルドも認可している正式なものよ」

ヴァンはぽかんとした表情で口を開けた。

「なんで・・・」

「あなたが無茶ばかりするからでしょう。見ていて心臓に悪いわ。思う存分足手まといになってあげるから、少しは身を振り返ってみたらどうかしら」

弱気な内心に反して、強い口調でクリスは啖呵を切る。

ヴァンは一瞬で硬直から脱すると、眉を吊り上げた。

「クリスのほうが無茶だ！なにやってんだよ！」

怒声にびくりとクリスが身をすくませたとき、くすくすと笑い声が聞こえた。

声の先を見ると、黒髪の奥方が口元に手を当てて机につっぷして笑っている。

「ふふっ、おもしろい子たちねぇ。どっちもどっちよ。若いうちの暴走は経験になるから、いいんじゃないかしら」

金髪の少年が肩をすくめて、やれやれと言いたげに息をついた。

「では、先ほどの話にあったように彼女の教育はエルに任せる。私とギルベールは彼を鍛えようか」

「旦那様、私もですか」

「私が剣を、お前が体術を教えればいい」

「かしこまりました」

面倒そうな表情を隠さないまま、眼鏡をかけなおした家宰が一礼する。

話の内容についていけなかったクリスは慌てて問いかけた。

「どういうことですか？私たちを鍛えるって」
気勢を削がれたヴァンも同意するようにうなずく。
「大きく出たね。それが皇帝からの依頼？だとしたら大きなお世話だよ。Ａランク冒険者を鍛えるなんてね」
「大きなお世話かどうかは手合せしてみればわかるわ」
不敵な笑みを浮かべた夫人が立ち上がった。
「表に出なさい。クリス、あなたもよ。今の実力を知っておきたいからねぇ」
家主の少年と家宰もさっさと背を向けて扉に向かう。
ヴァンは忌々しそうに顔をゆがめてクリスを見下ろした。
「あんなやつらの言うことを真に受ける必要はないよ。俺が３人とも引き受けるから」
「そのほうがいいわ～、クリスちゃ～ん」
それまで黙っていたウンディーネがクリスの前に、ふわりと空中を移動して舞い降りる。
「あの人たちとっても強そうだもの～。特に女の人はすご～く、すご～く、すご～く強いわ～」
「エル様が？錬金術師としても魔法使いとしても優秀ということかしら」
「優秀というか～・・・そうね～。たしか人間の場合はこう言うのだったかしら～。鬼才とか天才とか～」
「・・・・・・」
上位の精霊にそこまで評価される存在。
クリスは額ににじんだ冷や汗をぬぐいながら、彼らの出ていった扉を見つめた。

ヴァンもそちらへ向けて歩き出している。

彼はこの家の住人を警戒しているけれど、クリスにはどうしても悪い人間には見えなかった。

人という生物が善悪のみで区別されるほど単純なものではないと知っているけれど、彼らから害意や敵意は感じられなかったのだ。

クリスの経験が不足しているからわからなかっただけ、と言われればそうかもしれない。

けれど彼らが真実実力者で、皇帝から受けた依頼が自分たちを鍛えることなら、フードの男になすすべもなく惨敗した雪辱を果たせる。

クリスは消えていったすらいむじゅうさんごう達、人工妖精の姿と廃墟となった皇都を思い浮かべて気を引き締めた。

「私も行くわ。援護くらいならできるはずよ」

「・・・必要ないって言ってるのに。怪我しないようにさがっててよ」

「わかってるわ」

頭だけ振り返ったヴァンが諦めたようにため息をついて、己の髪をかいた。

新たに菜園でも作る予定なのか、少し開けた庭の片隅に集まった。

月が真上に出ていて、明るさは申し分ない。

最初にギルベールが預かっていたらしいヴァンの大剣を彼に返却した。

「ご自身の獲物のほうがやりやすいでしょうから。どうぞ遠慮なく真剣で挑んできてください」

「後悔させてあげるよ」

ヴァンは剣を鞘から抜きながら笑った。
その後ろで結界の魔法陣を発動直前まで描いたクリスは、杖を胸元に引き寄せて前を見据える。
「それじゃ、いくわよ」

黒髪の夫人が空中に右手を挙げて複雑な魔法陣を展開した。
それが戦いの合図となった。

結論から言えば、クリスが目まぐるしく変わる風景に酔っている間にすべてが終わった。
夫人が展開した魔法陣がそのままクリスの足元に転移して、そのまま空中にほうり上げられたのだ。
まるで嵐の中にいるように、くるくると体を上下左右に回転させられて気分が悪くなる。
集中を乱されて結界の魔法陣は消失していた。
遥か下の地面からウンディーネの悲鳴が聞こえた気がするが、それに構う余裕もない。

ヴァンたちの声がかすかに耳に届いた。
「くそ！化け物かよ！？」
「なかなか強いけど、脇がまだ甘いな」
「左様でございますね。猪突猛進型と判断いたします」

直後に爆音が響いて、急に静寂が戻ってくる。
クリスはそっと地面に降ろされた。平衡感覚がつかめなくて、よろよろと倒れこむ。
間近に荒い息が聞こえて目線だけ上げると、息も絶え絶えなヴァンがかろうじて四つん這いになっていた。
ウンディーネはさらに離れた地面で、ただの水たまりになっていた。

契約によるつながりがなければ、クリスはそれが己の精霊だとは気付かなかったほどだ。

クリスは混乱している頭でなんとか現状を把握しようと考える。最初に出現した魔法陣は複雑すぎて効用がわからなかった。

――それほどの威力があるものに、高位の魔法である転移を重ねがけして私の真下に展開させた？空に舞い上がったなら風の魔法？いいえ、風だけならあんなに複雑な魔法陣にはならないはず。それに実体がないウンディーネにまで影響するとは思えないし。まさか上位の光か闇の魔法を使えるの？それに転移を同時発動？そんなこと可能なの？

ぐるぐると思考がうずまくだけで答えは出なかった。

月光を背後にした黒髪の奥方がクリスたちを見下ろしながら笑う。

「さあ、これであなたたちは私たちの生徒よ。明日からびしびしいくからねぇ」

その笑みに何故だか、うすら寒いものを感じてクリスは身を震わせた。

モナドの竜　???（後書き）

これもまた弱肉強食とか食物連鎖的な・・・。
逆らってはいけない存在が世の中にはあるんです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3092y/

ギルド受付嬢の冒険

2011年11月29日21時45分発行